年一月廿九日第三種郵便物認可
回一日發行明治卅七年二月一日

歐人の眼に映ずる東亞の風雲

中央公論

第十九年第壹號

要目

THE CENTRAL REVIEW

●讀者に告ぐ

本紙は一部の社員に交迭ありたるが爲めに、諸事動搖して一月發刊の期に遲れたるのみならず、編輯また甚だ不備なるを免れず。深く耻づる所なり。若し夫れ從來內容の調和を欠ぎ、卑俗亂雜なりしが如きは號を逐うて改むる所あらんとす。

文學博
秋濤居
佛國文

小
說

これ十九
ヴィクトル、ユゴ
の嚢に紅
たす稿成
界の人
麗の文
せよ

發
發

…ヴ
…も
絕
他
流
供

印
館

帝國文學は文科大學に緣故ある博士、學士、學生其他諸名家を以て組織せる帝國文學會の編輯に係り主として日本文學の進歩を誘ひ帝國精華の發揚を期するものなり其載錄する所は會員諸士其他名家の寄稿せる論說、詞藻、雜錄、文學史料雜報の外時々講演會を開き懸賞文を募り其講演錄又は當選文を附錄として紹介す苟も我文界の新潮流を知らんと欲せば請ふ之を帝國文學に徵せよ。

（毎月十日發行）

帝國文學

◎明治廿八年一月創刊◎定價一册拾貳錢、六册前金六拾六錢、十二册前金壹圓貳拾錢郵稅一册に付壹錢宛（第九卷第四に限り定價金參拾錢郵稅貳錢五厘）

◎新年號（第十卷第一）一月十日發行

本號に限り約三百五十頁定價金卅五錢郵稅貳錢五厘

新年號目次

（毎月廿五日發行）

丁酉倫理會 倫理講演集

◎明治卅三年五月創刊◎定價壹册金拾錢郵稅壹錢六册前金五拾五錢郵稅六錢十二册前金壹圓郵稅十二錢

◎第拾六輯 一月十五日發行

●本輯より每月一册發行す

現代倫理專攻名家を以て組織せる丁酉倫理會は我國學海の有力なる鰈纉たるや言を俟たず從つて同會に於て硏鑽せし諸說は頓て現時の倫理問題に解決を與ふべき指針たるや明けし本集は之れが機關として發行するもの若夫れ倫理界の消息に通ぜんと欲せば本集を措て他に求むべからず

第拾六輯目次

◉發行所 東京京橋區銀座壹丁目 大日本圖書株式會社

大賣捌 東京堂

◎會員募集

大日本英語學會

會長 子爵秋元興朝君

講師 坪内文學博士外數名

學期 本科、講習科共に一ケ年 **授業料** 本科一ケ月金五十錢一ケ年六圓講習料一ケ月卅八錢一ケ年四圓廿錢何れも初學より授業す

詳細規則書に載す規則書は郵券二錢送付あれば呈す

講習科用講義錄要目

ナショナル第一、二講義　文學博士　金澤庄三郎
各種讀本拔萃講義　文學士　畔柳都太郎
仝　文學士　上田敬
仝　高等師範教授　岡倉由三郎
プツシング　文學士　土井林吉
チエスタフイルト尺牘　文學士　上田敏
文法　米國文學士　岸本能武太
作文　米國公使館飜譯官　杉村廣太郎
會話　博言博士　松田一橋
同　イーストレーキ

東京神田西小川町二丁目
大日本英語學會（電話本局二八六一番）

國語漢文講義

本會の講義錄の實質に就ては既に世間定評あり講義の平易明晰何人にも了解せらるべく親しく博士學士に就て學習するの感あり今日迄に講義紙上に登載し來れる講義其他の科目は左の如し

○增鏡（文學博士萩野由之）太平記（松井簡治）○宇治拾遺（文學士高津鍬三郎）○孟子（文學士松山直藏）○大鏡（藤岡繼平）○左傳（文學士桑原隲藏同宇野哲人）○外史（文學士有馬祐政）○三代集（文學士武島又次郎）○文章軌範（竹村鍜）○日本文學史（文學士和田萬吉）○支那文學史（文學士飯田御世吉郎）○國文釋義（文學士高木尙介）○日本文典（岡倉由三郎）○言語學（岡倉由三郎、文學士藤岡勝二）○漢籍解題（文學士桑原隲藏、文學士中山久四郎）○歌學雜話（文學士芳賀矢一）文部省檢定試驗國語漢文科問題答案○其他各種の有益なる講義

●入學金廿錢會費（講義錄二冊に封じ）卅五錢廿八冊金四圓仝部四四拾八冊金七圓五拾錢●規則書は申込次第送呈すべし

東京市神田西小川町二丁目九番地（電話本局二八六一番）**國語漢文學會**

總裁小松宮頼子殿下　副總裁鍋島侯爵夫人

大日本女學會

極めて確實なる組織にて十年來女子自修の講義錄を發行す

新學期を開き會員を募る目下最も入會の好時機なり淑女たちとく入會あれかし

◎本會は女子敎育の普及發達を圖らん爲に女子必須の諸學科を掲げたる女學の講義錄を發行し種々の事情に支へられ女學校に入學する事能はざる女子をして父母の許を離れず居ながらに通信敎授に依て修業を積ましめ一般女子の地位を高めん事を目的とす

◎本會發行の女學講義は畏くも　皇后宮の御覽を辱うし殊に御歌下賜の光榮を擔ふ

◎本會は第一流の名家をすぐりて諸學科の擔任を囑托せり去れば其講義の有益多趣たる事已に世の定評ある所にて明治二十八年創立以來二萬五千人の講習修了者を出せり

◎本會講義錄は女子素養の程度に應ぜん爲め高等と簡易との兩科に分つ月謝は高等科金四拾錢簡易科は金貳拾錢として入會の節束修(高等科四拾錢簡易科貳拾錢)を要す

◎簡易科女學講義は毎月五日に高等科女學講義は同二十五日に發行す詳細なる會則は郵便はがきにて請求あれ直に進呈すべし

◎女學講義初巻よりそろひあり束脩月謝送付あらば假入會を許し直に送本すべし

第參巻迄既刊

東京市麹町區下二番町三七　**大日本女學會**　（電話番町千三百三拾番）

世界大觀

全部十五册

毎編五十錢
郵税六錢宛

文學士葉山萬次郎先生著

第壹編

露西亞

露西亞は世界の一大怪物也本書はこの怪物を歴史、地理の兩面より解剖し批評する所の宛然たる照魔鏡也

（續刊）

第貳編 支那及朝鮮 文學士 箭内亘先生著

第參編 英吉利 文學士 野々村戒三先生著

第四編 バルガン半島 文學士 上原益藏先生著

巴黎の秘密

小説

佛國文豪シュー著

抱一庵主人譯

定價五十錢

郵税八錢

獨逸文豪シルレル著

文學士藤澤古雪君著

悲劇

オルレアンの少女

金四十錢　郵税四錢

言々血ならざるなく、句々涙ならざるなし蓋し悲劇中の上乘なり。何人も本書を繙き獨逸文學の精髓を味ひ給へ

發行元　東京神田裏神保町　富山房

英學新報社出版書類

英文書簡

本社編纂

新刊 全壹冊（四六判）洋装美製本◉紙數三百五十頁◉正價金四拾五錢郵稅八錢

本書は交際用商業用英文書簡の書き方を最も丁寧に說明し約六百の作例を示したれば人事百般のこと悉く其文例を本書に求むることを得へしもし事に臨みて本書の文例を採り之に適用の修補を加ふれば立ろに己の用務を辨ずることを得べし諸君一本を机上に備へて此至大の便を亨有すべきなり。

英文 英國大家演說集

本社編纂

新刊 全壹冊（四六判）洋装美製本●肖像寫眞版七葉挿入◉正價金三拾五錢郵稅六錢

本書はグラットストン、デスレリー、ロズベリー等英國近時の七大政治家が國論を動かし一世を驚かしたる大演說各一編を蒐集せるものにして讀來り讀去りて文字血あり紙上聲あり肖像亦動かんとするの感あり我同盟國の爲政家の高風に接せんと欲するものは本書を執りて之を讀め。

東京高等商業學校教授 高嶋捨太先生著

◉和文英譯集 正價三拾五錢 郵稅六錢

本書今般增訂再版出來せり

英文討論集

東京外國語學校教授 村井知至先生著

新刊 全一冊（袖珍）洋装美製本 正價二拾五錢 郵稅二錢

討論は言論の花にして字々皆金句々悉玉なり一文一章論理の正鵠を失はず條理明晰にして推論機微に入り寸毫の瑕瑾を存ずべからざるなり此活躍せる言論を英文にて讀まば更に一層の妙趣あるべし是を以て本書は東京外國語學校副用教科書に採用せられ又江湖の歡迎を受くること極めて大なり。

東京外國語學校教授 村井知至先生著

◉英文對話編 正價三拾五錢 郵稅六錢

ハーツホーン女史著

◉アーサー王物語（註釋付） 正價金四拾錢 郵稅六錢

英學新報社編纂

◉ヱノックアーデン 正價金二拾錢 郵稅二錢

村山敏雄先生著

◉和漢名家英譯詩歌集 正價金三拾錢 郵稅四錢

英人リッテル女史 英人コルビー女史 米人グリーン女史 英人ソントン女史 英譯

◉和英對譯日本昔噺 壹冊金拾三錢 郵稅四錢

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

發兌元 東京神田表神保町 東京堂

中央公論

本號目次



正　　　義

中央公論



第十九年
第一號

政治意識の墮落

讀書と反省との缺乏

我等日本人民は如何なる有り難き月日の下に生れたるにや、同じ黄色人種たる支那や朝鮮の民が現今の苦境に沈吟せるに反して、蕞爾たる極東の孤島に偏在しながら、世界の優等人種たる泰西の民が創建したる文明を享有して、將さに彼等と同樣なる幸福を樂まんとす、思ふて此處に至る每に一大奇蹟に遭遇したるの感なくんばあらざるなり。遠く歷史に溯るに及ばず、王政維新以後明治年間に於ける國運開展の跡を察するに、其の道路の平坦にして障碍なき眞に輕舟に乘じて急流を下るの觀あるなり、之れ果して幸乎不幸乎。

夫れ個人にして屢々艱難苦節を經驗する時は、倍々自己を顧み自意識を鮮明にし識見を高邁ならしむるが如く、國民にして偉大なる特性を發揮せんにはまた須らく相當の國難を嘗め苦節を味ひ、靜かに內に省みて過去現在未來に通じて一貫せる國運の發展と理想とに想ひ及ぼさゞるべからざるなり。然るに我等が先輩は之れまで餘りに貧少なる經驗と、低廉なる代價とを以つて今日の國運を開拓したりき。恰も是れ奇蹟が自己以外の他力に依て成さるゝ如く、急流を下る舟人が兩岸の風光を送迎するに遑あらざると一般、茫然として自から己れの爲す所以を知らざるなり。

人往々我が國の文明を以つて皮相の文明なりとし、物質的方面に於てのみ長じたる文明なりとして嘲るものあり。然れども燭望の歎をいへば數限りなし、吾が輩の所見に依れば理工醫學の進步は言ふまでもなきとな

がら、精神的方面の文化と稱する哲學宗教文學美術など、僅かに二三十年間の歳月に仕上げたる仕事として見る時は、必ずしも輕少なる成功といふ可らざるが如し。固より我が國今日の哲學や文學を以つて彼の泰西の藝術家思想家等の製作物に比ぶべからざるは論なけれども、是等の精神的方面に從事する人達は流石に讀書を以つて其の職業となせるものから、兎に角にゲーテや、シェークスピヤやトルストイやユーゴーなどの偉人文豪が有する精緻隱微なる人間觀を咀嚼玩味するに於ておろかはあらざるなり。明治の初年に於てルーソーの民約說やミルの自由の理の半面を丸呑みにして、精神文化の唯一信條としたりし國民は、今や極東の果てに在りながら西人と等しく、倫敦や伯林に於ける大著傑作の出版時期を待つに至れり。我が國人は少くとも哲學や文學に對する意識に於ては、未だ僅かに西人に恥ぢざるなり。誰れか我等を以つて皮相文明の摸倣者として嘲るものぞ。我等は此の點に於て外に向つて誇るべきのみならず、また父祖に向つて誇るに足るべき理由を有す。

然るに却て一國運命の大綱を掌握すべき政治家が、肝心の政治的意識に於て頗る欠くる所あるは何ぞや。議會は出來、憲法は成り、軍艦は噸數を增したれども、今日政治家の理想之れを維新以前の政治家に比べて確かに墮落せるなり。吾人は妄りに過去を顧みる者にあらねども、德川時代に於ては兎に角今日に比べて政治的意識の高等なりしことを見ずんばあらず。假令ば新井白石の如き、松平樂翁の如き、熊澤蕃山の如き、賴山陽の如き皆儼然たる主義見識の仰ぎ見るべきものありき。彼等は今人に比して遙かに科學的智識に欠乏したりき。然れども償ふに一の高等なる政治的理想を抱持したりき。彼等は今日の政治家の如く政治を以て單に分業的實務と見ずして、一の高尚なる藝術の如く見做したるが如し。彼等の所謂治世要道は政治的藝術の絕躰的規範たりしなり。兎にも角にも彼等の政治は實務に非ずして理想なりき。彼等は當今の政治家の如く決して文學なきものにはあらざりき、花月草紙や日

本外史は今日に於て尙ほ文學的產物の上乘たる價値を損減せざるなり。吾人は如何に頭を叩くと雖も今日の政治政論家に斯の如き靈妙なる仕事を望むべからず。德川時代の政治家が科學的智識に於て今人に劣るは正しく時代なり、其の精神は居然として遙かに今人の上に出でたりき。現今の政治家政論家は上流に位して勢力を有するものほど書籍なく文字なし。若し夫れ往々讀書仲間に於て最も粗奔にして趣味低き書籍が政治社會に於て比較的文字あるもの丶產物なりとするに至つては、吾人殆ど言ふべき所を知らず。吾人は極言す、今日の政治家政論家たるものよ、公等が齷齪たる政權爭奪に要する時間を割いて、少しく之れを讀書に費せ、庶幾くは稍々反省意識を刺激して、公等の祖先に辜負するの罪を免るべし。(白雨)

硬鐘の破碎

日露兩國の交涉につき歐洲新聞紙の傳ふるところ屢其實を失するもの有り、事實は露國に戰意無きことを證して而して新紙は即ち危機の全く迫るを報じ、或ひは樽俎折衝の間露人未だ其本音を吐くの意無くして早く已に此彼滿足の解決を豫報す、是れ皆露人一種の政策を試み、詭譎を弄するの餘に出で丶、而して新紙は甚だ無造作に之を傳へて以て眞相を誤るを顧みず。然れども是れ深く責むるに足らざるなり。凡そ虛勢誇張若くは恫喝を以て充たさる丶もの、恐らくは露國の新紙の如きもの莫らん。諺に所謂空聲の能く鳴るものは其れ此れの謂ひ歟。吾人は此の如き空聲の我國人に對して何等の反響をも起すに足らざるを信ずるが故に、復た論辨を費やさざるべし。

我國の北岸一水を隔て丶近く滿州と相望む、滿州に於ける地勢の便否は我れ已に之を審かにす、彼地に於ける露人の欲望と經營とは我れ已に之を知る、駐屯兵の配置と員數とも亦之を知り、河川鐵道の輸送力も亦略之を考量して其決して我れの敵とするに足らざることを熟知せり。是れ我れの之を熟知するのみならず、露人自身も亦よく之を知らん、而して猶之を以て我れを

歴するに足ると稱す、何ぞ其聲の徒らに大なるや。過去五六ヶ月の間屢本國より輸送兵の到着を傳ふ、吾人翻つて之を熟視するに、滿州及び東西比利亞に向つて增遣する所、恐らくは在來兵數の三割强に過ぎざるべし。若し其れ戰艦の增遣は事實なり、然れども浦港以西數千海里の間に巨艦を修繕し、若くは洗滌するに必要なる船渠の設備は現時殆ど皆無に屬し、石炭供給の道未だ備はらず。以上の眞相は即ち彼れに戰意無きを證明して餘り有るなり。世の恐露病者たるもの須らく安心して可なるべし。

事を誤解するものは則ち以爲らく、露國と事端を啓くは英國と雖ども敢へて爲さゞるところ、況や我國に於てをやと。吾人固より好んで事端を啓かんと欲するものに非れども、一言以て世の憒々者流に告げんとす。英國の恐るゝところは英佛相互の關係を慮るに在り、其地中海に於ける、埃及に於ける、將た暹羅に於ける、兩國の關係をして益紛糾ならしむるの機有らんことを恐るゝに在り。是れ近來佛國に親善して以て先づ其解決を試みんと欲する所以なるべく、兩國の親好漸く濃かなるに乘じて、進んで西藏に遠征を試みんとす。彼れが露人の虛勢を意と爲さゞる以て見るべし。而して佛國の由來露に結ぶは獨逸に對するの關係に出て、而して此惡因緣の爲めに露國に對するの債券は積んで百億法に達せんとし、今は則ち露國の倒産を是れ恐れんとす。將た獨逸の露國に於けるも主として獨佛の關係に外ならざるべし。抑も歐洲の强國が露國に寬假する所以のものは、其相互の係累實に已むを得ざるに由り、露人乘じて其術數を試むるの餘地を存す。獨り極東の島帝國に至りては他に何等係累の存する無く、何等弱點の乘ずべき無く、露人千百の術數施すに處無し。

是に於て乎徒らに虛勢を張りて奇功を萬一に僥倖せんとす、姿態愈放肆にして愈其決心の空しきを見る、眞に事端の啓くるを恐るゝもの寧ろ露國自身に在りと知るべし。

然りと雖ども彼れ固より慣用手段あり、殆ど最後通牒

に接する迄よく其虚勢を持續し、縱恣暴慢にして忌憚するところ無きもの是れなり。我れの之に對する直に挑撃的手段を取り、其項を扼して其背を拊つが如くし、速に彼れの本音を吐露せしむるに在りき。而して事茲に出でず、飽迄自重忍耐して各國の同情を確かめんと欲し、正に半歳の光陰を空過せり。此間禮を備へ、辭を卑くし協商の道を盡くす、而して彼れ猶其本意を告げざるなり。若し速に適當の手段を取り、擧國一致威壓して之に迫らん歟、時局の展開は蓋意外に迅速なるべし。抑も極東の平和は世界の平和なり、世界の均しく企圖するところなり、而して最も之を企圖し最も之を樂しむものは我島帝國人なり。是れ已に世界の諒として同情を吝まざるところなり。只其れ如何にして時局の展開を速かならしめん歟、疑問は係りて此一事に在り、然り其解決は今日に迫れり。

吾人之を聞く、昔者巨鐘を鑄るものあり、試みに之を撞くに其音甚だ微なり、之を試む再三、其響猶小なり、衆之を以て無用の長物と爲し、破碎して鑄直さんとす、偶々一人來り見て曰く、何ぞ其れ撞木の小なるやと、乃ち材の堅緻にして偉大なるを擇び、斬りて而して之を撃つ其音洪然として耳朶に充ち、始めて衆人を滿足せしむと。今日の事豈に之れに類する無からんや。

彼れ若し頑硬にして悟らず、終に其狂態を改らんさらん歟、眞に是れ硬鐘破碎の時機に到達せるなり、破碎の災禍と責任とは硬鐘彼れ自身の招くところのみ。而して吾人は猶露國當路者の爾かく不明に非ることを信ぜんと欲するものなり。讀者以て如何と爲す。（一月十一日怪軒記）

戰爭と教育

浮田和民

昨年十二月二十二日倫敦發ルーター電報に、ハノウェルの軍隊大祭に於て獨乙皇帝の爲したる演說中、ハノウェル人及びブリーヘル將軍はウォーターローの戰爭に於て英人を大敗より救助したりとの語あり、爲めに英國に於ては大憤激を惹起せりとの報あり。以上の電報は

單簡なるが、之れには頗る歴史上の理由ありて一朝一夕の問題にあらず。此の電文の意味を解すれば英佛獨の國民的精神の存ずる所を知るを得べく、之れを説明することまた必ずしも無用の業にあらず。

今日の歐羅巴は平和の時代なれ共、今より百年前に於ては佛蘭西大革命の結果、數百年來打續きたる君主制度を廢して、俄に國民全躰が政權を握る事となり、歐洲列國を戰慄せしめぬ。是に於て列國は佛蘭西革命を鎭壓せざる可らずとて戰爭を始めたれども、佛蘭西は革命の結果民心激昂して、正に愛國心の高潮に達したる際なりしかば、列國の連合軍を打破つて佛蘭西外に退軍せしめぬ。加之ナポレオンの出でゝ佛蘭西大皇帝となるや、列國を蹂躙し殆ど全歐洲を佛國の隷屬若くは其領地となすが如き形勢にて、一千八百十五年までは歐洲列國ナポレオンの爲めに軍人も貴族も國民も皆彼れが前に頭を下げざる可らざるに至れり。然るに他の國民は又敵愾心を奮起し、ナポレオンに反抗して遂に有名なるウォーターローの大戰爭をなしぬ。即ち一天才的個人と全歐多數の國民と玆に力を比ぶることゝなれり。我が國史に於ては關ヶ原合戰といふべきものにして、佛蘭西方は十二万何千の軍隊を那翁自ら之を率ゐ、而して歐洲列國の軍隊は澳太利、露西亞、英吉利等にして英吉利、普魯西之れが中堅となり、ハノウェル其の他白耳義、和蘭諸國の兵を合せて總勢二十万と[illegible]しぬ。佛國方は皇帝の戰略を以つて英普の未だ連合せざるに先つて敵を敗らんと欲し、六月十六日遂に普魯西の軍隊を破り、其の將軍ブリーヘルの如き馬より落ちて傷き、僅かに身を以つて免かるゝを得たり。英軍はウォーターローの村に本營を置き、那翁と防ぎ戰ふ。恰も十七日大雨車軸を流し、苦戰奮闘翌十八日午前十一時より午後四時に至つて尚ほ勝敗を決せず。加之佛軍の旗色次第に優れ、今は英國其の他列國方の軍隊の運や危からんと見えたるに、泥濘の爲めに進軍を妨げられたる普魯亞の大同盟軍困難を排して後れ馳せに驅付け、俄かにウォーターローの丘上より突進したりしかば、勝ち誇つたる流石の那翁の軍遂に見事敗戰しぬ。こは八十九年前の舊事に屬すれども、此戰爭に對する英國々民の意見にてはウォーターローの戰爭に流石の大那翁を敗戰せしめたるは英國の力なりと確信し、之れと同じく又普魯西に於ては、獨り英國のみにては勝つこと能はず、英國を死地に救ふて勝利を得せしめたるは實に普軍の後援ありたるが爲めなりと信ぜり。斯の

如くウォーターローの戰爭は今日尙ほ歷史上の問題として三國民の間に爭論となれり。即ち佛國の言ふ所に依れば、固より敗軍はしたなれども戰略に於ては何等の間然する所なく、敗軍はしつゝも尙ほ那翁は那翁として大なりとの國矜心あり、互に誇つて讓らず。是に於て三國は戰爭に付するに各異る名義を以つてし、英國は本營をウォーターローの村に置きたるが故に、戰場は稍々隔てたれども之れをウォーターローの戰爭と稱し、佛國は英軍の中堅がサン、ジヤアンの丘上に居たるを打破らんとて最も苦戰したるが故に、之れをサン、ジヤアンの戰と稱し、又普魯西人は午後五時頃戰場に驅付けてラ、ベル、アリアンスに陣を構へたる佛の中軍と最も苦戰したるを以つて之れをラ、ベル、アリアンスの戰と稱せり。思ふに千八百十五年六月十六日より十八日にかけたる三日間は啻に歷史家の論爭點たるのみならず、三國の國民的感情を激發するの機となれるものゝ如く、第十九世紀の全史上に於て、未だ此の三日間ばかり國民的大爭論の中心點となれるものゝ類例を見ざるなり。

されば獨乙皇帝一場の演說が英國民の大憤激を惹起したる理由のある所を知る得をべし。然ども局外者の公平なる觀察よりすれば、固よりウォーターローの戰勝はウェルリントン及び其の率ゐたる軍隊の勝利のみにあらねども、ブリーヘル將軍が率ゐたる普魯西の軍隊のみにては到底佛軍を打破する能はず、全くウェルリントン及びブリーヘル將軍協力の結果にして、午前十一時より午後四時半まで佛の優勢を支へ、ブリーヘル將軍の到るを待つたるはウェルリントンにあらざりせば或は難かりしならん。かるが故に世人光榮の多分をウェルリントンに歸して、其の名さへも先づ世界一般にウォーターローの戰勝といふに至れるは無理ならぬ事といふべし。

然れども斯の如く僅かの事にすら三國民の惡感情を惹起するは、抑も如何なる事を意味するかといふに、今の文明國民は一方に於ては文學に藝術に其他百般の事物は皆進步發達して如何にも優美なる外形を有すると共に、また尙武の氣象凛として落ちざるを實證するものなり。即ち今の英國民は八十九年前の英國と少しも變らざる事を示し、又獨逸は百年前に於ては一時汚く敗軍したれども、更に盛返へして列國と共にウォーターローに勝利を得たるのみならず、今日に於ては單獨にて佛に勝つほどの武勇を示せり。即ち此の點より觀察

する時は、文明國なるものは恐るべき武力を有せる國なることを記憶せざるべからず。今を去ること五六百年前、歐羅巴に於て未だ火器の發明の十分ならざりし頃は專ろ野蠻人の力強くして、彼の有名なる土耳其が歐羅巴に迫りし時に於て、歐洲の人民皆恐怖して「惡魔と土耳其人とより救ひ給へ」と神に祈りたるが、火器發明の結果は前に強かりし者を弱くし、弱かりし者を強大ならしめ、今や恐るべきは野蠻人にあらず、實に文明人こそ恐るべき戰鬪力を有するに至りぬ。

さて文明諸國の戰史を考ふれば、或國民が勝ち或國民が敗るゝ其の成敗の原因國民の智徳に關する廣義の教育なるものが大なる關係を有することを發見するを得べし。凡そ國民が戰爭に勝つ所以の原因三つあり。

第一政治上及び軍事上に於て天才的人物の顯出する事。

第二其の國民が兵器若しくは兵制に於て他の國民に優る事。

第三國民一般に公共的愛國の精神普及して、非常の敵愾心及び一致團結の勢力を以つて敵國と戰ふ事。

古マセドニアの勃興するや、フヒリップ及アレキサンダー大王父子の天才的人物が二世接續して顯はれ、其の兵制及び軍隊は世界に於て最も整備したるものなりき。ローマの起るや別に非常なる天才的人物とてはなかりしも、彼等は古代に於て比類稀れなる公共的愛國心を有する國民なりき。彼等は君主の爲めに忠義を盡すことは知らざりしも、國法を重んじ、國家の爲めには如何なる艱難辛苦にも打勝つ忍耐力を有し、其の兵制と軍隊との整備せるマセドニヤと雖も遂に及ばざれる所にして、是れローマが西洋に於て古代の列國を統一したる所以なり。

近世普魯西の勃興するやフレデリック大王といふ天才出顯し、且つ普國に於ては列國に先じて兵制を改良したりぬ。即ち列國がまだ彈丸を込める爲めに木造の棚杖を用ゐる時に旣に鐵制の棚杖を用ゐたりき。千七百四十一年モルキッツの戰に於て、普魯西の軍は澳太利の軍が二發するに對して五發を以つて應戰するを得たる爲めに大勝利を博し、遂に歐洲五大强國の一に數へらるゝに至れり。

次に佛蘭西革命の起るや、列國の干涉起り、聯合軍の侵入し來るに際して、新募の佛軍よく之れと防戰して勝つことを得たるは、佛國民が列國民よりも智識に於て進歩したる結果、斯かる大革命を起して貴族や僧侶

の專制政治を排除し、國民一般國家を我が物なりと自覺して奮起したるに依る。然るに列國は政府あるを知つて人民あるを知らず、一般人民は封建制度爲めに束縛せられ、農民は殆んど奴隷の如くに使役せられたりし故に、彼れ等は國家の爲めに戰ふの精神なかりしなり。

此時に際してナポレオンの如き大天才佛蘭西に顯はれ、兵器兵制共に列國に優れたる以て、前後二十年の間全歐洲の覇權を振ふことを得たり。然れども後遂に列國も佛國に習ひ、政治を改革し、兵制を改革し、また一般人民に自由を與へ、其の愛國心を皷舞し、遂にウォーターローの戰勝を得たるなり。

近くは千八百七十年(三十四年前)の普佛戰爭は、前に述べたる戰勝の三原因同時に結合したる好適例を示せるものなり。ビスマークといふ天才的人物の出顯したるは普國が佛國に勝つ第一原因にして、第二の原因はNeedle ganなり。此の鐵砲の發明に就ては奇談あり、千八百六年(九十八年前)エナの戰に於て普國はナポレオン第一世の爲めに打破せられ、國土人民の大半を削取せられたるが、此時ヅライゼーといへる職工の一靑年エナの戰場に橫はれる普國の敗兵が携へたる兵器を見て、斯くては到底佛軍に勝つ能はざるの當然なることと自覺し、忽ち志を決して其の兵器改良の業に從事せんと欲し、巴里に赴き、皇帝ナポレオンの信用したる鐵砲製造人に就て大に研究を凝らしぬ。一日皇帝ナポレオン彼れの師匠に向つて、鐵砲の口より彈丸を入るるの方法を廢して、元込め銃を製造せよと命じたり。此の一事ヅライゼーに取りては生涯の大發見にして、また彼れが本國の將來に大關係を有する事柄なりき。ナポレオンの生存中は遂に元込め銃を戰場に於て用ゆる程の成功を見ざりきと雖も、ウォーターローの戰も濟み、ナポレオンも世を逝り、其の後三十年を經て彼のヅライゼーは本國に歸り、千八百三十五年遂にNeedleganといふ精銃なる元込め銃の完成を見るに至れり。

普國は千八百六十四年丁抹戰爭に於て、此の兵器の如何に優等なるかを試み、遂にヅライゼーを貴族に列せしめたり。千八百六十六年普澳戰爭が七週間にして普國の大勝利となり、千八百七十年普佛戰爭が七ケ月間にして、佛國をして城下の誓をなさしめたるは、一は此の兵器の力に依れり。

然れ共獨乙現今の隆盛は唯ビスマークとNeedleganとの力のみにあらず、普國はウォーターローの戰後列國に

卒先して最も國民的教育に注意し、佛蘭西英吉利其の他未だ普通教育制の行はれざるにに當つて、最も完全なる普通教育を人民に施し、其の人民をして文字を讀む能はざるものなからしめんことを力め、且つ列國に先んじて普通兵役の義務は國民の光榮ある義務なることを知らしめたり。

さて戰勝の第一原因たる天才の顯出は、元より天の爲す所にして致方なきが如けれ共、天才とても偶然に出で來るものにあらず、健全なる社會、公共心の充ちたる時代には古來天才の多くが顯出すること疑ふべからず。故に社會一般に智識分布し、公共心盛なる時に於ては間接に天才の顯出を促し、新器の大發明をなさしめ、平和の事業に於ても戰爭の事業に於ても、國民に大成功をなさしむるものなり。善良なる行政、健全なる教育は國民が戰爭に於て勝利を得る所の間接また直接の大原因なり。貴族跋扈し、富豪專横を極め、一般人民を無視する所の國家は必ず他の優等なる國民に對して敗北すること明白なり。之れに反して貴族は平民を尊び、富豪は貧者を保助し、上下和合して一般に公共の精神を有する國民は、必ず戰場に於てもまた武勇を顯はして勝利を得るものなり。

熟々日本現今の狀態を察するに、立憲政治の世となり。四民平等、種々の腐敗あるに係らず、政治は先づ善良といふことを得べけれども、現今教育制度に就いては頗る改良を要すべき點少なからず。現今の教育制度は官立私立共に小學教育を除くの外、中學教育以上は生徒も教員も學科の繁雜なる、授業時間の課多なる、試驗競爭の激烈なるが爲めに惱殺せられて、教員も生徒も自修研究の餘力なきは勿論、殊に生徒の身體が最も成長發達をなさねばならぬ時期に當つて、教育の爲めに其の發育を害しつゝあるの狀態なり。吾が輩の所見に依れば、此の弊害は全國一般速かに改正を施し、授業時間の如きはなるべく午前三時間位となし、午後は全く體育及び運動の時間となし、試驗の如きも數學語學等二三の代表的課目に就いて毎期試驗を施すやうになし、全國の青年をして成長の後は幾時間工場の勞働人となりても差支へなきものたらしめんことを欲す。

我が國教育の方針たるや、或は總理大臣になるとか或は大將軍になるとか、社會中の一二の人が博奕的僥倖の成功をなすを標準として、無闇にエラクなれと勸めて勉強せしむること、現時父兄及び學校教師の教育の方針にして、其の結果は精神上及び肉體上に非常なる

惡結果を生じつゝあるなり。教育の目的及び方針は、國民の一人として各個人が其の義務を盡し、其の權利を守り得るやうになすを以て肝要とす。善良なる公民になれと勸めずして、エライ人物になれと勸むるが如きは現今敎育的弊害の至大なるものなり。偶々意苦地なき青年に向てはエラクなれと勸むることは方便として必ずしも不可ならねども、一般に功名心を皷舞して無闇に競爭試驗を强ゆるが如きは甚だしき弊害なり。敎育者たるものは其の敎育しつゝある青年をして、平時には精勵なる工場の勞働者たり、戰時には勇敢なる軍隊の一員たるに適當なる精神と身躰とを持たしむることを注意せざるべからず。

又最後に、現今敎育の精神に就て多少弊害ありと思ふは、小中學の生徒を擧げて或は楠公子別れの悲しき歌を歌ひ、或は四十七士の感情談を最も喜ぶの氣風は元より楠公の誠忠四十七士の義心を汲取らするほどは敢て間然すべきにあらねども、今後日本の戰爭は國內の戰爭にあらずして、國際的戰爭なれば、戰場に臨んでも妄りに討死などすることは決して武勇の龜鑑として賞むべき沙汰にあらず。元より戰場に臨むからは討死する事受合はれねども、目的は戰勝をなし、光榮ある平和を贏ち得るに在り。然るに我が國古來武士道の弊として、其の名譽心動もすれば個人的となり、其の武勇動もすれば討死を極致となすの謬想を抱くもの鮮からず。文祿の役朝鮮征伐の歷史の如き最も日本民性の短處を證明せり。加藤と小西とは殆んど同志打ちをなし、其の他の諸將もまた自己銘々の功名をなさんとして却つて太閤の命に反し、日本軍の成功を妨げたり。今日は斯かる弊害は少きほど兵制は進步したれども、現今の日本人も個人としては文祿時代に於ける日本人と異らざる現象を見ること少しとせず。今日朝鮮に於ける日本人が彼の國人に對する擧動の如きは往々にして其の形こそ異れ、其の精神に於ては文祿時代の日本軍人と同樣なる行動に出でたる事例あり、畢竟するに日本人民には强者に屈し、弱者を虐待するの弊大なるが如し。日本人が義俠を尊ぶは却つて其の反證にして、弱者を虐ぐる習慣なければ强きを挫き弱きを助くることを以つて非常の德義なりとして賞讃するの必要なきなり。我が國性民情の弱點として世の敎育者たるものゝ最も注意改鋳を要すべき點なりとす。

寬永十四年島原の賊亂をなすや、幕府は西國諸侯の兵を遣はして之を征伐せしむ、而して江戸よりは板倉重

昌を遣はして全軍に監たらしむ。然るに賊勢猖獗にして容易に平定すること能はず、更に松平信綱を遣はす。板倉重昌平定の功速かならざるを以つて己れの恥辱となし、信綱の到るに先ち島原城に向つて奮進し、名譽の戰死を遂げぬ。是れ日本武士的理想の美談として今日尙ほ傳稱せらるゝ所なれども、アングロサクソン人の武勇及び名譽心は少しく之れと趣を異にせり。數年前英國が南亞の一厩國ツランスバールを征伐するや、人口百万に足らざる小國なれば直ちに征服することを得べしと思ひきや、將軍バッツラルの戰略宜しきを得ずして、屢々失敗を取り、更にロバート將軍を派遣するに及び、漸く成功の端を開きぬ。然るにバッツラル將軍は決して討死などをせず、却つてロバート將軍の下に在りて尙ほ戰爭を繼續したりき。第十八世紀に於て英國が印度に於て佛國と相爭ひ、遂に印度を領有に歸せしめたるは專らクライブといへる人傑の力なり。然るに此のクライブは元來東印度商會の一員に他ならざりしが故に、本國よりは別に將帥として少佐ローレンスを派遣したり。ローレンスは平凡の人なりしも天才的人物たるクライブは彼れの部下に在り、忍んで義務を盡したる爲に、英國は遂に印度に於て大成功をなしたり。之れに反して佛國のド、ブレーはクライブに先つて佛國の爲めに印度征服の可能的なる事を發見し、又其の方案をも計劃したる者なるが、本國より派遣したる他の將軍と競爭して一致の運動をなすこと能はざりし爲めに、彼れが劃策したる印度征服の大膽なる發案は、却つて英人クライブの爲めに奪はれ、英國の利益となるに至りぬ。

今日以後我が國民の名譽心も勇武も今一層擴充して國民的武勇となし、偉大なる公共的名譽心となさゞるべからず。凡そ人の位置は必ずしも其の人の實力に伴ふものにあらず、また必ずしも常に伴はしむるの必要も見ざるなり。故に時としては實力あるものも實力なき人の下に立つことを厭はざる精神を養成し、自已一人にて成功をなし得ぬ場合に於ては、他人の協力を歡迎し、或は其の位置を讓つて其の下に立ち、尙ほ同心協力するの寬裕なる氣品を養成すること最も必要なり。偉大なる國民として、戰時に於ても平時に於ても大成功をなさんとするには斯の如き習慣を養成する教育的方針を取ること最も今日の急務なり。

先づ吾人をして大理論の國民たらしめよ

田中喜一

大醒覺は必らず大煩惱を其の前提とし、大發明は必らず大懷疑を其の前提とするが如く、大實行は必らず大理論の根底の上に建設せらるべきものである。大理論大討究の工夫を積まずして出顯した實行は、一見如何に莊麗人目を眩ずるやうであつても、畢竟するに是れ空中の蜃樓である。沙上の城廓である。生命も性靈も活動も希望もなき落寞たる形骸である。由來我が邦人は洒脫を以て名ある國民であるが、其の弱點も亦全く世態と推移すると餘りに無難で、過去の習慣に執著するとの餘まりに澹泊なるのにあるのである。何事を爲するにも爭闘なく、何事を棄つるにも煩悶はない。すでに爭闘なく、煩悶なし。如何して過去を批判し、將來を討議するの必要なるものゝ生じ來る、餘地があらうか。是れ我が同胞が建國以來、歲月を閲みする淺きにあらざるも、其の人生觀なるものが何時も幼穉なる所以てある。其の理論なるものが何時も陋倭なる所以てある。其の實行の何時も薄劣なる所以てある。維新の宏圖確立せられてより玆に三十有餘年、吾人は今や宜しく世界に雄飛すべくして、猶ほ未だ之れを能せざるは、全く洒脫の國民性之れが累をなすによるのである。世には之れを一概に本邦人が大實行を試みる大氣魂なきに歸して、頻りに實行の精神を扶植しやうと勗めるが、僕は斯の如きは本末を顚倒したものと信ずる。僕は先決問題として先づ大理論を欲求するの大精神を、我が國民間に皷吹せんとするのである。

實は維新の大事業が多くの反抗なく、多くの行き惱みなく、餘りに容易に成就したりしは千載の一大恨事と言はねばならぬのである。彼時こそ東西二種の文明が落合ひ、其結果として我邦歷史あつて以來未曾有の社會改造と政躰革新とが出顯したものであれば、順當ならば、非常な煩悶や、懷疑や、爭闘は自然に生ず來り、我が國民の理論的能力を醇化するとも非常なものであつたらうが、例の洒脫の爲めに至當に受くべき精神上の感化の十分の一も受けずに終つたのであつた。嗚呼不幸なる洒脫の國民よ。斯くしてこゝに復たび我が國民の理論的能力を增長すべき最後の好機を逸してしまつた。維新の諸先輩は吾人の大恩人たることは申すまでもないが、毫しも大革命の根本義を透徹的に批判し

統一せずして、單に日々の急に應ずるが爲めに、平然沒反省的に模倣と點綴とを事とせられたるは、實に殘念に堪ゑぬことである。斯る場合にあつて英人や佛人なら立派に理論上の統一を策し雄渾なる國民的自覺と良心とを作つたと僕は信ぜざるを得ぬのである。僕は我邦の政治に雄渾正大の氣魄なきも、また高潔なる襟懷と英邁なる見識の、我邦の政治家に缺くるも、必然總べての大事業大計畫の前提たるべき、大理論大討究の準備を缺くの一事に歸せざるを得ない。

世上の論者は近時口癖のやうに、日本人は小理窟のみに拘泥するから、列强間に馳驅して往々大事を錯まるのである、渠等を救ふ唯一の福音は、理論をすてゝ實行に就かしむるに在りと云ふが、僕は此の淺薄なる忠言には甚だ不賛成である。僕は本邦人が役にも立たぬ、愚にもつかぬ小理窟小辯論に汲々として居るのも、所詮は未だ不幸にして歐米の大國民等が過去に於て幾度ならず經驗して、雄大なる氣魄と、謹嚴なる良心とを得來つた大懷疑、大煩悶、大爭鬪、大討議、大解決の烈火的洗禮を受けず、隨つて未だ國民として統一的なる、公共的なる大自覺、大智識、大感情に到達せざるによるのであるから、如何に高價であるとも、我國民をして偉大ならしめんとせば、一たびは大に之を大討議、大理論の烈火中に投ずるの必要があると信じて居る。僕は斷言するが、我同胞が空理空論を棄てゝ、大常識、大實行に就くの日は必らず充分に大討議大理論の眞價を躰讀した後のことである。大理論の根底なくしてたゞに大實行あれと世人に勸むるは是れ彼等に對して無意味に盲動し疾走せよと云ふのである。的確なる實行は、獨り森嚴なる理論中のみより、自然に發展し來るのである。

世の實行奬勵論者は、理論の根底なくして能く偉大なる實業を成し遂ぐる國民の標本として、大英國民を舉ぐるを例として居る。成程英人は吾人が師範と仰ぐべき大國民である。併し彼等が理論的でないとは、實に皮相の觀察である。勿論國々に特性ある以上は、其の推理の方法に於ても、趣を異にするは當然のことであつて、英人の推理の方法は、決して獨人の其れ、若しくは佛人の其れと性質を異にするは云ふまでもないことであるが、其れが爲めに、英人は佛人や、獨人より理論的でない、推理的でないと云ふとはない。英人の推論は佛人若しくは獨人に比して、確かに具躰的である、經驗的である、常識である。然し其の結論の跡に就い

て之れを評價すれば、佛人や、獨人の推論より、一層森嚴で、萬永の點が見える、歷代の天才か拮据經營した文學や、科學や、哲學や、美術や、宗教に就いてはていに言はず。單に政理上の思索に就いて看るも、「ベーコン」「ホッブス」「ロック」「アダムスミス」「ヒユーム」「バーク」「ベンタム」「兩ミル」の如きは、長へに人類の華冠たるべき大思想家であつて、其の見識の高遠なる、其の推理の峻刻なる、之れが匹儔たる者を佛獨の政理學者の中に求むるも、多く得難き程の人物である。而かも今日英國民の政治意識の大半は、此等諸賢哲の思想によりて形作らるゝものと知らずや。

由來政治的思索に於て、毎ねに抽象的傾向を取る、佛國の政治界にありては、今日に於ても、「モンテスキユー」「チルゴー」「コンドルセー」「ヂデロー」「ヴォルテール」「ルーソー」等の心血文字が尙ほ其の主腦となり、動力となり、將た精華となり居るとは云はずもがな、北米合衆國の如き實利實益を以て萬事の基礎と爲す國に於ても、猶ほ當年の「ハミルトン」「ジエー」「ジエファソン」等の政治的討議の大精神が、能く今日の米國の偉大と、繁榮とを支持し居るとは尠しく思を米國の政治的機關に致すの士は容易に首肯し得る事實である。我が同胞は決して大實行の國民ではない、また大理論の國民ではない、日本の思想史を洞觀するに、古來二元的偏見によつて支配され來つたので、思想は事實と沒交涉なる存在學的空理の夢境裏に眠ると同時に、實行は思想の大勢力に逢著せずして、經驗的計算の俗境中に跼蹐して居たのである。既にして意志も沈痛なる大意志たらず、智慧も玲瓏なる大智慧たらざると斯くの如くなる以上は、今日の政界に於て高遠なる節操、雄大なる事業の人意を强ふするもの一もなきは至當のよであるまいか。しかし世界の大勢は吾人の大飛躍大覺悟を促して居るからは、大實行を遂ぐる必要條件として、大理論大討究の精神を皷吹せねばならぬ。

人生の究竟目的の、實行にあるとは申すまでもないとてあるが、理論によつて醇化せらるゝにより、初めて盲目的なる衝動も、的確なる主義を有する實行となるのである、人類の文明史を繙けは、衝動や本能を理性化して、實行とし段々に勢力の消耗をを減ずるを得るに至るまでには、無數の歲月と無量の苦心とを費した、文明人と野蠻人との相違は、全く衝動を想化して意思となすの忍耐と克己とのありや否やにあるのである。人物の價値も彼は如何に多くの行爲を爲し得るやの問

題に存せずして、彼は如何なる種類の行爲を爲し得るやの問題に存するのである。

曾て「ヘーゲル」は世の門外漢が、動もすれば甚深なる哲學問題に對して輕々論議せんとする惡習を難して、世人は靴工となつて一通りの靴を造るに至るまでゝさへ多年の修業の入ることを知て居るに拘はらず、靴製造業より一層困難な哲學には尠しも修業の必要がないと思つて居るらしいと云ふやうな事を云つて居る。此の「ヘーゲル」の非難は直ちに移して以て我邦人の政治に對する忘想を破するに足ると思ふ。實に今日我邦の政治家政論者たるものゝ最大過失は、政治なるものゝ本質と作用と範圍とを識らず、又識らんことを勗めずして、徒らに之が實權を握らんとするより來るのである。彼等の多くの無學無識なる、政治は微妙壯嚴極まる神器であつて、決して凡庸人の私すべきものではないと云ふことだけも氣が付かぬやうである。

政治に於ける天才は、矢張り生るゝのである作らるゝのでないと云ふことは、僕も或點まで信ずる。併し總べての天才と同樣、研鑽修養によりて、初めて大成するものであると云ふことも信じて居る。夫れ故僕は苟しくも政治に容喙せんとならば、其必要條件として、哲學的素養より來るところの高遠なる理想と、歷史的事實より得たる博大なる知識とを有つて貰ひたいのである。英國の史學者「シーレー」は、曾つて政治は現時の歷史で歷史は過去の政治であると喝破し、爾來名言として世人に稱讃されて居るが、政治家たるの資格を得るには、歷史的事實を有した上、之を想化するに哲學的識見を以てすることが極めて大切である。今日に於けるが如く、政治が益々分業的となり、局部的と成り行く時代に於ては、單に「プレトウ」の「共和政」中にある哲人だけの資格で、直ちに大政治家たり得るとは僕は信じない。固より其の向き〳〵に應じて、外交、財政、行政、敎育等の專門的知識と、經驗とを積むべきである。併し政治的專門が益々精緻となり、煩瑣となりて、政治が社會人生に於ける本來の面目を沒却し去らんとして居るのは、近世法治の大弊であれば、苟も政治を以て雄を成さんとするものは、是非とも常に人生を總合し、統一し、醇化する、哲學の大理想と、史學の大精神とより、生命と性靈とを享受するの必要がある。

我が邦に政治を己れの職業として居るものは頗る多いが、政治と人生との關係を能く會得し、政治を Kultu

[illegible]の域に進むるを以て、其の極致とするものが果して幾人あらう。我が邦の政治家の利害の念が、政權爭穫に限られ、其の見識が憲法論の上に出づる能はざるは、全く彼等に經國濟民の要具たる、明確なる知識と、高遠なる理想との無き故である。

二元的傾向を以て固有性とする我が同胞は、泰西の煩瑣的政術に接して、益々其の固有の傾向を增長した。今日では、政治は他の社會の修養との關係を離れても猶ほ其の職掌を全ふし得るもので、又外交や財政は他の政治機關との關係を離しても其の職掌を全ふし得るものであると云ふやうなとを信ずるやうに爲つて來た。是れは政治的意識の墮落でなくして何であらう。

模範的政治家が如何なるものであるを知らんと欲せば、世人は宜しく或る史家が「エドマンド、バーク」の政論家としての特長を敍したのを見るがいゝ。

"His theorising is always checked and verified by the test of specific instances, and yet in every special case he always sees a general principle."

と、こうである。日本には何百年經つて斯る哲學的政論家が出づるであらうか。僕は實に我邦の政治の調子の低いのと、政治家の品性の卑いのとは、全く未だ我が**邦人が政治上に理論家の位置を認めないからであると**信ずるものである、

俗人は概して既成事實の崇拜者で、理想の輕侮者であるが、彼等は既成事實の有てる權威は初め理想の附與したものであつて、獨り理想が之を支持する間のみ存在するものであると云ふとを知らぬやうである。既成の事實に超越して理想の最高處より批評し、改造することの出來ぬは、彼等が性來の弱點である。既成の事實に對して根本的評價を下だすとの出來ぬ結果として、彼等の事業は每時も彌縫である、折衷である。讓歩である。大統一、大創設は、決して彼等の能くするところではない。斯くして彼等の捷徑なるものは、其實高人より觀れば最も迂遠なるものになつて居る。

代議政なるものは其れに參與するものゝ聰明を基礎として、初めて其の効用の發揮さるゝ政體である。我が邦人のやうに理論の價値を知らぬ國人が、其の効果を收むることの出來ぬのは、無理のないとである、頑冥なる藩閥の黨與や、黨人中の所謂陣笠連は別として、優に現今の政界に一方の覇たる人々の中には代議政に對して三千載の疇昔、「アデンス」の政治家「ペリクリース」が「アデンス」の政體を誇つて、

"In the practical language of the day, we are called a democracy; and the name is true and not true. It is true, because the administration of our city is in the hands of the people, and there is for one law for rich and poor. It is not true, because, above all states, we rocognise the claims of excellence"

と云つた眞意を解する者が、幾人あらう。僕はこゝて斷言するが幾度内閣が更迭し、幾度政黨が改造されても我が邦人にして、政治は哲人獨り天賦の神權(divine right)によつて、保管するものであるといふことを悟らぬ間は到底改進の曙光は顯はるべきではない。

時局と經濟問題

池田謙三

戰爭の好んで爲すべきものにあらずして、勉めて避けざるべからざるものなるとは自明の眞理にして、殆ど之を論議すべき必要を見ず。平和は實に萬人の期待する所なるも、今や時局は着々進行して又平和の解決を許さゝるに至れり。既に戰爭にして到底免るべからざるの數也とせば先づ起るべきは、**軍費支出の問題**也とす。世間往々今日の經濟界を悲觀して軍費の支出を憂ふるものあれども是れ畢竟杞人の憂のみ、予を以て見れば今日の經濟界程順潮なるは從來曾て見ざる所にして、今日猶戰爭する能はずと言はゞ何の時か能く戰爭するを得んや。今日猶軍費に耐へずと言はゞ何の時か能く軍費に耐へんや、見よ、各銀行の兌換準備は皆綽々として餘裕あるにあらずや。單り銀行の兌換準備と言はず、米作の豐况近年無比にして食物國内に充實せり。且夫政府の豫算を閱するも、大躰に於て緊要の項目を以て充され、兩政整理の如きも世上兎角の批評ありしに拘はらず案外効果を擧げ得たるが如し。斯く今日の經濟界は順潮にして悲觀するを要せずと雖、愈開戰の曉政府が如何なる方法を以て軍費を支給すべきやは蓋し問題ならざるべからず。思ふに開戰の曉政府が日本銀行を始め民間の各銀行を煩すは或は起り得るの事ならん。而して日本銀行は姑く措き民間の各銀行が果して能く政府の要求に應すべきや否やは一概に論ずべからざるも、イザ戰爭となれば國民相戮力一致して事に當るを要し、內訌小爭は最も忌む所なるを以て、政府の要求にして苟くも正當の理由ある以上、民間の各銀行は之に應ずるに吝な

らざるべし。

又軍事公債を募集するも人民も喜て之に應ずべきを疑はず、然れども戰爭中外債を募集するが如きは事實至難の事とす、世には英國が我國の與國なるとを說きて外債を倫敦に募集すべしと唱ふる者あれども、是れ世界の歷史に通ぜざるものゝ言のみ。世界は廣く歷史は長し。而も戰爭中外債を募集し得たるの事例抑も之を何處に發見するを得べきや。要之我國利國權を保護する爲め、戰爭の遂に避くべからざるを知る以上、戰費は如何樣にもして之を支出せざるべからず、其銀行を煩すか、公債を募集するか、將又增稅其他の手段に依るかは臨機の處置に俟つの外なく今に當りて輕々論斷すべきにあらざる也。軍費の財源既に憂ふるに足らず。然らば

戰爭の結果我經濟界の蒙る損害は如何、戰爭中軍費の支出に伴ひ通貨の膨脹を來し物價は一般に騰貴の傾嚮を帶ぶるならんも、之が爲我經濟界が果して幾何の影響を蒙り、幾干の打擊を受くるやといふに、殆ど言ふに足らざるが如し、物價如何に騰貴するも、世界の公定相場なるもの存する限り法外の暴騰を見るが如きは之を想像するを得ず。從て我經濟界が非常の攪亂を惹起するが如きは萬これなかるべし。唯だ怖るべきは戰後に在り。其戰爭が勝利に歸すると失敗に終るとは其經濟界に及ぼす影響蓋し異常の差あらん。斯く戰爭の怖るべきは、戰爭中にあらずして實に戰後に在り。

然りと雖も戰爭中吾人の服膺すべき箴戒も亦決して尠なからず。就中最も注意すべきは戰爭を以て他の事物と混同せざるにあり。夫れ戰爭は戰爭也。他の事物は他の事物也。如何に戰爭中なればとて起すべき產業は之を起し、經營すべき事業は之を經營せざるべからず。若し夫れ吾人は皆其職に忠に、勤儉力行して一日も怠るべからず。彼の戰爭の爲に自家の本職を忘れ、所謂戰爭の奴隸となりて喧囂する者の如きは其罪決して輕からざる也。自ら戰爭の衝に當りて輸贏を天下に決するは軍人其人の任務なり其行動は彼等の自由に一任せよ。吾人は吾人の盡すべき職責を盡せば即足る。如斯にして軍人は始めて後顧の憂なきを得て眞價を發揮するを得べく產業は蔚然として勃興するを得べけん也。若し然らずして軍人實業家滔々相率ゐて戰爭の爲に熱中せば、戰爭は幸にして勝利に歸するも、之が爲に失ふ所は相償ひて或は足らざるを恐る。思ふに

這般の事理や極めて明白にして何人も異辯なかるべしと雖、實際之を行ふは難く、往々にして戰爭の奴隷となりて顧みざる者あり。是れ吾人の再言反覆して世人の注意を喚起する所以也とす。且今後の戰爭は必ず長期に渉るべき豫見なるを以て國民たるもの細心自重、其事に當るにあらざれば最後の勝利を博すると葢し覺束なかるべし。

國民の素養

島田三郎

今は日本國民が極めて神聖なる重大なる任務を年の始に感ぜねばならぬ時機に際會したのであります。昔有名なる學者の徂徠が年頭を門人から受けたことがございます。其時徂徠の家へ行きましたのが徂徠の高弟の南郭といふ人、此人は徂徠の門人の中最文學の長所のあつた人で、徂徠に亞ぐ所の有名な人でございます。此人が元日に徂徠の家を訪ねたら、徂徠が坐り込んで居つて、髭も剃らないで孫子を讀んで居つた、そこで年頭を申さうと思つたが、直ちに書物の話になつて、徂徠は自分が研究しつゝあつた孫子の話をし始めて、滔々として盡きないので、何分御目出度ございますといふ挨拶をする機會が無くて、客も主人も年始の辭を忘れて立別れたといふ話があります。

丁度今日日本國民が誠に目出度いと同時に極く忙しい場合は國民として此兩學者の研究に忙しいのと同じやうな場合であらうと思ひます。色々な忙しいこともございませうが、差向き日本國民が何事を措いても考えて居り、考えねばならぬ問題は日露の問題であらうと思ひます。此講演の席に於て直ちに日露の問題を綿密に論ずるのは場合で無いと思ひますが、此事件に付て日本の人が考えねばならぬ色々な問題が湧いて出ますから、之を諸君と倶に極く眞面目に研究して、如何に此場合に國民が自ら省みて己の責任の重さを感ぜねばならぬか、之に對する態度如何といふことを研究したいと思ひます。そこで私一己の考を諸君の前に述べて之を題として諸君に此問題を考えて頂きたいと思ひます。

之を政治的に論斷いたしますと、色々な驅引もございませうが、此場所は政治の問題を討究する場所で無い、故にモウ些と廣く此問題を講究し、モウ些と高い立場から此問題を考えたいと思ふが、私の觀察に依り

ますると、此事は決して日本と露西亞との間に蟠つて居る政治的、狹き意味の問題にあらずして、モッと廣き見解を下して見ますといふと、或方面からは人種問題と見ることが出來る、或方面からは政軆及國民の氣風の問題と見ることが出來る。どう云ふことが人種問題として觀察されるか、どう云ふ事が政軆と氣風として觀察されるかといふことを少しく說明して見たいと思ひます。

善き意味に於ける人種問題にせよ、惡き意味に於ける人種問題にせよ、大軆の別に於て露西亞は錯雜した人種には相違ありませぬけれ共、此帝國の本部は先づ歐巴に在つて、白人種の一部を形造つて居る國てある、之に對して日本は矢張り東洋の仲間でございまして、歐羅巴人の說て普通人の承認して居る所の區別に依りますれば、黃色人種の一部の日本てございますから、此露西亞と日本と相對しますのは人種問題としては黃色人種對白人種問題と見ることが出來ます。之を惡い方の意味から觀察しまするど、近來歐羅巴諸國の中、殊に露西亞獨逸の間に流傳せられる所の人種の對待問題に於て斯う云ふことを言つて居る。日本の人民は近來歐羅巴の文明を受容れて色々な改革をして文明國の仲間に這入らんと勵みつゝある、或點に於ては旣に其仲間に這入つたが如き形勢をなして居る、併ながら日本國民全軆の性質は、極く戰を好む所の人民てあつて、平和を喜ばざる人民である、モウ些と激烈な言葉を用ゐて申せば、血に渴ける人民である、夫故に日本人民は衣服を歐羅巴風にすると雖も、心術は依然たる蒙古の舊思想を有して居るのであるが故に、日本人民が東洋に勢力を得て、今萎靡して居ります大陸の黃色人種を復活せしめて、之が盟主となつて、軆格に於て能く戰をなし得る、併ながら率ゆる者の無きが爲に四分五裂して居る支那人を指揮誘導して、歐羅巴と對峙するに至つては白人種の爲に由々しき危險であるといふ說が始つた。是れ古來人種といふことに付て一種の迷に深く溺れて居る俗論を動かし易い、唯々議論の上のみならず、實地の問題に餘程影響を生ずる議論てある。是が唯々風說に依つて世の中に傳えられるのみならず、日本が明治二十八年に遼東の地を取る條約を致しました時に、露西亞を筆頭として獨佛が其の左右の羽翼となつて日本の此約束を破ることを企てた所の露西亞の方向から現はれた說で、之を英語の短き言葉に譯してエロウ、ペリル黃禍といふ文字を當てる、一種

恐るべき現象であるといふことを言ひ傳へた、之が爲に日本は支那と一つの如き勢力となつて、東洋に興るといふことから白色人種は各自に別れて居るけれ共、全躰力を合せて此禍を未だ熾ならざるに鎮めなければならぬといふ一種の思想を抱かしめて、是が事實に現はれたのが三國干渉の時の手傳となつたことは諸君の御承知のことであります。

是實に獨逸の權力を持つて居る人の一種の機略に成つたもので、斯く信じてなしたるものかどうかといふことは一種の疑問でございますが、併ながら一たび事實に試みられたには相違ないのでございます、又た此の如き迷に付ては極めて冷淡で、自由の思想を持つて居る國民の相當の代表者が此説を世の中に傳へたことを記憶いたします。色〻の方面に現はれたでございませうけれ共、其中の二つを私は今日引用いたしまするといふと、英吉利で相當の智識ある人の思想を支配して、相當の讀者を持つて居ります雜誌「スペクテーター」が此説を持つて居つた。英吉利の或種類の人は日本に向つて極めて好情を呈して居りますけれ共、此點丈けは一種の主義を持つて居て、此問題に付ては極めて舊き説を持つて居る、スペクテーターの記者が矢張り黄色人種の勃興する先導は日本人だ、彼は外形に文明を裝うて居るけれ共其實は依然中古歐羅巴を蹂躙した、東洋の武を好み血に渇ける人民の精神が殘つて居る、恐ろしいと言はんばかりの説を作したのが英吉利の中等以上の智識ある社會に勢力を持つた記者の説であります、全躰の英吉利人は日本に向つて好情を持つて居りますが、其國に於て此の如き説の出るといふのは眼を屬すべきことゝて、啻に此記者の説ばかりでは無い、之を讀んば同感同情を持つて居る者が此間にあるであらうと信ずる。

モウ一つ亞米利加の「ハーバース」の雜誌に同じやうな議論を書いた。近日佛蘭西の相當に讀者を持つて居る記者が斯う云ふやうなことを書た。勿論其中には政略上文筆を以て露國の勢力を助け、日本の勢力を落す爲に書く者もございませうが、或者は本當に心に信じて此の如き説を作す者もあるであらうと思ひます。併ながら大畧區別して見ますると、英人、米人は大抵此此の如き説に迷はされる者にあらずして、一時スペクテーターが數年前此の如き説を出しましたけれ共、今日は英吉利は全く此の如き迷が散じて仕舞つたやうに私には見える。之を能く考へて見ますると、日

本人種が大に考へなければならぬ問題でございまして、明治二十八年に獨逸の邊から此論が出て、それから後英吉利の有力な雜誌、亞米利加の有力な雜誌に此の如きものが見えた、のみならず今日も獨逸邊には未だ政畧上此の如き説を隱然助けて之を煽動する人もございませうが、亞米利加、英吉利では此の如き説は勢力を全く失つて仕舞つた、之を失つた理由も日本人が平生事の無い時に之を考へたら一の訓戒に供するに足ると思ひますから、此事を御話したい、是人種に對する所の一の問題でございます。

モウ一つは自由對專制の問題である。東洋に唯一の立憲國がある、即ち我帝國で、他の東洋諸國には未だ其萌芽も無い國の多きに拘らず、人口の多數なるに拘らず、立憲政躰を見ない、其確立して居りますのは幸いに我帝國一つでございまする。歐羅巴諸國には半獨立國と言はれる位のものが矢張り立憲政躰を用ゐた、例へばバルカン半島の中に新たに芽を吹きました小國と雖も矢張り立憲制度を用ゐました、此の永く立憲政躰の繁昌して居ります歐羅巴の中で尚擅制政躰を基本として立つて居りますのが二つあります。一つは土耳其で、一つは露西亞であります。土耳其は他の點に於て歐羅巴の大國が同等に之を待遇いたしませぬ、矢張り野蠻國の待遇を以て治外法權を此中に行つて居りますから、先づ之を取除けて仕舞ひますといふと、大國の列に居つて諸文明國と同等の交際をして居つて、歐羅巴の版圖内に殘つて擅制野蠻の氣習を帶びて居ますのは、他の國にあらずして今日日本と或點に於て對待して居ります露西亞の一國でございます、さうして見ると玆に奇妙なる對照の現はれて來るのは、東洋諸國中第一の立憲帝國となつた此帝國が歐羅巴諸國の中唯々一つ殘つて居る擅制帝國と丁度東洋の方面に於て相對するといふ事でございますれば、此消長といふものが立憲對擅制、自由對擅制といふことの取組になるのでございますから。一方から言ひますと白人種對黃人種の爭、一方から言ひますと自由對擅制の爭となるやうな形勢になつて居りまするが、先づ以て此人種の上に付て此の如き惡感情を持つて居り、又此の如き迷を持つて居りますのを、日本國民が大躰の道理からして彼等を醒覺せしめなければならぬと思うて居ります。是單に日本民族の爲に此の如き勞を執らねばならぬといふ譯では無くして、地球の上に成立つて居ります人種の區別に泥拘する迷を彼の白人種をして醒覺せしめな

ければならぬといふのが、日本國民の負うて居ります人類に對する一大義務であらうと思ひます。

專門の人種學者は色々に申しますけれ共、世間で一番見易い區別の一點は身躰の膚の色である。此膚の色の異ることが何も人間の權利、人類に對する權利に異同のあるべき筈は無いので、左樣なことは迷であると一言喝破して斥けなければならぬ。人の人として重んぜらるゝ所の問題は、心術の上の問題で、行ひの上の道德問題であつて、それの優つて居るのが文明國民であります。故に之が進んで居るものは他の點に於て異るに拘らず、是は文明國民の部類に入れなければならぬ。此點に於て缺けて居る者は其膚色の如何にも拘らず野蠻の部に組入れなければならぬと思ひます。不幸にして是まで膚の異つて居る者が他の點に於て劣つて居つたが爲に之と附會して膚の異るが爲に文明の系統も異るが如きの迷を生じたので、歐羅巴諸國の人は餘り己の地方にばかり眼を着けて、我佛尊しと思つた早計淺薄なる見識なりと斥けなければならぬと思ひます。之に付て私は事實の上から此迷を解くの必要があると思ひますが、全躰人の容貌の色々異りますのは、永き年代の變化と四邊の境遇が此變化を手傳ふものであるといふことは何人も承諾する所であつて、歐羅巴諸國の人が印度或は濠太利亞の熱い部分へ移れば次第に元の歐羅巴人種の膚色を變するのは何人も事實の上で承諾する所であります。是等の細かい點を一々地方に依つて分けるといふことは本論の餘波に渉りまするから止めますが、極く人の知つて居ります二つの事實を以て私の議論を強めなければならぬと思ひます。

今日墺地利帝國の一部分を形造つて居る彼匈牙利は如何なる者が人民として其領地の多分を占めて居りますか、歴史上何人も異論の無い所が中古の時代に亞細亞の平原から攻入つた匈奴人種があの土地に落著いたもの、尤も四邊に色々な人種が入り雜つて境を接して居りますのと、人種の移動は代々ありますから匈奴人が匈牙利人であるといふとは言い過ぎたことでございませうが、匈奴人種の子孫が多數を占めて居るといふことは何人も異論の無いことであります。此點から申しますと時は唯今文明の上流を占め、或場合には義旗を飜して墺地利帝國と離れて獨立をしやうといふ勇敢の氣象を現はし、或場合に於ては殊に其都府を飾り、自治の標本として歐羅巴諸國の人の評判するブダペストの文明、並に此都を中心として四隣の匈牙利の人文は決

して他の歐羅巴のそれと優に相列する丈けの位置を占めて居るのであります。往年墺地利の虐政を免かれやうとして義旗を飜した時に歐羅巴諸國の人は之に同情を表して、其義士コッスートが本國を逐はれて英吉利へ這入つた時に英吉利人は大に之を優遇した位、其民族は優に文明の仲間に這入つて居る。其根源を尋ねて見ると亞細亞の平原から出た匈奴人種であつた。詰り人間の有様は其人々の進取の氣象と其境遇の如何に依て變ずるもので、野蠻の人が段々文明になつた。啻に此の匈奴人種の子孫たる匈牙利人が然るのみならず、今日文明の上流を占めて居る人種も嘗て北方の森林を飛び出して歐洲の中原に這入つた時の有様を今日から見ますれば、野蠻極まる所の人々であつたことを考えて見たならば、現在の有様を以て、殊に氣候の變化に依つて色を異にする、膚の異同を以て彼は野蠻なり、彼は文明なり、彼の興るは恐るべしなどゝ言つて人の文明に進むのを見て妨げを入れるといふのは、實に人類同等の觀念に對して恥づべき野蠻の思想を彼自ら吐露するものであらうと思ふ。（以下次號）

（右は氏に乞ふて演說を筆記せしものなれば文責は記者に在り）

時局雜談

高田早苗

今日は多くの人が日露開戰になるか否かといふことに迷ふて居る時であるが、外交の事は一切機密で、現在何ういふ有様であるか、當局者の外何人も窺知る能はざる所である。從つて戰否何れに決するか何人も斷言することは出來ぬ。併し聞く所に依れば露國は、滿洲はさて措き、朝鮮に於ても北半は己れの勢力範圍に置かうといふ積りであるといふから、到底樽爼の間に此の問題が解決されやうとは思はれぬ。

今假りに開戰になるとして見た所で、我が國に勝算があるか無いかといへば、今日の處何人も勝算がないといふものはなからう。開戰の曉に於ては大躰の勝敗は海戰を以つて定まるものと見なければならぬ。夫れに就て多くの點に於て、日本は露西亞に比して利益ある地位に立つて居ることは明かである。軍艦の噸數に於て現在彼我殆んど相匹敵して居るとするも、日本が實戰の經驗を有せることは何よりの强味で、又此度戰ふ舞臺が前の舞臺と殆んど同一で、從つて場處馴れて

居ることも强味であるといはなければならない。

露西亞が地中海の艦隊を極東に派遣するといふが、之れは頓數に於ても多寡の知れたもので、又た黑海艦隊はダーダネルスの海峽を通過しなければならないので、其れは勿論英國が默過する氣遣ひがない。故に遠からざる未來に於て、日露開戰の塲合となつても、吾が同胞たるもの深く憂慮するに足らぬことゝ思ふ。

さりながら露西亞が侮るべからざる大敵であることは、また思はなければならぬ。全躰歐羅巴の强國は大概露西亞に對して爭ひを避けるを以つて其の外交の方針を採つて居る、假令ば獨乙の如き一面に於て中原に覇を唱ふるが如き外觀を裝ひながら、他面に於て露西亞の鼻息を窺ひ、阿諛至らざるなきが如き有樣である。佛蘭西の如きは自由平等博愛を建國の精神とせる國柄なるにも關らず、露西亞と同盟し、時に依りては殆んど臣從するが如き陋態に陷つて居る。此等の事實に考へて見るも、此の露西亞なるものが何處かに恐るべき處がなければならぬ。其の恐るべき點は何處であるかといふ事は、所謂敵勢を審にするといふ上から吾々が研究しなければならない問題であると思はれる。

私かに考へる所に依れば、露西亞の恐るべき點が二つである。第一は氣候である、ポール皇帝嘗て人に誇り、吾が國には一月將軍二月將軍あり、此の二將軍の存する間は如何なる强敵と雖も恐るゝに足らず、と言つたといふ話がある位で、誠に其の言の如く、露西亞が人に恐れらるゝ第一の所以は其の天然の地勢、之に伴ふ氣候であると思ふ。彼の大ナポレオンも此二將軍に敵することが出來ずして一敗地に塗れた譯である。攻むるに難く、守るに易しといふ天然の形勝が、從來露西亞をして他國の憚る所とならしめた重なる原因に相違ない。併しながら此の點は我々日本人に取つては深く恐るゝに足るまいと思ふ。何となれば如何に凜烈なる寒氣と雖も、防寒の用意十分なれば之れを防ぐことの出來ない譯がない。ナポレオン時代の如きは今日から見ると全く防寒の工夫が十分に發達して居なかつたことは殆んど推測せらるのである。又露西亞の內部が如何なる防寒の方法を講じても遂に進軍することが出來ぬにしても、此度の戰爭に就て言へば一向無關係の事である。いふまでもなく日露干戈を交ゆるに至つても、懸軍長驅して深く彼れの內地に進入し、西比利亞を越へて遂にピータアスバルグ又はモスコウに達するなどゝいふ必要はないので、滿洲方面に於て戰勝では其の

目的は即ち達せられた譯である。而して此の滿洲方面なるものは、日清戰爭の當時に於て既に經驗せる戰場にして、併かも十二月一月二月の嚴寒なる時節に戰つた實驗を有つて居るのである。又其の當時の經驗上から、滿洲に於ける防寒の用具は一層整頓せることを疑ぬは。從つて露西亞隨一の武器と恃める雪や氷やといふものはさまで恐るゝに足るまい。又た聞く所に依れば、雪や氷のある間は、却つて滿洲は好戰場であるが、三四月の候になり是等が溶解するに至れば、道路の泥濘の爲めに甚しく進軍を防げ、遼河の如きも冬期は堅氷の上を往來するに差支へはないが、初春の候になると氷が溶けかゝつて渡行に困難を來すさうである。

要するに世界をして露西亞を恐れしむる第一の原因は、吾々日本人に取つてはさまで驚くには足りない、が茲に今一つの露西亞人の長所と認むべき點がある。即ち根氣の強いといふ一事で、ナポレオンが露西亞へ侵入した歷史を讀むと、佛軍が露境に入るや、露軍は之れと對峙して敢て戰はず、漸次に退却して遂に敵をして難なくモスコウ府を占領せしめ、人の知る如く、彼等は俄かに火を放ち、敵の苦めるに乘じて初めて兵を用ゐて攻擊し、遂に大ナポレオンの軍を全敗せしめたのである。

露西亞中興の名主ピーター大帝とスキーデン王チャールス十二世と戰ふや、恰も漢の高祖と楚の項羽との戰に似、項羽七十餘戰皆勝つたるが、垓下の一戰に脆くも敗衂したと同じく、ピーターはチャールス十二世との戰に於て殆んど一回の勝利を得た事がない、然るに最後の一戰チャールス遂に破れ、僅かに身を以つて土耳其に逃れた。是等の事蹟は軍隊を率ゐる大將の性質如何にも依るかも知れないが、また露西亞人が、耐忍力に富める人種なることを證するものと見て差支へない。又彼等は或場合に大なる決斷をなすことがある。即ちナポレネンを燒討せんが爲めにクレムリンの宮殿をも兵火に失せしむることを辭せず。クリミヤの戰に於て、英國の艦隊セバストポールを攻擊せんとするに當り、露人は我が軍艦の遂に防戰する能はざるを知つて、數百万金を費したる數隻の戰艦を惜しげもなくセバストポールの港口に埋め、英艦をして城砦に近づく能はざらしめた。

我が日本民族は決斷力に於て、やはか露人に劣らざるまじけれども、根氣強く耐忍力に富めるといふ點に於て、また戰ふべき時には戰ふが、戰ふべからざる時に

當つては如何なる屈辱を忍ぶとも決して戰はず、只時期の到るを待つといふ性質に於て、餘程注意しなければならぬと思ふ。固より素人の容喙すべきことではないが、策戰計劃といふものも是等の點に注意を拂ふて其の方略を案すべきものではあるまいか。

先づ大躰に於いて日露戰爭は、日淸戰爭の如く手取り早く形付くものと思ふてはならぬ。固より大勢上勝算は歷々たるに相違はないが、場合に依りて一度や二度の怪我敗けは無いとも限らぬ。故に軍人も國民も一時の勝利に喜び、一時の敗北に落胆するやうなことなく、最後の勝利を目的とし絕東永遠の平和を克復するの大覺悟を抱かねばならない。

それに就けても誠に憂ふべき事は、外交の成行の更に國民の間に知られずして、所謂外交の機密なるものが極端に保たれたる一事である。

今日の國民は何が爲めに戰はざるべからざるかといふ公明なる理由を知るにあらずんば、十分なる敵愾心を奮起することが出來ないのである。勿論開戰の曉に至れば、其の戰はざるべからざるの顚末は固より公にせらるゝ事であらうが、一時に激發したる元氣は得て冷め易い憂がある。國家百年の大計の爲めに、身命財產を擲つて公に盡さねばならぬ場合を目前に控へたる今日であるから、當局者たるものは、適當なる場合に於て、時々外交の成行を國民に示し、漸次に強大なる決心を固むる餘裕を與へたらば好からうと思ふ。外交の機密は何れの國に於ても大躰に於いて政治の原則であるに相違ないが、今日の日本の如く外交の顚末を闇から闇に葬つて、外務大臣の失策と成効とを毫も國民に知らしめないといふ國は、世界に其の類例の少いことゝいはねばならぬ。

ジェームス、ミルの人生觀

（ジョン、スチュアート、ミルの自叙傳

彼れ謂へらく、人生失敗の多くは之と現世の快樂を過大視するに基づけるなりと。されば古希臘の哲學者等が廣き意味に於て克己節制し凡べて放縱なる行爲を緩和すること—を主張したると同じく、彼れもまた之れを以つて教育の中樞信條としたりしが如し。彼れは靑春の好奇心に充ち、若き空想に醉へる時代の過ぎたる後は、如何に幸福なるものと雖も、遂に人生は效果なきものに外ならぬことを信じたりき。彼れは屢々之れを口にせざりき。特に靑年に向つて之れを語らざりき、然れども一度語るや常に動かすべからざる自信を以つてしたるが如し。

海外新潮

海外大勢

歐人の眼に映ずる東亞の風雲

▲日本の態度

「十一月三日」「グラスコー、ヘラルド紙」「ヘンリー、ダイエル氏」

グラスコー、ヘラルド記者足下、極東に於ける事局は近時の新聞紙上に於て尤も注目すべきことゝなれり。然れども其記事の大半は誤謬附會に滿ち眞に日本の智識を備へ、其國狀を審かにするものは、何人と雖も義憤と苦痛なくして讀了する能はざるものなり。外國の港灣には大抵通信員なるものあり、而して彼等は興味ある性質の珍聞を捏造し、多大の費用を以て歐米に之を送附するを彼等の義務と心得居ると見えたり。主筆及其他の記者は此虛僞なる誇大なる報知を聞き、其れに已れの想像を以て彩り、事件の眞相を傳ふるよりも、寧ろ咆哮して其賣高を增さんとし、麗々しく論說を作りて此れを其紙上に掲ぐるなり。

予は屢々自由出版を祝福するの聲を聞けり、然れども近時の新聞雜誌なるものは、多くは世界平和の最も大いなる攪亂者となれるにあらずやと疑はる、然れどもグラスゴー、ヘラルドの如きものが四方に流布して、正當なる智識を有する讀者を得、漫りに咆哮し、誇大の題目を掲げて賣高を增さんとするが如き企圖にして跡を絕たば、予の言が正に杞憂に屬すべきを欣ぶものなり。

勿論相嫉視の狀態が一時に於て極東に存したりしことは、許さゞるべからざる事實なり。然れども其危險は新聞紙の平衡を失したる題目によりて甚しく誇張せられたり。日本の態度に至りては殊に甚しく誤傳せられたり。予は日本が開戰を好まず、又土地の增殖を目的とし、近隣の不幸をも省みずして利益を計るものにあらず、却て平和の維持、商工業の獎勵及び獨立の体面によりて、近隣諸國相互の利益を計らんことが、政府及び人民の眞摯熱誠なる願望なることを充分なる根據を以ていひ得べしと信ず。

然れども外國人との短き交際は、日本人をして强大なる陸海軍は、實に其國民的權利を保持する唯一の要具なるを悟らしめ、此の事情の爲めに制せられて、日本は其收入の大部を軍備に費さし、遂に予をして「日本海に入りて日本を襲擊せんと敢てするものあらば、奇妙にも歸討の目に逢ふべし」と考へたるチヤムバレン氏と同一の見を抱かしむるまでに發達せり。

然れども予の目的はたゞ徒らに日本の國勢を論ぜんとするにあらず、實

に英國に於ける數多の新聞によりて傳寫せられたる、「アメリカン、ジョーナル」の載せたる記事を見て憤慨に堪へず、聊か其妄を辨じて日本の態度を明かにせんとするにあるなり。其記事次の如し、

日本は大英國にとりては露國を監制し、英國出來の軍艦を購ふが爲に存する民族に過ぎず、國は只僅かの小島より成り、民は小なる褐色種、而して海軍を有してより以來、何物にか喰てかゝらんとあせりつゝありしが、今や露國に對して宣戰を布告せば、其機を得たりといふべし。此事件は、英國にして紙箱の如き小國を助けんとするにあらずば、久しきに亘るべきものにあらず、又重大なる問題にもあらず。

と若し日本に就て淺薄なる意見が公衆に保たるゝに非ずば、予が輕侮の念を以て引用せる以上の記事が、各新聞によりて認許せらるを決してなかるべしと信ず。世の傳ふる所によれば、鴨綠江畔に響ける大砲の音は、實に極東に於て新國民の出產したる事實を示して、歐米の人士を覺醒せしめたりといふに非ずや、然れ共覺醒の範圍は未だ極て狹少にして、人民の多數に及ばざる也。何となれば彼等の多數は、未だ日本人を目して侏り多き、利慾に敏なる、奇物をなすに熟達せる人民にして、其他に於ては一點の取所なきものと解し居るにあらずや。予の見る所を以てすれば、日本の勃興して中



THE COLOSSUS OF RHS.ODE
The original has fallen, but a duplicate is astride of Panama.

原の一員となりたるは、決してかくの如き皮相の見によりて說明せらるゝものにあらず、實に十九世紀末に於ける尤も重大なる政治上の事實なり。僅々三十年の短日月に於て、日本は封建制を打破して堅固なる軍隊を整備し、一朝事あれば其勢を以て世界の國民を動かし得る程の位置に達し、殊にあらゆる極東問題に於て取りつゝある其態度は實に予の嘆美措く能はざる所なり。更に商工業に於ては日本は已に重大なる發達をなし、太平洋沿岸地諸國に起りし進步中、尤も須要なる代理商たる事實を示したるにあらずや。

今玆に予の意見を發表せんは、勿論予のなし能はざる所なり。然れども予は三十年以上日本と密接なる關係を有し、予の教へたる學生は、今現に國家經營の各方面に活動しつゝあり、予は以上の說は充分なる智識と權利を有するものなること斷言して憚らざるなり。英國領事の報告の閲讀は稍々事の顚末を知らしむるに足ると雖も、隱微なる所に至りては政府派遣の官吏報告などによりて解せられ得べきものにあらず。數日前予は農商務大臣の秘書官より、「廿世紀初頭に於ける日本」と題せる册子を送附せられたり。日本に就いて淺薄なる智識を以て論斷する人士に向て、予は其一讀を請求せざるを得ず。貴紙の餘白を借ることの餘りに多きを恐れて、予は此書の內容の目次をも揭

ぐるを得ざるを惜しむ、たゞ予は日本社會上工業上美術上及び政治上何れの觀察點よりするも、現今世界中の尤も興味ある國にして、其駸々たる進歩の前程は、決して戰爭によりて破壞せられざらんことを望むの念に堪へず。然れども若し戰にして開かるゝことあるも、日本は無論自ら其問題を解決するの明あるものなることを信して疑はざるなり。

▲極東の危機

「十一月十二日」　「ウエスト、プレッス、ドライスト紙」

極東の雲行日に益々急にして樂天論者が豫想し又は願望せる如く速かに晴天白日の觀を呈べうも見えず。バルフオル氏が彼の官邸に於て語りて曰く、極東の時局にして若し深き心配を惹起せずは、却て吾人に反省の好資を與ふるものなりと。首相が前言を語りてより以後も、其形勢いよ〳〵穩やかならず、深く外交界の內幕に通ずるものは皆商議の面白からざる方向に進みつゝあるを見るなり、バルフオル氏は、此問題の恐らく平和に歸すべきを唱へ、其理由として露帝が甚しく平和を愛し、思慮人に絕し、節慾宜しきを得、決斷衆に超ゆるは世人の知る所なりといひ、大に露帝に信賴せり。

予猶と雖も露帝が大局を洞觀するの明あり、又極東の平衡と稱する名の頗る耳に快よくして露帝が其平衡に勉めつゝあるは毫も疑を容れざる所なり、然りと雖も露國には露帝の此意志に反する强大なる勢力あるを奈何せん。彼若し獨力國勢の調理に任ずるを得ば彼或は其仁慈なる政策を施すを得べけんも四邊の事情は彼の力を以て防止する能はざる程强大なる力を以て彼を壓遏するを奈何せん。ラムスドルフ伯は露國の外務大臣たる職を辭すべしとの風說昨日の紙上に流布せられたり、而して此風說は露帝が獨帝に會見せる後直ちに發せられたるものにして、伯の其職を辭すべしといふも、此會見が確かに吉兆を示せるものにあらずと豫想したるによるなるべしといふ。此會見の精細たる意味は深く外交の機密に通ずる者にあらずば知るを得ずと雖も、其唯一の結果は極東利害問題に關しての獨と露との同盟締結なるべしと唱せられたり、佛の緣者たる露國が獨の援助か求め、又獨は歐洲の事情に於て反對の意向にある一勢力と結合を望むは理の當然にして何の怪しむべきことなし。極東問題に於ける露獨同盟が事實として成立するか否かは、是れ實に此計畫がラムスドルフ伯によりてなされたるか又露帝によりてなされたるかを闡明すべき唯一の鍵として最面白き問題なり。若し此企圖がラムスドルフ伯によりてなされ、且又世人が唱ふる如く露帝が甚しく極東の平和を維持せんと望まるゝ人とすれば、ラムスドルフ伯辭職の風說はよし實際發言せられざりきとするも、極東の混亂に關しては露國は決して外國の力を藉らず、又他方に對する威嚇として解釋せらるべき準備に反對せんとの露帝の意志なることを知るに足るべし。

露と獨との同盟は極東の强壓的政策の遂行に於て、英國と戰場に相見ゆるの結果を生ずべし。何となれば英は二國以上の勢力が日本の皇帝に對して宣戰を布告することあらば、日本を援助すべしとの條約を締結したればなり。若しかゝることあらば佛の位置は孤獨となるべし。佛は露に緣者たるによりて束縛せられ、又現に近來結末を告けたる仲裁條約の理によりて、英に出來得る丈け平和の態度を取らざるべからざる位置にあればなり。佛と獨とが同じ味方となりて英と戰場に見えんといふものあらば、實に奇怪の言なりといはさるへからす。若し露と獨とが東洋に於て一致して動作すべしと協議したりとの說を眞なりとせは、此間の事情實に復雜となるへし。而して獨と英とは同しく支那を完全無缺に保全すへし

と約しあることを回想すれは、此紛糾は益々錯綜したるものとなるへし。

支那の保全は已に露が滿州を掠し、又其結果によりてなされたる數多の約束に拘らす、州の要港及び都市を開放するを拒絶したるによりて破却せられたりといふへし。我英國が現今の秋に當りて避くるを望む一物ありとせは、そは英が與からさるへからさる戰爭の開始なるへし。

租税の騰貴は南亞米利加の戰爭の再發、又支那に於て避くへからすと考へられたる過度の軍備擴張等より、今に於ても未だ其舊に復せす。サマリランドは已に收支相償はす、又ムラーか英國より伊太利地方に追はんとするに猶多くの費用を要するあり、コロネー岬頭に於ける土人一揆の遺物は時を待たすして發せんとしつゝあるなり。極東に於ける戰爭は誠に巨大なる企圖なり。

若し英にして其戰に加はることあらは、よし不時の出來事の爲めに其範圍を擴張せさるへからさることありとするも、重もに海戰に關してなることは論を待たす、然らは少くとも吾人の反對に立つ一つは露國にして、之が爲めに印度國境の安全も亦充分保護せられさるへからす。斯くの如き外交上の商議に直接に關せざる、他の勢力までも含む極東の戰爭にして開かれなは、其支派たる戰を避けんとするは誠に至難の事なりといはさるへからす、

然れとも事情如何に快からずとするも、將に起るべき事件を不問に附せんとするは不智の至りなり。今日まで開展せる事件中最も不幸なる狀態は日本人民の戰意なり。日本帝國に於ける戰意は實に非常なる勢力を有す。主戰論者は盛に其意見を發表し、日本に强大なる反露西亞の徒黨あることの事實は實に不幸なる意義を有す。

日本の首相たる桂伯は是れ危機一發の秋なりといへり、如何なる國にもせよ、其首相が公然かゝる認許をなすときは、樂天論者の立場は誠に弱められたりといはさるへからず。同邦人の總へてが一致團結するは、此時に當りて易も須要なることなりとの首相の宣言は、又最も重大なる意義を有するにあらずや。

こは誠に誤解せられ能はぬ發言にして、殊に日本の各階級に瀰蔓せる苦々しき反露西亞的感情と一致するものなりと思へは、決して輕視する能はさるは瞭然たるにあらずや。日本政府に向て迅速なる斷乎たる所置に出てよとの日本人の叫びは、決して偏激せる俗衆の聲にあらずして、實に一國の運命を左右する教育ある人士の沈重なる、氣勢なる要求なり。日露兩國間の商議は實に遲々として進行せり、露國は屢々激憤せしむへき所置をなし、日本は朝鮮及其の他に於ける軍隊の所置によりて此れに應したり。

此等の動作及び反對動作は英政府にも影響を及ほし、將官等の會議は太西洋に於て開かれ、海軍の基礎は其所に於て決定せられたり。此等は勿論豫想的推測にして、決して證明と見做さるへきものにあらず、然れとも極東に於ける形勢は、バルフチル氏の語れる中深き心配を惹起すべき方向にあることを知るに足るべし。

嗚呼兩國敵意の破裂は、實に最大の不幸にして、我英國人の深く悲しまさるへからさる所なり。英國の最大幸福は實に平和にあり、然れとも極東の形勢洵に容易ならさるものあるを如何せん。

▲日本の位置

「十二月四日」　「レビウ、オブ、レビウス」

ヘンリー、ノルマン氏は今月發行のワールドスワークに於て極東の形勢

最もよく論じたり。其文に曰く、

日本は過去及び現在に於て、海軍に於て露國よりも強大なるは勿論にして、且つ如何なる戰爭も先づ海戰によりて決せらるゝは事實なり。然りと雖も日本は實際已に海軍擴張の頂點に達し、之に反して露國の極東に於ける海軍力は次第に增加しつゝあり。又露の新古の軍艦は今支那海に向て航しつゝあれば、其航海を終りたる曉に於ては、日本は開戰するも些の利益を收むる能はざるに至るべし。かるが故に日本は今直ちに開戰すべきか、又永久開戰せざるべきかを決すべき時機にして、危機正さに眉目の間に迫れりといはざるべからず。

露が何物を求むるかは誰人と雖も之か知るものなし、他の一方なる日本に於ては朝鮮が獨立するか、又日本に隷屬すべきかは實に死活問題の存する所なり。此故に日本は如何なる事情の下にありて戰を開くべく、又開かざるべからざるの機運にありとす。

試驗的置位

日本の位置は實に試驗的位置にありといふべし。日本は我英國と同盟せるが故に、若し佛にして露を助くることあらば、英も亦武器を取らざるを得ざるべく、之がため恰も佛が疑もなく露になしつゝあるが如く、戰を防止せんと試むる英によりて大に壓抑せられつゝあり。然れども露の軍を援助すべき軍艦は今正に航航中にして、若し彼等が其航海を終はるときは、露は最早此不定の事件を不問に措く能はず、止むを得ずんば戰鬪によりて決すべしと揚言するに至るべし。

解決の道ありや

見出し得べき最良の解決は、英米其首領となりて、敵し難き團體を作りて勢力を結合し、如何なる時に於ても、如何なる事情に於ても、朝鮮の土地に露西亞の手を下すを忍ぶことを得ずと宣言するにあり。然れども米國は決して此政策に應ぜざるべしとは、歐洲外交界の根深き確信にして、夫れが爲めに近き將來に於ては、東洋の平和は實に一糸の危きに懸かれるものといはざるべからず。此一糸が斷ぜざるべしとの最良の希望は、日露開戰の場合に於て支那は疑もなく日本に同盟することにあり。而して結果に於ては日本も恐らくは露國も此恐ろしき血腥き戰場に於て何物をも利する能はざるべし。

ブラックウードは日露の關係を第一に記載せり。記者は斷乎として、日本が朝鮮に於ける德義上の名譽の失墜を記し、此失態は日本が朝鮮人と交はるに當りて、悲しむべき誤解と、不謹愼と、高慢とより當然來れる結果にして、批難すべきはたゞ日本のみと論ぜり。

▲露西亞の海軍力

「仝紙」

極東に於ける露西亞の海軍力に關して確定せる調査なかりしが、北米日報に掲けられたる表は信憑するに足るものなり。此表によれば一等戰鬪艦の數は六隻―ペトロパヴロヴスク、ポルタヴア、セバストポール、ペレスヴイト、レトヴイサン、ポビイダ、一等裝甲巡洋艦三隻―ロッシア、グロモボイ、ルイク。一等巡洋艦五隻―アスコルド、ボガテイル、パラッダ、デイアナ、ヴアリアック。三等巡洋艦四隻―ノヴイク、ボヤリン、ジイジット、ザビイアカ。砲艦及び他の小艦八隻及び數多の水雷艇あり又極東の埠頭に於ては多分多くの水雷艇あるべし、太平洋の航路にあるものは戰鬪艦―オスリアビア、サレヴイッ、一等裝甲巡洋艦

—パナン、練習艦—オケアン水雷艇——二一二、二一三、二二一、二二二等なりといふ。

▲露國と日本

「十一月十六日」「セント、ゼームス、ガゼツト紙」

記者足下、予思ふに或る大陸の諸國は、日露の間に爆發せんとしつゝある時變に對して甚だ威嚴なき態度を取り來り、今尚取りつゝあるが如し。予は敢て此等の諸國を名指すの要あるを見ず、大西洋の此岸に於ける殆んど總ての國は、皆滿州並びに支那の他の部の門戶の開放すべきことを希ひつゝあるに拘らず今日まで未だ一國も、小日本が獨力其爲めに盡力しつゝあるを助けんとするものなきにあらずや。米國は、露國が米國の關せる事件に如何に處するかに付ては、精細なる注意を拂ふべしと露國を戒めたるを見れは、恐らくは太西洋の對岸たる米國より、極東にかける或權利を維持する主張を見ることを得べし。然れども遂行せらるべき唯一の頁策は、確かに各商業國が一致し、若し各國一致し能はざるときは、英獨協力して露に此事件に對する意見を迫り、又滿州を放棄し、朝鮮を蹂躙せざることを誓はしむるにあり。略言すれば此事件を正しく且つ固く落着せしむるは、各國の利益にして、且つ義務なり。若し彼等の權利を適宜なる斷乎たる方法によりて用ひなば、直ちに結末を告げ、吾人の同盟が甚だ危險なる恐ろしき位置より免れ得べきは毫も疑を容れざる所なり。予は此の意見が予一個のものにあらずして、實に予が此手紙を示せる諸友人の贊同したる意見なることを最後に一言するものなり。

（クウ、ル、クロジイル）

「予輩も亦贊成なり、然れども露は外面上、其利益吾人に次て最大なる米國に承諾の旨を與へたり。」「ガゼツト記者」

▲近時外交界所感三件

「十一月五日」「トルース紙」

（一）

露國が太平洋岸に鐵道を敷設せるとき、何人と雖も露國は實際上何等かの方法を以て、滿州の主人たるべきを疑ふものなく、殊に最初に此事の論理を認めたるものは我英國の政治家なりき。吾人と雖も露國の位置に立てば、當さに同一の措置に出でたるや疑を容れず。實に吾人は甚だ必要薄き土地にさへ、二つのボーア共和國を結合したるに非や。露人が滿州に入り込みし時より、吾人は事の玆に至るべきを窺ひ見たりしなり。滿州が全く露領となるか、又は露兵を後に扣へて露の勢力に屈伏するかは名同じからずと雖も、其實毫も異なる所あるを見ず、予は兩方何れにしても我英國の商業は毫も損を受くることなきを信ず、何となれは滿洲は掠奪に赴ける支那官吏及び惡徒の下にありて、住民は野蠻の域を脫せず、國勢は混沌として我等と通商することいと少ければなり。之に反して露人は多く吾人の貨物を購ひ、彼等の貨物を以て之に交ふ。文明諸國の承認に過ぎざる義務又は義務に背くなどは、元より問ふ所にあらず。吾等は自由商業の野蠻なる帝國と貿易するより、露人及び保護貿易國と交商することに於て一層の利益を得べきなり。

（二）

＊　＊　＊

日本が滿州を放棄すべしと露に迫るは愚なり、勿論露國はかゝる意見に從ふべくも思はれず。朝鮮の場合は大に之と異なれり、何となれば朝鮮は半開にして政治は行届かず、又日本も露國も共に商業上の利益を占め居りしことなれば、日本が僅かに一葦の間を隔てたる比較的狹き海路に於て、日本に面せる港灣を露國の得んとするを喜ばざるは閒へたる理なり。然れども日本が硫黃臭き人民に向て、濕地を領するが故に、朝鮮に向て自然の權利ありと叫びたるとき、露國が其怪しげなる權利なる言葉に向て、認許を與ふるを躊躇すべきも亦論なかるべし。若し朝鮮にして獨立して自存する能はずんば、國は二つの關節によりて分たれ——即ち一は露國の下に、他は日本の下に——海岸に沿うて城部又は堡壘を有する軍港を設くるを得ず、又兩國民は朝鮮半島に關する事件に於ては、對等の權利を有すとの條件を以て、二つに分割せらるゝに至るべきなり。

（三）

*　*　*

若し兩敵國が互に稍〻常識を持して相協和すること能はずんば、戰を開くより外なかるべし、此場合に於ては吾等は宜しく傍觀者の位置に立ち、武器を磨きて時機を待つべし。日本との條約——そは予の常に失錯なりきと考ふるものなり——は日本人をして戰爭の起れる場合は、英は日本を助くべしと想像せしめたり、こは宜しくランスダウン卿に彼等の迷夢を破らんことに全力を盡されんことを望む。然れども現內閣に對しては予輩多くの望を囑するを得ず、而してチャムバレン氏は恐らく吾人を極東の戰場に引入るゝ意見を持つなるべし、果して然らば勿論此愚物は其命令を傳ふるに躊躇せざるべし。



PANAMA AND THE UNITED STATES.
UNCLE SAM—"You let this little boy alone!"
JOHN BULL—"I could learn a lot from Uncle Sam."

海外雜纂

リヒヤルド、ワグネルの宗教

「十二月五日」
「リテラリー、ダイゼスト紙」

リヒヤルド、ワグネル氏が宗教を主題として浩翰なる著作をなせりといはゞ世人の多くは疑もなく訝しき思にうたるゝならん。獨逸國ボンの教授リッヒ、ハインワイネル氏ハ、「リヒヤルド、ワグネル、と基督教」なる論文を亞米利加神學雜誌に寄稿して、此の如き題目を撰びしは「自已の特殊なる嗜好」よりするにあらずして、實に現代宗教の紛亂に際してリヒヤルド、ワグネル氏の重要なる意義を知らしむるの必須より起れりといへり。彼れの文に曰く

「殊に予をして此の擧に出てしめしはワグネル氏の勢力日に益加はりつ

ゝあると、又殊にヘンリー、トード及びハウストン、ステワルト、チヤムバレンの如き偉大なる人々が吾人の間に、彼ワ氏の理想をあらはしつゝあるとによる。チヤムバレン氏の著「十九世の基礎」と名つくるは前世紀末に於ける最も重要にして又恐らくは最も後代に傳はる著作なるべしと信ず、此著は徐々として而かも確乎として多くの歸依者を得、吾が疆界に大なる感化を襲らすに相違なし、其書中にワグネル氏の理想が最も雄健に書き顯はされ、又福音に密接に近きてワグネル氏の思想が占領せし地盤に立てる者なる事を證す、ワグネル氏の感化は吾歐洲文明の發展が加はると共に歩を進むるは疑を容れず。彼の著作は非常に其賣高を増加し漸々版權なきものにも刊行せられ、最初に獨逸に現はれし時よりは遙かに多くの歡迎を愛くるに至るべし。」ワグネルの宗教は其中に佛教及基督教の兩分子を有す。而して彼が最初に宗教の問題を論ぜしは實にショーペンハウエルを知りし時より起りしなり、ワイネル教授曰く

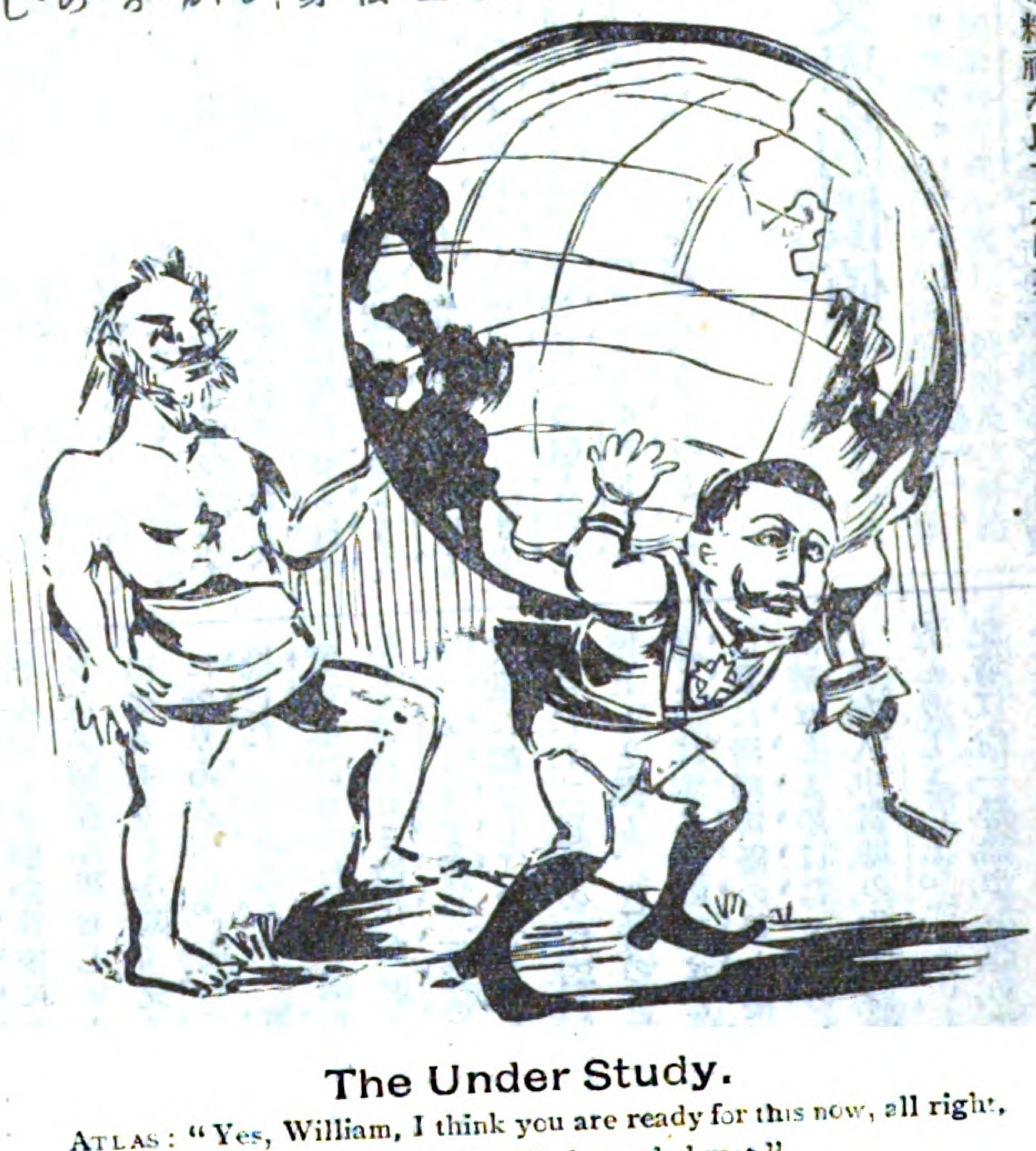
リヒヤルドワグネル氏ハニーベルンゲンの著を書きたる頃、即ち紀元千八百五十三年と千百八五十七年の間に於てショーペンハウエル氏の著作を閲讀せり。是より彼が屢々公言し、又心中大に喜悦の情を表したる如く、全く此の哲學者ショーペンハウエル氏の歸依者となり長く其見を變せざりしなり。ワグネルの著作の多くを見れば、此の哲學者の見解を採用せし跡歴然として指すべし、其の中にありて最も重要なるは、千八百六十四年バヴァリアの幼王に書きたる「國家と宗教に就て」の文、千八百七十年のベートーヴイン、及び千八百七十九年の「宗教と美術」此れに添加したる「知識何の要ありや」「汝自らを知れ」等の論文、及び「英雄主義と基督教」等の論文なり。然れどもワグネル氏は此の新主義を發表せんが爲めに要するものは獨り斯くの加き論文を以て止まらず、進んで詩歌音樂丼びに散文を利用し、ハルシフアルに於て其充分なる又最も美はしき發表をなす事を得たり。此の戲曲に新しき音樂と新しき宗教と相結んで、失はれたる人道―靈性の教養眞正の生命、及び幸福―を世上に回復すべく偉大なる神秘を現出せしめたり。

此劇の現はさんと勉めたるは「人間の心靈に於ける不幸の暗憺たる狀態及び現狀と教育によりて滿足せざる深き慾求の姿」なり、此の不幸の狀態より吾人を救濟するものは果して何ぞ、そは誠に現世を一時的なる迷世の上に立てる夢想園として其實在を否定する宗教を措いて他に一物あるなし、宗教は此の否定によりて吾人の憧憬する救濟を知らしめ、又兼ねて信仰によりて此の救濟を濟らす。

然れどもワグネルは決してショーペンハウエル氏の如き積極的態度を取らざりしなり、彼は人生の悲惨なるを感ぜしと雖も之が其が儘に放棄して遁りに拒絶し否定するを好まず、彼れは寧ろ靈界の騎士なり―即ち管に之れを拒絶するに止まらず又之れと奮鬪するの理想を念頭より放たさりしなり。教授は尙ほ進んで曰く

「予は敢てワグネルの實生涯が彼が理想とせる聖者の主旨に添はざりしを論ずるの要なかるべし、彼は二度妻を迎へ又美術家としては文明が供するあらゆる善良なる事物の快樂に耽りたり、然れども吾人は之れが爲めに彼れの主義を論評するに當りて一毫も煩はさるゝことなし、倫理の教師及び豫言者が常に己れの理想通りに行動する能はざるは、恰かもショーペンハウエルが己れの場合に於て叫びたるが如きも、然れども倫理學者及び豫言者が己れの主義をして世に行はしめんとせば、只之を冥想して之を世人に推薦するよりは、己れ先づ起ちて之を實行する方遙かに効果多きは疑を容れざる所なり。ワグ子ル氏は自恐く己れの理想を實行する能はざりしと雖も、彼は亦たゞ口先きばかりにて其主義を發表する所謂學者連とは自ら其選を異にしたりしなり、ワグ子ル氏を論評せん

とする者は必ず先づ、氏は技術を以て他人に靈界の救助を得せしむる要具となしたるが、其技術の爲めに文明が供するあらゆる方法と進歩とを採用せざるべからざりし事情を斟酌せざるべからず、ワグ子ル氏は實に其技術の爲めに努力し奮勵し敬虔なる精神を以て之に殉したるなり。此障礙多き世に於て彼は獨力以て己れの進路を貫通せり。彼が音樂になしたることは實に宗教及び靈界の救助になしたるとなりしなり、彼曰く自然の純粋なる音樂は外觀にのみ拘泥する人間の醜悪を救助すべき勢力を有す。と其意蓋し眞の音樂は事物の眞髓を發揮すとの意なり、音樂及び作曲家の心中には實に世界の眞正なる意義が開闢せらる。音樂は眞正の觀察を人心に濶らして救助の方法を得せしむ。道に日々食を乞ふて身に襤褸の衣を纏ふ佛門の徒弟とワンフレードの別荘に住居せるワグ子ルとは一見甚だ異れる生涯を送りたるが如きも、彼が技術の爲めに己れの生命を犠牲にし、私慾を全く拒否したるの點は共に相符合する者なり。彼は決して世俗の時好に投ずる音樂を作るを屑しとせざるの故を以て、其生涯中には佛徒と全く仝じき素寒貧の生活をなしたるとあるなり。ワグ子ルの基督教に對する態度は次の文に於て記述せられたり。



The Under Study.

ATLAS: "Yes, William, I think you are ready for this now, all right, and I will take a little needed rest."

「ショーペンハウエルとワグ子ルは人生及び基督の教訓に結合せる三事實を有す、其第一は彼は住家もなく家族もなく財産もなく遍遊する遁世者及び説教者として佛徒の如く國内を往來したること、第二は教會が贖罪の効力と稱する故意の死、第三は基督の教訓の根本的主義—隣人の愛、即ちショーペンハウエル及び佛教徒が同情に外ならずとする根本主義を仝じうすることなり。

ワグ子ルは教會の儀式に拘泥する有様を目して甚しく墮落せるものなりとし、殊に其狹隘なる獨斷的理論及び煩瑣なる階級的組織に於て——此等は疑もなく福音の上に加へられたる猶太教の束縛に外ならず——最も墮落の頂上に達したるものとなせり。ワグ子ルの主義はたゞ福音の上にのみ存す、ワグ子ルは實に原始基督の昔に還れる基督教を行はんとせり。「基督の十字架に磔せらるゝ係及び其人心に及ぼす感化の下に基督教が希臘羅馬に傳播せる眞の意義が存するなり」、他の一方に於て靈界の凋萎病を以て教會を打破し、貴族的專橫を以て終に現今の如く殆んど無神論の状態に陷らしたる者は、全く自已を犠牲としてあらゆる物を愛する基督の心情を解せざるが故なりとなせり。ワグ子ルは基督のいへるが如く、肉體すらも多くの異なりた

る肢躰を有し、各々其の作用と特殊の効用をなして一躰を作るが如く、あらゆる人は一神の肢躰なりてふ見解を有す、神は彼にとりては愛を以て人類を結合するものにして、神を知るは永久に神の事業をなすこと、神の事業をなすは即ち己れを愛するが如く隣人を愛することたるなり。人間は基督がなしたる如く死に至るも他人を愛せざるべからず、何となれば主我の住宅たる肉躰は死に至れば無に歸すべし、然れども人は死に至りて始めて万有の根底に合す、他人を愛し眞摯なる心情を以て他人の爲めに生涯を犧牲に供したるものは、彼が愛したる人々の感謝の念によりて終に不朽に達す、之に反して單に己をのみ愛する唯我論者は己れの愛に酬ひらるゝ甘美なる愛を受くる幸福なる經驗を得ることなし、彼は決して不朽の生命を得ることなし、彼は絶えざる慾望に使役せられて努力甚だ勉むと雖も、終に自身をして幸福ならしむる能はず、かゝる人には基督のいへる「汝等は貪れども一物を得ず、汝等は憎めどもそれによりて何物をも得るなし、汝等は戰ひ爭へども何物をも得るなし」との言葉の尤も當れるを覺ゆ、世の幸福を增さんとする愛の事業にのみ個人の生命は維持せられ、眞の幸福は到達せらる。今の時に當りてトルストイの如きは福音の眞意を解し其基礎の上に已れの教訓を建てたるものといふを得べきなり。

近世戲曲の文學的價値

「十一月廿八日」　「リテラリー、ダイゼスト紙」

コロンビヤ大學教授ブランダー、マッシユース氏は近世戲曲の文學的價値に就て最も確然たる樂天的觀察を表示したり、彼曰く世は一般に現代の戲曲を輕視する傾向を有すと、予輩も亦世上に俗受のよき脚本は知て文學的價値を有せずと考ふるものなり。然りと雖も教授マッシユースは此推理法の甚だ誤れるを論じ、次の如くいへり（十一月發行のスクリップナース、マガジンに於て

シエークスピアは今日に於ては註釋家及び批評家のみの專有物となれるが如き觀ありと雖も、彼の現存せる當時に於てはエリザベス王朝の最も俗受けよき戲曲作家にてありしなり。他の戲曲作家が自家の著作をして世人の歡迎を得せしめんが爲めに彼れシエークスピアの名を籍りたるもの多々ありしを以て見るも、如何に彼れの俗受けよかりしかを想見するに餘りあるべし。而して此俗受けよき戲曲作家が啻に當時の俗受けに投じたるのみならず、實に空前の大詩人にして甚深なる心理家たるの事實の確認せられしは遙かに後年の事に屬す。サアヴンテスは其生存中已れの奔流せる傑作が廣く世人に持囃さるゝの有樣を見しと雖も、ドンキ、ホーテが單に一個の戲作として見るべきものにあらずとの疑が初めて世に起りしは、少くとも彼の死後一百年の事なりとす。又モリエールは幸にして已れの作劇が興行せられし時、自ら其役を演じて大に喝采を博せしと雖も、當時の世評は其好評のよりて來る所は、戲曲の文學的價値よりは寧ろ彼の演せし滑稽的技倆にありとなせるが如し。モリエールは實に滑稽俳優の最も優なるものと認められ、戲曲作家としての天才を看破せしものはたゞ一のボアローありしのみ、佛國大學に於けるボアローの友人中當時の作劇詩家中モリエールの勝れたるを知りしもの一人もなかりしといふ。」

記者は尙一層論歩を進めて曰く、シエークスピア及びモリエールが俗衆を喜ばし、又無學なる觀客の多數を感ぜしめしてふ事實は、當時の社會をして彼等の戲曲の文學的價値を認むる能はざらしめたるが如し。戲曲の批評家の多數は其文學的價値てふことを度外視すること甚しく、たゞ僅かに戲曲に附加せるもの、其結構に附着せるものにものに過ぎずとなす。

彼の文に曰く

「文學とは文辭を修飾するの謂にあらず、外部及び皮相の見を記述するの謂にもあらず、實に內部及び眞髓を捉へて活けるが如く描寫するの謂なりなど今日の開化したる世に向て事新らしく論ずるは寧ろ滑稽の極みなるべし。文學は具體的事件を藉りて抽象的哲理を寓し、動機及び性格を描く、活ける人生の嚴格なる批評なり、若し然らずんば單に虛飾と煩瑣とを世に流すに止らんのみ。若し文學にして對話の文彩を巧妙ならしむることに過ぎずんば、ルシルはロビンソン、クルーソーよりも偉大なる小說にして、「フォレスト、ラヴアース」は「ハックレビリー、フイン」よりも淸新なる書籍なりといはざるべからず。然らば亦ペーターはベンジャミンフランクリンよりも、アブラハム、リンコルンよりも善良なる文人なりといはざるべからず。書籍はひとり文體のみより成るものにあらず、抒情詩さへも詩人が一時の感興を遣る巧妙なる麗句よりも、寧ろ其熱情と眞摯とによりて重ぜらるゝにあらずや。若し詩人に要するは單に言辭の豐富なりとせば、若し詩人は彼が押韻せる妙音のみによりて判ぜらるべくんば、ポープは恐らく抒情詩人の第一となるべし。あらゆる散文中の尤も詩に遠ざかりたる論說に於てすらも、其章句の善惡よりは寧ろ其內容の優劣によりて判ぜらるゝにあらずや。例へばステヴンソンの論文の後代に傳へらるゝは其句熟鍊其章抑揚あるのみの故にあらず、彼ステヴンソンは實に言辭に巧みなる美術家なりしと同時に、彼の胸中には彼獨得の見解あり彼の見解より見下せる人生より得たる觀念を含めるを以ての故なり。文體は大いなる防腐劑たるに相違なきも、然れども決して死生兒に生氣を與ふるの力あるなし。

近世の批評家は俗受けのよき脚本と、種類の異れる文學的戲曲を待設けつゝあるが如し。而して彼等は今日斯の如きものを見出し得ざるの故を以て――恐らくは戲曲の最も燦爛として榮えし如何なる時代に於ても見出し得ざりしならん――文學的戲曲今日路を絕てりと叫びつゝあり。

マッシュース教授は尙ほ進んで曰く

批評家はステッフエン、フイリップ氏の戲曲は、稍々文學的ならんとする傾向ありと認めたるものゝ如し。何となれば此前途有望なる劇詩人は彼の結構を修飾するよりも寧ろ其修飾を結構せんものと企て居るか如く、隨てフイリップ氏の演せし戲曲に於ける文學的價値は稍ゝ外面的にして、直言すれば少くとも浮華虛飾に流れたるの譏を免るゝ能はざるが如し。

文學的價値をたゞ外面に附加したるものに過ぎずと考ふるきとは、當然論壇を動かすべき價値あるピネロ氏の戲曲も此種の批評家によりて輕視せらるべきは疑を容れざる程明白なる事實なり。「懷疑の利益」（ベニフイト、オブ、ダウト）に於て「第二タンクエレー夫人」（セコンド、ミッシエス、ダンクエレー）に於て「イリス」に於てピネロ氏は彼の舞台上の技倆を充分に發揮したりと雖も、その目的はたゞ單に舞台上の効果を收めんか爲めにあらずして、彼が觀察したる人生の緻密なる批評の要具として用ひたるなり。此等の三戲曲は總て「因果律の法則は無慈悲なり、」てふジョージ、エリオットの言の永久眞理なるを表顯せざるなし。此三戲曲に於て避くべからざる遁るべからざる大團圓は、人工的糊細工を以てなされたるにあらずして、實に運命の指針によりて現出せらるゝなり。殊に「イリス」に於て、吾人は、やさしき親切なる、人を魅する美を有する、然れども意志の力弱く、少しの障礙に逢へば道を轉ずる人物――テト、メレマの計算女――がロモラに於けるが如く人の心膽を寒からしむる程眞實に描かれたるを見るなり。而してピネロ氏は、縱發する誘惑の下にありて、婦人が望みしあらゆるもの及び自尊の念すらも終に全く失ふに至るまで性格が不知不識の間に變じゆく描寫を最も眞摯

なる鉅を以て顯はしたり。此戯曲は或は快感を與ふる能はざるべきも、實に甚深なる道德を含む。此戯曲は决して子供だましの玩弄物にあらず、實に人世の實際を益する一種の滋養物なり。已れの弱點に支配せらるゝ人物の性格の描寫は眞に迫り、微に入りて、觀客は演劇の假象に喜憂しつゝあるを忘れ、結構の善惡論理の正否等の考は全く其腦中を去るなり。斯くの如きは眞の文學は人生の批評なることを表示したるものなりといふべきなり。

マッシユース教授は其結論として、戯曲に於ける文學的價値は、演説に於けるが如く一種の副産物なることを反覆していふも决して聾盲にあらず、戯曲は元來室内に於て閲讀する爲めに書かれたるものにあらず、觀客の面前に於て俳優をして舞臺にて演ぜしむべく作られたるものなり、かるが故に、あらゆる他の美術を綜合し之を應用するの特權を有す、戯曲の眞味を解する人は戯曲を稱して最も高尚にして、又最も効果ある美術なりといふ所以亦實に玆にありといへり。

西藏探檢

「十一月十四日」

去年五月大尉ローリング及中尉ハールグレーヴスの指揮の下にラダクのレーを發せし西藏探檢隊は十月四日にカシユミイル地方に到達したり。

レーより發せる隊は四十三頭の小馬と他に穀物を運送する唸牛を連れ行けりラナク、ラ、ベッスの國境を横ぎりてより、以後一群は正東の方向に進み千八百九十六年大尉デイズイ氏の終へたる道を續けて測らんとしたり。アルホルト、ソー湖にてローリング大尉及其部下は西南の方向に進みハールグレーブス中尉は荷物の大半及び廿五頭の小馬を持ちて唸牛によりて運ばれ來るべき穀物を待たんと其處に留まれり、穀物を持ち來るべき人々は逃走し暴風吹き荒みて八日間に廿五頭の中十八頭の小馬を死せしめたり、ハールグレーヴス中尉は豫定せる土地に於てローリング大尉に會見せんと出發し、かくの如き小數の家畜を以て貨物を運送するに甚き困難を感じたり、幸にして穀物の貯藏所は千八百九十八年にデイ、ズイ大尉によりて埋藏せられたるを掘出したるを以て探檢隊は進行を續くることを得たり。未だ曾て一度も探檢せられざる土地なれば、此地方は東北に延長せる沙漠にして不毛の山嶽と鹽湖多く家畜などは全く住まざるべき所と想像せられたり、然るに東南に向ふに從て國は次第に低く平均一万六千五百呎の高さより一万五千呎の高さに減じ草多き土地を現じたり、其處には一の大河なしと思はれたりしに數多の河流は無數の清湖及び鹽湖に流れ入るを發見したり。

湖水は大抵近傍の山嶽より墜下せる山碎物及び河流に從て流れ來れる沈澱物によりて壅塞せられて成れる谷の爲めに出來たるものと思はる。群山は疑もなく前代に於ける浸蝕作用によりて成れるものと覺しく、降雪は當時は今日より一層多くして、殆んとあらゆる湖水を滅せしなるべく、其跡は今尙山腹について見るを得べし。或湖水に至つては全く其跡をも滅し、たゞ僅かに乾燥せる食鹽とソーダの盤床を殘すのみ、道にて逢へる總ての漂泊者は皆親しく待遇し吳れたるも、マノクドクといふ金礦に近けるとき、一隊は武器を持せる西藏人の一組によりて止められたり。西藏の官吏は近隣より來りて食物及び運送船を給したるも、一隊が尙西又は南に探檢するは西部西藏に於けるルドクの神聖なる都市を毀す恐ありとして之を許さず。此官吏は其一隊を止めたる理由を開陳し、デヴアチオング（ラッサの中央政府）は西藏よりあらゆる歐洲人を排斥

することに於て頗る嚴重なることを說明せり夫れより。西及び西北の道を取りて進みノー村に達し、運搬の便及び食物を西藏人より得たり。こゝよりラダクのフオーブランクに達したり。

三角器は東經八十五度まで擴がり、最高緯度三十五度四十五分にして最低緯度三十二度四十五分なり、多くの新湖は發見せられ、其の最大なるものは七十方哩の面積を有す。

此の探撿によりて知られたる土地は實に三万八千方哩の廣袤なりとす、此土地に住する男女は實に少數にして、湖水に住む野生の水禽及び鷲鳥の數は實に數ふるに遑あらざる程多し。

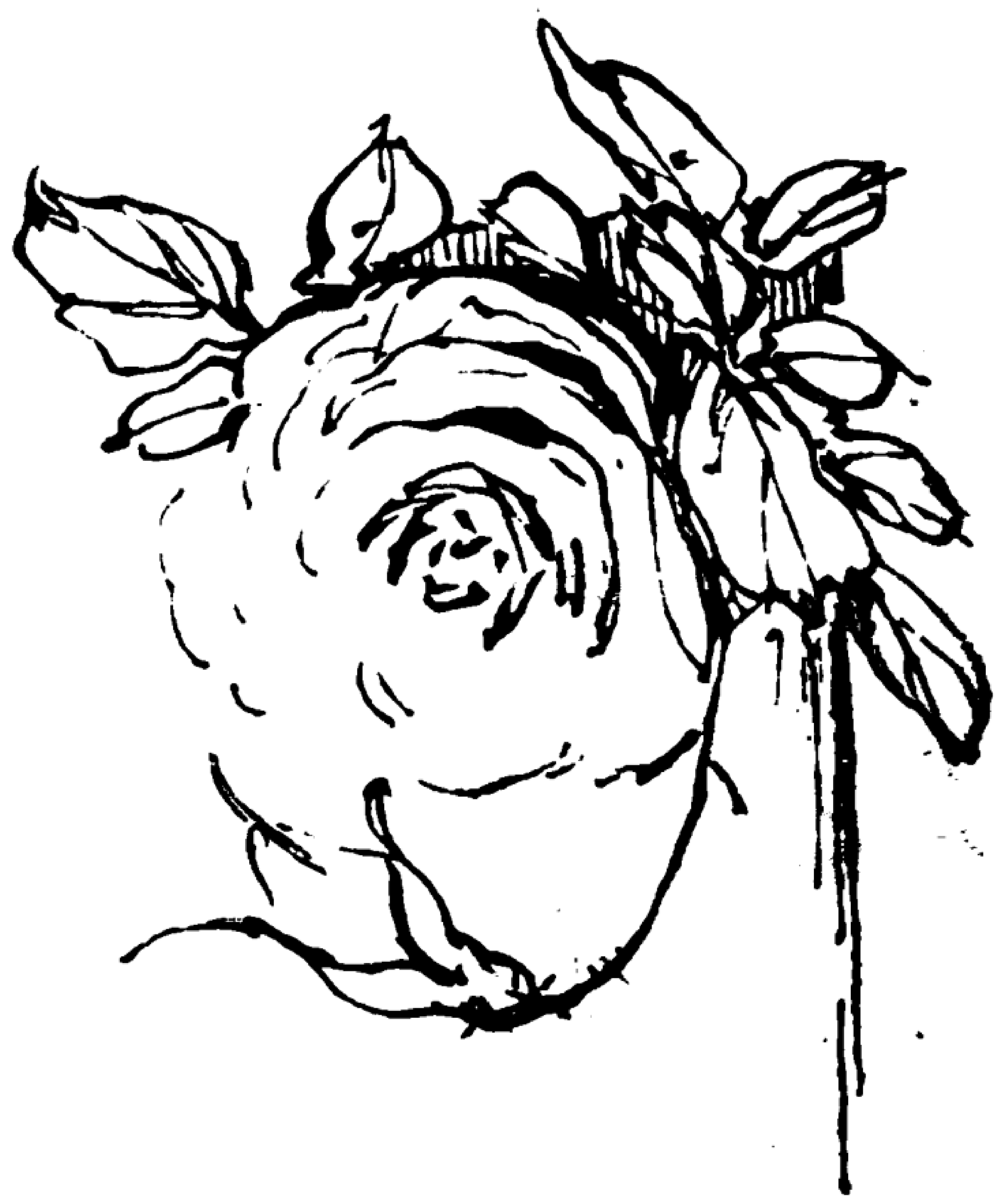
英國青年の日本觀

オクスホールト大學にユニオンとて學生等の討論俱樂部有之先夜は日英同盟を滿期の後繼續すべきか否かと申す問題にて討論の末結局大多數にて繼續すべしとの事に終結せし由に候。此會は當地學生か演說修業の場所にてグラドストーンなども此れから出てたるものに候。將來社會の樞要地に立つべき青年は大抵此地と劍橋とに集まり居り候事とて、隨て此會の重要なる所以も察せられ候。

槪して英國か日本に對するフアッシネーションは非常のものに御座候、政治上外交上の事は存せず、單に社會上より申すも、我國は此の特殊なる國民の好意を十分識認して之れをレターンするの要あるべしと存し候

「早稻田學報」　島村抱月氏

雜錄



畔柳氏は特に本紙の爲めに「文学上の花」と稱する題にて每號季節に應ずる花に就て述べることを約せられたり

文學上の水仙花

畔柳都太郎口述

何か書けと被仰るのですか、私は近頃少し思ふところが在りまして雜誌に書くと云ふ事は止して居りましたが折角のお依賴を反古にするも甚だ遺憾でありますから、夫れでは初春に因みまして少し許り文學上に現はれたる水仙花の事を述ぶる事に致しましよう、題は

「文學上の水仙花」として頂きましようか、併此問題を詳しく御談致しますと餘程長くなッて、雜誌に擧ぐると云ふ樣なものに成り兼ますから極く大體の事丈扱いて御談する方がよかろふと思ひます、それで水仙の御談をする事に付きましては、夫より前に花全體に關しての御談をする必要があるようになります、花全體の事に關して御談をする段になると、更に進むで自然觀一般の御談もしなければならず、同時に花の研究と云ふ事が文學の研究と云ふ事に關して如何なる必然的關係を有するかと云ふ事も御談しなければならなくなりますが、とてもそふ云ふ詳い事は書物にする曉でなければ書きのせる譯に行きませぬからして、只今の場合では一ッの事丈讀者諸君のお注意を煩はしたいことがあるのです夫は外の事でもないが、今日迄の文學研究と云ふ事には見逃がす事の出來ない缺點があるのであります、夫は今日の學者が喋ましく云ふ事で現にゲーレーなども文學批評の開卷第一に言ふて居ることですが、分析と云ふ事が缺けて居ることです、詳しく云へば科學的の分析が缺けて居るが爲に、諸々の學科が日進月歩の趣があるにも係はらず、**獨り文學研究のみが根底の堅固な一學科になれないのて在ります、之を救**ふには從來の如くに文學研究を一ッ離れたものにして居らないで社會現象中の一現象として取扱ひ、其上にこれに科學的の分析をば施すことになると思ひます、こふしまするには勢諸々のサイエンスの助を借りて文學の研究に及さなければならむのであります、夫で文學の中の花を調べ其中の水仙花を今日御談しすると云ふ樣な事になッたのは、幾分かそふ云ふ考を以てをるのでありますが突然の御來需で私に十分の準備もありませぬから纏つたものは出來ますまい、夫れて廣く文學中の水仙花と題しましたのは通例の人がぼんやり考へて居ッて同名の植物は國を異にしても同じ植物の樣に思ふて非常な誤謬に陷りつゝあるのを幾分か說明して見樣ふと思ひ、水仙の花の色、形、などの觀念が異ッてをると同時に起る情緒にも非常な關係を及ぼしてくるのでありますから其弊を救ひたいと思ふてをるのであります。

只一概に水仙と云ひましても西洋の文學に現はるゝ水仙、殊に英文學に現れたる水仙は注意すべきものが三ッ在ります。

(第一)は普通の(ダッフォヂル)、と云ふので佛蘭西語の(ナルシッス、フォー、ナルシッス)と云ふ、獨逸語の

(ゲマイネ、ナルチッセ)なる和漢文學の方には關係のない花は唯だ一つて側を向いて色は金盞金臺て西洋の文學の裡て關係の深い英吉利て談をしまするとイングランドにあツて多年生草本て春季に花の吹くのであります(ダッフォヂル)と云ふ名は、アッフォ、ヂル即ち「早くくるもの」と云ふ意味から來たので春の花の中の一ツになッてをります、スコットランドや、アイルランドには極く少ないが、イングランドの南西の方には幾町と無く數々咲ひてをります、花は面倒くさくもなく肥料も懸からずに如何なる場所にも生育しますから園などには大概植えてあります。若夫れ此花を見ると春だといふことが分るものだから人間の心も興を持ツと云ふ樣な感を生じて期望の衆徵になツています即ちこう云ふ詩が在ります、

"When the vales are decked with Daffodils,
I hail the new reviving year,
And soothing hope my bosom fills."

事實はともあれ、ハーリックと云ふ詩人が早敢なく散ツてしもうのを悲しむのがあります、其詩を次に擧ぐれば

"Fair Daffodils, we weep to see
You haste away so soon;
As yet the early rising sun
Hath not attained his noon,
We have short time to stay as you;
We have as short a spring,
As quick a growth to meet decay,
As you or any thing.
We die
As your hours do, and dry
Away,
Like to the summer rain,
Or as the pearls of morning dew,
Ne'er to be found again."

此詩は一般の感情を現はすと云ふものには成りますまい、詩人自身の悲みが在ッたのでありましよう、普通の人が此花を見ると春だと云ふ事が分り嬉いと云ふ感が生ずる傾向があるてしよふと思ひます、實際悲い歌が少しありまして大概嬉い方の情を述べて在ります、(第二)の方は英語の(ポーエッツ、ナーシッサス)佛蘭西語の(ナルシッス、デ、ポエート)と云ふ水仙です、花は一つて瓣が眞白て、花冠が短かく黄なくて赤へりが附いて居ります、即ち口紅水仙と云ふのであります、多年生草本て英吉利ては初夏に花が咲きまして希、羅、文學に出てをる水仙です、尤も或る人は希、

羅、文學に出て居る水仙は此方で無くて（ナルチッスス、タゼッタ）と云ふ方の水仙だと云ひます、其或人の說に從ふ樣になれば和漢の文學の方の水仙と同物になッてくるのです、即ちタゼッタの分布は擴くありましてカナリー群島からインドの北及日本迄も擴がつてをる氷仙であります、シシリー島などには旣に久しく生育して居ます、英吉利では霜やあらしの害を受けて止むを得ず每年以太利、佛蘭西などより輸入して居ります、これは花は一つてありませぬ、澤山あります、日本になりますと、飯沼慾齊先生の所謂「葉心一莖、莖頭薄苞破れて五六花を出す、梗三稜にして寸餘、花向側」云々の則ちスヰセンであります、然し或人の說でない方に據ッて通例信じられて居る說に從ッて暫く（ポーエッ、ナーシッサス）を、希、羅文學中の水仙として御談を致しましよう、此水仙は香がなかく强い、唯た一つの花を持つておりまして昔の歌に從ッて見るとギリシャの神樣などが大そう其花の香をば慕ッてあッたのでプロサーピンがプルートー、から連れて行れた時には此花を集めて居たッと云ふ樣に、シェクスピーアのウィンタース、テール中に書てあります、

"Daffodils

That, come before the swallow dares, and take

The winds of March with beauty."

此水仙は非常に香が强いものだからフューリーズが先づ此花の香で恍惚とさせて其犧牲を捕えると云ふ事でありますから夫故にソフォクリーズは此花を名づけてこう云ふて居ります、ナーシッサスの語原の希語（ナルケ）は昏迷恍惚の義てす

"Garlands of the infernal gods."

此植物の名が出て來たギリシャのナーシサスと云ふ靑年の御談は西洋文學をやる人には誰にも分ッてをる事ですが一般の讀者の爲めに一寸申しますと、水鏡に寫る自分の姿に、戀いしい氣に成ッて溺死して遂に此水仙に化してしまッたと云ふ談から來て居るのであります、

"And on a bank a lonely flower he spied,
A meek and forlorn flower, with nought of pride,
Drooping its beauty o' er the water 's clearness,
To woo its own sad image into nearness,
Deaf to light Zephyrus it would not move;
But still would seem to droop, to pine, to love."

（第二）普通の（スノードロップ）と云ふ日本に無い花て、植物學上には水仙と云はなくてユキノハナと云ふて通

つてをります、佛蘭西語の(ベルスネーヂ、デ、バリーシアン)獨逸語のシュネー、グリユック(ヘン)、と云ふ方てこれはイングランドに在ッては多年生草木て早春に花が咲く方て白花の唯一ッ首を垂れて弱は〱しげに雪の間から咲ひてをる處に趣味があるのです、此可愛らしい花に向ッて關係のある詩的連想は余程和漢の水仙に似たところが多くあります、即ち白く、潔く、弱〱しいといふ處に注意してあるやうです、バーボールド夫人の詩の花の神樣の氣息が氷柱を此の花にしたと歌ッているのはなか〱面白樣に思ひます、聖母にデヂケートしてある花です、

"The flower that first in the sweet garden smiled,
To virgins sacred."

此花は慰籍の表徴になッて居ります、冬と云ふいやな時期の裡に春がもどると云ふ事を示すからでしよう、今次に證據の歌を擧げます、

"Green hues of hope array us,
Our snowy bells must ring;
And low but sweetly chiming,
The joyful tidings bring!
For theirs it is to utter,—
Awake! behold the spring!"

此證據の歌の裡でスノーウヰ、ベルスとあるのは獨逸語のシュネー、グリョックヘンと連結させて見たら面白いでしよう、ヲルズヲルスと云ふ詩人が此花に對して歌を作ッてをります其間の二行程拔ひて下に擧げます、全く此通りであらうと思ひます、

"Chaste Snowdrop, venturous harbinger of spring,
And pensive monitor of fleeting years."

以上述べましたのは、西洋文學に出てくる三種の水仙を擧げたに止どまッて居るのですが、實際水仙は澤山の變種も在りますから園藝的の趣味から云ふ時にはなか〱これ位で終りませぬが文學の方から云へば此三ツ丈で澤山であります、尚植物學の方の詳い研究を借りて花の形や瓣や、色や、其他の事を繪を書いて御覽に入れながら説明も仕度くもあり、詩歌傳説の方をモット詳しく申上げたいが餘暇がありませぬから此丈にして置きましよう。

支那の水仙の御話に遷りますと前にも云ひましたが(ナルチッスス、タゼッタ、)丈の事を知ッて居ればよいのです支那の文學では水仙は可成の地位を占めて居ります、瓶花譜に一品九命水仙と在りますからなか〱立派な位置に成ッてをるので三柳軒雜識には水仙爲雅

客、夫から瓶史には蠟梅以水仙爲婢とあります、やはり輕くは見て居らないのです、時期は尤も舊暦ですが花暦に十二月の部に出てをります、花は香を重く見てをると云ふ事が下の言語で明瞭で在ります、即ち汪機は其花香甚清と申しましたし、李時珍は其花瑩韻其香清幽と言ひました、八重を好むでをるか一重を好むで居るかと云ふ事は王世懋の花疏にはこふ云ふ文句があります、凡花重臺者爲貴、水仙以單瓣爲貴、短葉高花最佳種也、云々と在ります、水仙は色々名がありますが其中で文學的に必要で面白いものは

水仙　玉玲瓏、金盞銀臺、配元、などで在ましよう、尤も楊萬里は銀臺金盞談何俗と喝破しておりますから此名丈は唯だ必要といふ方面に見ておきましよう、其外、太平清話には、雅蒜、南陽詩註には、天葱、內觀日疏には、女史花、姚女花、などの名が在ります、水仙の名は其物得水即不枯故曰水仙稱其名矣と云ふより來てをる、玉玲瓏は八重のものに附けた名で金盞銀臺は一重の花の形と色とに由つて附けた名で在ります、配元は和氣旁薄陰陽得理則配元榮於庭、から來てをる、雅蒜、天葱は或一地方の名であり、女史花、姚女花は史實及傳說の關係があるのです、

漢文學の方で水仙の花を歌ひましたのは大抵水に關係させて高潔純白或は時に弱々しいと云ふ意味を持たせてあります、從て西洋のユキノハナの方にある一つの意味の希望といふことは漢詩の內では外の植物に附屬して居ります、例の通りに證據の詩をは二三擧げて見ましよう、

宗陳摶の詠水仙花　の第一二句に湘君遺恨付雲來、雖墮塵埃不染埃、或は劉攽の水仙花第二句に氷雪肌膚姑射來、或は黃庭堅の次韻中玉水仙花、借水開花自一奇、水沈爲骨玉爲肌、或は劉克莊の水仙花第三句に不許淤泥侵皓素、或は楊萬里の詠千葉水仙花第六句に丰容要且小蓮花、などゝあります、水仙花の位地に關しては黃庭堅が王充道送水仙花五十枝、第六句に山礬是弟梅是兄、と云ふたのを辯駁しておる詩が在ります、楊萬里が水仙花第六句の內に礬弟梅兄品未公、于若瀛の詠水仙に水花垂弱帶、嫋嫋綠雲輕、自是壓羣卉、誰言梅是兄、之を要するに漢文學中の水仙は冬の寒むい裡にけがれに染まず、高潔の姿を持してをると云ふ事を詠ふに止まッて初春の希望は、梅に讓ッてをる樣です別言すれば英文學のスノードロップ、即ちフユノハナの地位を漢文學では梅が或部分は奪つて居ります、從て

英文學中の初夏や晩春に咲く他の二種の水仙に對しては漢文學の水仙は愈々遠く離るゝ許りてす、

和文學ては水仙と云ふものは全く歌には出てきませぬ、其原因は修辭學や聲音學の問題になッて今日御話する事には縁が少し遠くなりますから何も云はないておきましよう、和歌に反對して詩題を廣く取りました俳諧が初めて水仙を題にして居ります俳諧の裡の季には大部分は支那文學と同じく冬の部に入れておかれまして、まゝ春の部に無い事もありませぬ、此季に關しては少々議論をして見たいことがありますが、長くなりますからやめておきます、俳諧で歌ふ水仙は（ナルチッスス、タゼッタ）です又水仙に關係する意味も全然漢文學の影響を受けて居る樣で在ります、例へば水に關係のある花だと云ふ漢文學に現はれをる意味は猿蓑集の内の冬の部に「水無月の水を種にや水仙花」不玉、水仙は寒中に孤獨で白く潔く或は弱々しい姿を備へて居ると云ふ事の證據になる句が在ります、續猿蓑の冬の部に「なほ清く咲くや薬かちの水仙花」氷固、これは青い葉に反照させたのてす、芭蕉句集の熱田梅人亭座裏の閑を思ひよせて「水仙や白き障子のともうつり」千代尼發句集、春の部に、「水仙の香やこぼれても雪の上」「水仙は名さへつめとう覺えけり」俳諧袋下卷、冬の部に「水仙に日のあたるこそさむげなれ」「年明ぬうちと水仙咲てこぼれ」俳諧發句題叢冬の部「水仙や根に白玉のさればこそ」蓼太、「水仙や凩の音霜の朝」もゝき、類題發句集、冬十月の部に「水仙に炭扱ひし手な觸れぞ」一品、「水仙や三千人の花の後」風平、蘿葉集第一冬の部に「水仙や見送る菊のうしろ影」也有、蕪村句集、冬の部に「水仙や美人がうへをいたむらし」其他數多ありますが是丈にして置きましよう、

扨て以上述べた事で水仙花に關する一般の事は御了解になつたらうと思ひます、今日の日本文學には支那文學の影響に西洋文學の影響が加はりつゝ在る時代でありますから水仙の意義も次第に西洋の傳說からくる或る意義の加はる事も在るだろうと思ひます、水仙が和歌の中に詠まれるやうになつて來たのも事實でありまして又ギリシャの水仙に關する傳說より生じたる意味を含むだ新派の和歌も見た樣な思が致します、俳諧の方は西洋風の意味を加へると所謂いやみの在る文句になると言ひ囃しますから目に附く影響は無い樣に思ひますが後日どうなるものやら夫迄は分り兼ねます、要するに文學の研究者は眼を東西の文學に注ぎて詳しくあ

る事實を充分調ぶると云ふ決心を以て仕なければなりますまい、今日はこれで失禮して置きます、辯が下手ですから無かし筆記が仕惡くかつたで御座いましたでしよう、（完）

（社員筆記）

外國文學之研究

上田敏

私は外國文學殊に歐洲文學、又特に英文學の研究を聊か專門として居るものであるから、其れ等の文藝を研究し飜譯し紹介し輸入する事に就て二三の意見を述へ樣と思ふ。近來文壇の形勢は大に外國文學の長所を移殖して、我國の詩文に多大の影響を與へ樣と試る方向に向て居る。最も海外文學の呼聲は十數年以前にも可なり高かつたので、當時飜譯も頗る行はれ、又東西文學の比較或は融合を說いた人も少くはなかつたが、幾許もなくして國粹保存又た古文學の再興等の動機により、或は種々の原因よりして海外文學の研究は僅に文壇の一隅に潜む樣になつた。而しながら潜むと云ふても全く勢の衰へたのではなく、寧ろ眞面目なる少數の學者文士等によりて前よりも一層深き研究の方に向て來た樣である。此の間に文壇の他の人は主として文章の練磨に從事し、他を顧ずして自家の思想を充分に現はさうと務めて居つた。之れは今日から顧れば其有益なる事業であつたので、其れ以前は生硬なる文章又は粗雜なる思想を以て妄りに歐洲文學を賞讃し、又摸倣し樣と試た人ばかり居て、眞の利益を我文學に與へなかつた。其弊害に堪へなかつた間、寧ろ一旦退いて將來の大文學を起すべき基礎を造らうとしたのであらう。此點に於て私は故人尾崎紅葉君等の盡力を頗る多とするのである。若し尾崎君たちの樣な藝術上の良心を以て、思想を現はす唯一の方便たる言語文章等に細かい研究を積む人が居なかつたならば、如何程に外國文學が好いものとしても、今日之れを我國に傳へる事が出來なかつたであらう。其れは明治十何年時代の飜譯書又は新躰詩等を見ても明にわかる。

然しながら今日では今後の大文學を造るべき準備が稍備て來た。從て今日の讀書界は元祿文學又王朝文學支那文學等の所謂「第二版」を喜ばなくなつた。尙一層進んで更に高き更に大なる更に深い思想を望む樣になつて來た。從て之を歐洲の文學に求める樣になつたのは自然の勢である。外國語の智識も漸々と普及し、外國

書の紹載も頻繁に成つたので、之れを愛讀し又紹介し樣とする者が非常に增した。其れ故に今日の此の如き海外文學を歡迎する時に當つて。一二の注意をするのも敢て無益であるまい。

抑も今日文壇の人が熱心に歡迎する歐洲文學は果して如何なる種類のものであるかと云ふに、多くは最近の小說議論又詩である。其れて英語と獨逸語とは日本の學者學生の最多數が通じて居る處であるから、海外文學と云ても重もに英文學又獨逸文學であるか、或は之れ等の言語を通じて佛蘭西、露西亞、伊太利亞等の文學を窺ふのである。又獨逸は議論の多い何事にも理屈をつけたがる國風になつてあるから、文壇に立て批評を專一とする人は好んて獨逸文學を硏究する樣てある。又佛蘭西の小說は兎に角近世の文學に於て一流の地位を占めて居るから、多數の人は英譯なり獨逸譯なりによりて最近の佛蘭西小說を窺ふ樣になる。其上米國にて發行する文學雜誌は歐洲文壇の近況に就て色々批評を試み、其日其日の文學の流行を紹介して居る爲め、我日本の讀者も之れに依つて多少海外文壇の動靜を詳にする樣になり、新しいもの新しいものと珍重する樣になつた、之れがざつと我國に於ける海外文學研究の形勢である。

然し私は此の形勢を餘り喜ばない、其故は二段に分つて論する事が出來る、一つは文學其もの丶性質よりして今日の形勢を批難するのである、もう一つは今日の海外文學研究者の態度に反對するのである。

言ふ迄もなく文學は科學或ひは工業或は軍器等と異つて、最近最新のもの必すしも最上のものと云へない。古來の文學には人間として多少の智識を其れに付て持たねばならぬ、傑作が少くないのである。其れ故に本末輕重の點より論すれば、先つ我々は數千年間の文學に於ける傑作を一と通り味つて、其の後今日の流行を見るべきである。然るに我國に於て西洋文學を云々する人は Homer（ホウマア）Sophocles（ソフォクリイズ）Dante（ダンテ） Shakesphere（シェクスピヤ）等の作を讀まない中からTolstoin（トルストイン）Ibsen（イプセン）甚しきは Zola（ゾラ）の書を喋々する樣な傾がある。外國人として我々から言へば、實は Zola の如き書は讀まなくても恥とするに足りないが、沙翁の如き古今の大詩人は人間として是非共知らなければならないのである。又書物の數は殆んど無限と云ふべき位であるから、短き生涯の間に書を讀むものは始めよりし

て選擇を謹み、成る可く善良の書を讀まなければならない筈であらう。勿論選擇に付ては讀者一箇人の事情性質趣味等によりて色々違ふであらうが、先づ Lubbock（ラボック）の名著百種等によつて選擇したならば、敢て甚しい誤は無かろうと思ふ。近頃世間に行れる「世界文學叢書」の如きは之れを完全に編纂したならば、至極有益の書と思ふが、其書目の選擇に付ては少しく疑があるので、何故に Homer と Goriki（ゴリキー）を並べ、Dante と Maeterlinck（マアテルリンク）を隣りさせるのであるか、所謂不倫の誹を免がれまいかと思ふ。

第二には一歩讓つて、最近文學を是非共研究しなければならぬとした處が、今日の樣に複雜した文學を味ひ、其妙所を我國の文學に移さうと試るには、是非共前から傳へて來た文學上の遺産を知らなければならぬ、之れを知らなければ文學上に現はれた意味をだに解する事は出來まい。其れ故我國の海外文學紹介者は、俗に所謂大味の文學をのみ稱揚して　微妙な詩趣を含んで居る藝術を等閑に付する樣である。又外國雜誌等の批評によりて止むを得ず、さう云ふ微妙の作に感服せざるを得なくなつても、遂に其何れに妙があるのであるか解らずにしまつて、誠の妙味を傳へる事が出來なくなる。例へばイプセンにしても、其曲中の人物が用ゐる對話の引きしまつて贅辯が無き爲め、全篇の大躰なる倫理觀を大に發揮して居る邊に氣が付かない樣である。maeterliuck に付てもさうである、あの人形芝居又は論文等に現はれた神秘の聲調は、其日本譯又は批評文にも多く現はれて居ない、Niezsche（ニイッチエ）の議論をする人も彼が文躰の美を傳へる事が全く出來ない爲め、或は之れを味ふ事が出來なかつた爲めか、彼ら單に肉慾の奬勵者の如く讀者に誤まらしめ、或は單に亂暴な虚無主義を怒號する狂人の如く傳へて、少しも彼が特色である Dionysos（ディオニソス）風の詩趣を知らしめなかつたてはないか。以上の失敗は必竟するに文學の遺産と云ふ事に氣が付かなかつた爲めてあつて。古來の傑作を多少味ひ、之れに養成されたる趣味と智識とを以て近世の複雜なる文學に對はなかつた爲めだ。其れ故に私は近世文學を主として味いたいと云ふ人にも、今日一般に海外文學を唱へる人々の説に反對して、先づ古來の傑作に眼を通す事を勸めるのである。

（社員筆記）

美と德

ハーバート、パルマー原著
淡子生譯

倫理學の根本概念は審美學より來る

善の有機的完全といふ概念は審美學より來り、道德の指導に取りては此の概念に優りて重要なるものなし。人が初め此有機躰的完全といふ概念に遭遇するや、其の生活史上新に一時期を劃出す、之れ科學の基礎なり。恰も小兒の如く、吾人が初め世界上の目に觸るゝものを一々眺むるや、凡べての對境は互に獨立せるものゝ如し、軈て初め獨立すると見たる種々の對境は其の實相結合して、或る意味に於て此方は彼方に依據せるものなることを認むるに至る。而して遙か後に到りては一が他に依據せるのみならず、其の實世界上にありとある各對境は凡べて互に相屬せるものなることをも認むるに至る。吾人が是等の思想を得、且つ一物を理解するには他の凡べての事物をも理解せざるべからざることを知るに及んで、初めて不完全ながらも吾人は科學的智識の人となりたるなり。

また如上の思想の出來ざる內は、吾人は道德的の人にもあらず。小兒は或る强き衝動に驅られて一方に向ひ、また他の强き衝動に刺激せられて他の一方に向ふ、今切に此方の物を欲するかと見れば、また直に彼方の物を欲し、渦捲き起る幾多の慾望に驅使せられて片時も落ち着かず。此かる際に小兒に働く力は遠心力ともいふべく、中心の自己を斷片に分裂し、各自別々の方向に働く、之れ未だ確然たる個性の完成せざる場合なり。軈て是等の種々樣々なる情慾は到底獨立には價値を測り難しといふ觀念が屢々萌しそむるに至る。數多き慾望中にて一つのみを引き離して、善とか惡とかの批評を下す能はざるなり。「自己の性情より出て來る各衝動は、完全なる自己を構造せんが爲めには幾何の助力をなすべきか。」といふことを顧みざるを得ず。斯くの如く、自己の反省を經て出來たる衝動に到りて初めて其價値を認識せらる。幼稚なる心に此の有機躰といふ概念を生ずるに到つて初めて小兒の心狀態を新にし、道德世界は忽ち眼前に開展し、尙ほ一層大なる自己を造らんことを熱悶し、其の自己を以つて個々に他の自己と結合して互に助くるに到る。此の有機躰的完全といふ概念は圓滿完全といふことに引き總べられ、直ちに

美的對境となりて吾人の感情に顯はる。最もよく有機組織の重要なることを示すものは美なり。「全躰の上に注意し、生活をして散漫ならしむる勿れ、事物相互の關係を思ひ、其の完全より如何なる平和を贏ち得るかを考案せよ。」とは道德上の箴言なり。

審美學に依りて倫理學は法律と相和するを得

斯くの如く事實上、道德的生活が審美學より得來る所夥し。更に吾人は法律と一致せんが爲めに美を要す。誰れしも往々義務（オブリゲーション）の爲に束縛を感ずることあるべし、吾人は義務（デュウチイ）として之れ成し遂げ、最早自由になりたるものと思へるに、直ちにまた他の義務が眼前に顯はれ來り、吾人の氣に向けることをなさんとするに其れを廢して義務に從へよと强ゆ、是に於て其の命するがまゝに從ふも、吾人の責任は嘗て果さゝるなり、何れに向くも果すべき義務は相次いで來る。人生はさながら義務の奴隷たるが如き感あり。道德が苛責の笞は嘗て其の音を斷たず。吾人がしばし休息してせめてもの娯樂を得る場合に、他の方面からは義務の聲が襲ひ來り、欲する所は止め、義務が命する所を成せよと迫る。吾人はもとより生涯の幾部分を割いて之れを義務に奉ぜんことを思ふと共に、また義務を果たせばとて吾人々生はしかく憐れてのみ了るべきものにあらざることをも認むと吾人の頸は常に義務の桎梏に束縛せらるゝを感ずるの要なし、吾人は一生涯中少しは娯樂をも感ぜざるべからず、義務の苛税の爲めに此の一生を費消せんこといと本意なし。

さて此の緊き義務の爲めに惱殺せらるゝ吾人々生を和めんもの、美が有するものを除いて他に無し。何となれば美の境界は則ち悅樂の境界にして、美の有る所に於て、吾人は最も愉快を感ず。吾人は本能的に此の美的對境の魔力と義務の嚴命とを相反するものとなす。併しながら此本能的反對は果して正當なるか、仔細に撿するに美の中には最も多く法律が支配せるを見る。前述せる如く、美術は變化し易きことを拒み、また完全といふ法律の下に支配されたるものゝみ美的對境となるを得。然れども其の結果は矢張悅樂なり。吾人が長く義務の連續を追ふて行く時は快樂は法律以外に存することを思ひ、而して其の義務の命令を免がるゝことを得ば快樂は吾人の意に叶ふ快樂たることを想ふ。而して美は恰も其の反對を示す。美に於ては他に於て見るよりも一層高き程度に於て法律の支配の力を有す。吾

人が最も鋭く快樂を感ずるもまた此の美に於てす。從つて凡べて美的對境は道德的生活の品性如何とも關係して光彩を放ち、或は放たず。法律と悅樂とは敵せずして密接す。故に吾人が法律に服從せるが爲めに自己を束縛せられ、快樂に遠かれりと想ふは其の實誤謬に屬す、加之却つて十分法律の加はることを容さゞるが爲めに快樂を外すことあり。

此の敎訓は如何なる場合に於ても同一の感を與ふべきか否かを知らず、然れども苟くも美といふ標準よりいふ以上は如上の眞理は疑ふべからず。適用せらるゝ範圍極めて廣し。例へば秩序を重ずることもまた少なからぬ羈絆なり、即ち假りに室内に歸り來れる際に當りて、帽子も、上着も、靴も脫ぎ次第に方々に打ち遣りたりとせば如何、是等の品々を乘て置き慣れたる所に形付くるまでは、吾人は義務の念の爲めに平和なること能はざるべし。然るに秩序を欲するの情を免がるゝことを得なば、吾人は獨立の生活を營み、懸念を續くることを免かる。然して一度び轉じて美の境界に入る時は斯くの如く考へず、吾人は凡べて生活の機能が明瞭且つ判然たらんことを欲す。例へば靜座して業を營める際には起つて動くことを欲せず、安樂椅子に凭りかゝれる時には靴を穿き、または上着を着することをも欲せず、机上に於て讀み書きせる際に之と相關せざる事柄の爲めに妨げらるれば快樂の感起らず。是等の場合に於て不一致といふことを忌むこと音樂に於て破調を忌むと一般なり。秩序の審美感をして聞き慣れたる音樂の審美感の如くに訓練せしめよ。秩序といふことは勇壯公明なる生活の美を表現せるものと認めらるゝなり。秩序のなき所には機能は妨げられ、快樂は永へに消滅せらる。故に道德的の事柄を審美的に解し、美感に養成せられたる眞の見識を以つて峻嚴なる義務の命令をも甘んじて行ふやうに勤むるはいと賢き業なり。

審美學に依りて倫理學の極致を確定することを得

尙ほ他に倫理學が審美學に負ふ所のものあり、即ち倫理學に於て求むる目的は審美學に依つて達せらる。吾人が善に到らんことを欲し、何等かの手段を以つて吾人の生活を道德化せんと試むる時には、究竟の極致が遂に到達せらるべきことを豫期して道德化することを力めざるべからず。例へば吾人が今學術を修めんとするには、出來上りたる後の智識の總額といふ一つの極

致を豫め念頭に置かざるべからず、即ち完全に修得したる人となることを求めざるべからず。斯くすればとて決して完全に修得したる人となれるにはあらず、或る智識の程度に達するや更に新なる研究の出來べきことを發見す、吾人は遂に最終の地に達すること能はざれども、心にのみは智識の極致を置かざれば研究の歩を進むること能はず。さて此の完成したる智識の極致は吾人を樂ましむる美はしき審美的目的なり。吾人が善人とならんとするは即ち完全なる性格の人とならんと欲するに外ならず。完全なる性格の人といふ理想は則ち出來上りたる、圓滿なる、美はしき人といふ意なり。事實吾人は斯くの如く圓滿完全なる性格の人は存在せざるを知る、併し努力向上の對境として心に此の理想ほどは置かざるべからず。しかし道德的生活に必要なる此の對境は、要するにまた美の上にていふ事柄なり。

此の點に於て人が往々陷り易き二つの相反對したる過失あり、既にいへる如く美に奉仕するもの必ずしも峻嚴なる道德家にあらず、通例之れを以て藝術家の生理的官能の甚だしく鋭敏にして、常に稍々虛靈なる世界に住める事の證となせり。元より感覺の鋭敏なると虛靈界に住むと二つながら危險あるは疑ひを容れず。併しながらまた一面の理論あり、美の愛慕者は完成したる結果の愛慕者なり、然るに此の完成したる結果は道德的生活に於ては有することを得ず、道德的生活は永へに未完成なり。今若し完全を愛づるならば根本的の事柄よりはむしろ、小さき、表面的の、容易に他と離し得る物に於て之れを求めざるべからず、即ち此の點に於て藝術家の性情には危險あり（譯者曰く美感强き青年が過大の結果を急いで煩悶をなすは此の點に在り）他の一面に於て審美感の薄弱なる者あり、是等の人は人間の義務が決して完成せられず、性格の完全も望むべからず、社會に對する務も全きを得ざるものなるとをよく知れり。斯くの如き人は恰も奴隸の如くに一生涯を暮らし、永へに外來のものに壓迫せらる。併しながら美は彼等に休息を與ふ。美を合點し易き人は到る所に美しく完全なる小天地を認め、是等の中に人が不斷に追求せる事物の爽快新鮮なる豫表を視ることを得。斯くの如く適宜に美を樂むことほど生活上の苦痛を慰藉するものなし。

「美と德」は長篇の一節を抄譯したるものなれば間々難解の處なり讀者諒せよ

思潮

露西亞人

「警世」　文學博士　白鳥庫吉氏

露西亞には中といふことがない、宿屋でも非常に貴族的か、極くひどい下等なものである、上流の人士は最高等の文明の教育があり、一般人民は無學文盲である、で亂暴なこともするが、淳朴愛すべき人民である、愛せずには居られない人民である、馬丁なども客に對して實に柔順である、其の貧乏と云つたら日本などには類はない、愛國心は甚だ薄い、が皇帝は神樣と同樣に渇仰して居るから、之は露國の恐るべき處であるが日本人に對する敵愾心などは露ほどもない、露西亞人愛國心がない代りに功名心が強い、教育とか何とか國內のとには人民が注意を與へぬ、外國のことになると皆耳を欹つる、で內地には隨分立派は土地があるけれども抛つて他國の領地を冒す、內は荒らして外を取る、國の緣りの方が一番開けて居る。(中略)

露西亞國民は隨分外國に對してはひどい仕打をするが、個人としての露西亞人は、實に心の大きい、親切な、愛すべきものである、日本人に對して敵愾心がある處ではない一體外國人に對する親切や其待遇振はとても日本に居ては想像はされぬ、

衞生と人種の改良

「大日本私立衞生會雜誌」

三年前に終りを告げたる第十九世紀の百年間(殊に其後半を主として)歐洲の人口は正に二倍增加し何れの年齡に在ても比較的死亡數は往時よりも迥に減少し殊に乳兒及成人期已前の少年者における死亡は甚だしく其數を減せり而して此改良は專ら醫學及醫術の進步のみに歸す可からずして寧ろ各國人民の富を增し隨て知らず識らず營養、住居及攝護の改善進步を致せしに基く所多しとす、然れども或一派の偏見者に由て揚言せらるゝ如く現今の衞生は個人的には有益ならんも國家的には(即ち國民全般の上より觀れば)却て有害なりとの說には贊同することを得ず、此說に據ればダーヴヰン氏の首唱せし如く適者生存の天則に隨ひ弱者は亡びて餘類なく人類は益々强者の後裔のみ榮え行くべきものなるに人爲的衞生法を以て强て弱者の生命を繫き之をして更に弱性を遺傳する子孫を生育せしむれば各個人は比較的其健康を進めたりとするも國民全般は病弱者の生存及繁殖に由り却て健康不良狀態を呈しダープヰン氏の所謂自然選擇(即ち弱去强止まる)の好結果を妨害するに至るべしと杞憂するものあり、是れ一見眞理を含むの說なるが如きも確實なる學術的檢査の成績殊に人種學人類學及民勢統計の研究に從へば衞生學及醫學の進步却て人民の衰弱を釀すとは荒唐無稽の臆斷にして事實は皆々其反對を證明するものなり今茲には一一民族の消長死生統計の實例實數を擧ぐるの煩を省くと雖ども最も手近にして最も顯著なる普通の實例を擧げて之を證せん

に現今文明各國に於て見る所の死亡數の減少は決して人種の質體的衰退と提伴するものに非ず先づ近來行はるゝ多數の學校衛生的檢査に隨て通覽するに富裕者の子弟は其體格一般に貧困者の子弟よりも善良なること爭ふべからず換言すれば進歩せる醫學衛生學の保護を受くること多きものは死亡少なく出產多きと同時に體質漸々改善せらるゝこと明白なるものなり、（閥族富豪游惰の餘弊を受けたる本邦の近き過去及或る部分に於ける現在の狀況は姑く例外とすべし）又文明國人身長の平均尺は斷えず其祖先に超勝しつゝあり是れ實例上明白なる事實にして其面白き一例は近時行はれたる英皇戴冠式に際し英國の貴族等皆其祖先の着用したりし古式の甲冑を出だして之を被らんとせしに其大多數は身體長大甲冑短小復た其の用をなさゞりしと云ふ其他欧米各國に於ける軍隊の體格檢査上人體增强增大の事實を證明して餘蘊なきは何人も知る所なり、（近時及將來における本邦の成績も亦蓋し然らん）是れ前世紀における醫學及衛生學の進歩が國富の發達と相待ちて死亡を減じ人口を增すと同時に比較的個人の體質をも改良し隨て一國民一人種改良を促すの結果を見ると決して疑を容る可からざるなり、故に醫學衛生學の進歩は自然淘汰の天則に背馳しては虛弱者の餘命を保ち痼疾者の遺傳を養ひ以つて國民人種の衰頽を來すとの說は根據なき僻論臆斷たるを免かれざるなりと、然れども文明の一面は交通を敏捷にして傳染病の傳播を助け資本勞力の競爭遂に勞働者をして失望及無健全の地位に陷らしめ物價騰貴生計困難の結果甚だしきは人爲的に人口繁殖の過絕を行ふが如き極端の弊害なしと云ふ可からず是れ文明世界における醫學衛生學の責任益々重大となる所以なり。

現代教育の方針

「新人」社說

實用々々といふ聲は今や我が教育界の標語なるが如し。曰く教育の要は社會の實狀に適し、其需要を充たすの國民を造るにあり、曰く國家目下の急に應ずる底の人物を養成する、これ國民が我が教育界に向つて要求する所なり、今の教育の如きは、徒に理想に馳せ、空遠に走る、教育愈高うして其世と隔離する愈遠きに似たり、これ宜しく改めざるべからずと。吾人は前の西洋丸輸入、丸呑込、形式的模倣の時代に比して、我教育界一段の進境を此潮流の中に認むるものなれども、未だ之れに許すに半面以上の眞理を以てする能はざるを憾ずるなり。願ふに此聲は我國民が、現代教育の弊たる、効果（エツフイシヤンシー）實績に乏しきことに對する不平の呼なり、皮想的形式的學問に對する反抗の叫なり、此點に於て吾人は世の論者と共に其感を同うせざるを得ず。されど、此弊が果して論者の所謂實用的教育に由つて救はるゝや否やに至つては、吾人大に疑なき能はず。（中略）彼等が吾人は、世の論者の所謂、社會の需要なるものに疑なき能はず。社會の需要に應ずる底の國民を養成すべしといふや、可し、されど其必要なるものは何處に於て之を見るや、多額の俸給の與へらるゝ所、必ずしも社會が須つあるの場所といふべからず、多くの世人が口にして求むるもの、必ずしも之を國家眞正の要求と見做すべからず、口にせられたる要求の最も少なき所、却つて國家の最も缺乏せる所なるやも測られず、社會が此位の人物にて足れり、此位の知識にて十分なりとするもの、何ぞ知らん、そが眞の要求を自覺せざるか爲めにあらざることを。もした

だ現實の社會と最もよく適應する國民のみならんには、其社會は如何にして進歩發達することを得んや、社會は常に社會以上のものを要することを知らずや、社會眞正の要求を見んとするものは、現實の實社會が如何にして、より高き完全の理想地に進みうべきかの點に於てせざるべからず。加之、今や我が日本帝國の位置は已に舊時の日本にあらざる也、經濟的政治的精神的に、激甚なる二十世紀の世界の競爭場裡に立ちて、優勝劣敗の自然淘汰、人爲淘汰の嚴密なる法律の下に、歐米の文明國を相手に文明的戰爭をなさゞるべからざるの今日、其國家的生命を維持するさへ、一通りの覺悟にては及ぶべからず、況んや世界文明の進化に參して對等の位置を保ち、もしくは東亞の文明を代表して世界的文化の運和普及に率先するの天職を全うせんとするに於て、間に合はせ學問なるもの、よく何をか爲さんや。人は國家の急務に應ずるをいふ。されど教育のことは百年の長計なり、常に國家目前の急なるのみ顧みるは、これ政治に於ても、所謂今日政治家の爲す所也。よく百年の命運を察して其上に策を立ておくにあらずんば。決してその所謂急務なるものに應ずるを得じ盜を見て繩をなひ、水の決するを見て堤防を築くが如きは、教育上に於て特に其効なきを知る也。我明治の教育は常に此今日政策を趁へるが爲めに、常に此今日政策を執らざるべからざる狀態に苦めらるゝにあらざるか。(中略)

世多く云ふ、今の教育は高遠に馳すと。予謂ふに之れ當らず、日本の學校、何れの所か高遠の學を講する所ありや、日本の學者、高遠の學識を蓄ふるもの、よく幾人かある、日本の學生高遠の學に志を立て身を委ぬるもの、よく幾許ぞ、淺薄皮相の、間に合せ上すべり學問は滔々として上下其風をなすにあらずや。論者或は帝國大學を以て高遠の學を講ずる所となすか、これ高等なる專門學の入門を、書籍よりノートに、ノートより耳に、耳よりノートに、ノートより試驗の答案に移す所に過ぎざる也。諸賢の頭腦より、十聞一知の頭腦に文字を卸す輕便商店なり、高遠どころか學問そのものすら果して此中にあるやを疑ふ、其他の學校に至つては、固より論ずるに足らざるのみ。されど予は之を以て強ちに教授と生徒とのみを責むる能はざる理由を知る、但だ今日の學風を以て高遠に過ぐといふものは、未だ學の實際を知らざるものなるを言ふのみ。日本の學界は未だ決して高遠を以て苦まず。むしろ其淺薄なるに苦み且つ恥入る也、現代學界の此淺薄を以てしても尚且つ日本社會に取つて高遠に過ぐとせば、日本帝國の運命も亦た憐むべき哉。若し夫れ、今の教育が實績に乏しく。高等教育をうけたるものにして役に立たぬもの多きが如きは、輕便手輕なる學風を以て救はるべきにあらずして、獨り堅實透徹の學風に由つてのみ成さるべきを信ずる也。しかしてこれたゞ、高等教育に於けるのみならず、初等教育は初等教育に於て中等教育は中等教育に於て、各皆此精神に立ち、完全なる國士たるに切實なる教育の行はれん日、茲に始めて國民教育の實績を擧げて、國民生活の力を増し、其狀態を高むるをえん。

各國の公園

「日本人」社説

英國の公園は全體の風致牧場的なり、全園植ゆるに芝草を以てし、滿目皆な若色、其の色特に鮮かなり、時として羊群あり、俯して食み、飽きて眠る、全く牧場の形あり、而も大樹を處々に植え、若々たる芝草の上は人の自由に步するに任かし、座ろに心神の爽快を覺えしむ。大陸諸國の公園は多く芝草に繩張りして人の入るを禁し、英國の出入自由なると

反す、或は此に就て言を作して曰ふ、英國の芝は強し、人斷えず之を踏めども枯れざるに、太陸の芝は弱く、人あり偶々之を踏めば則ち靴痕を印すと。而も是れ元と謬見に出づ、英國の芝は太陸諸國の芝と異なるにあらず、但だ前者の之を植えたる範域は極めて廣濶にして、人々同一の方向に進むこと少く、隨て靴痕の呈露すること無きのみ。芝草を培養するの難きは世人の認むる所、若し一定せる肥料の供給を怠たらば、則ち其の生育に害ある甚だしく、若くは植え付けたる儘に放置すれば、厖々雜々見るに堪へざるに至らん。然るも培養の法宜しきを得ば、四時常に蒼々として色を變ずるなく、宛がら青色の絨氈を敷き詰めたるが如し、壯者の之を踏みて運動する意のまゝなるに加へ、小兒は特に跳奔自由にして、娛母の附き添へるも、一々煩細なる注視を要せず、如何に遠く驅けり劇しく狂ふとも害を受くるの憂なく、急驅して顚蹶し或は横臥展轉するも、毫も傷を被むらず、かくして兒童は自ら自由の空氣を呼吸し得るやに見ゆ。

植ゆる所の樹木は必ずしも木材として良好なるものに非ず、其の多くは則ち橡又は山毛欅(ブナ)の類にて、良材ならざれど、其の綠葉正に伸ぶるの時に方りては、頗る眼を悅ましむる所あり。オーク樹は木材として良好なれど、我國の柏樹と類を異にし、冬季に到れば其の葉墜落すとして怪まるゝが、樹葉の墜落するは其の柏に非ずして實は檞なるに因る檞の葉の冬季に入りて疾く墜落するは亦た我國に觀る所たり。冬季に落葉すべき樹木を樹ゆるは何故なるかの問あるが、蓋し然るに非ずんば以て葉色の鮮綠なるを望むべからざればなり。我國の如くに松樹を植ゆるは極めて稀れにして、會々之れ有るも蟠龍蹲虎の狀を作して枝葉翠蓋に似たるものに非ず、總じて痩幹亭立、枝葉宛も圓筒狀を作し、復た我國に見る所の雅趣に似ず。

獨逸の公園に松を植ゆる多し、而も亦た我國に見る所の如く幹枝盤屈して巉崎礧砢なるはなく、皆な細幹の項上に數小枝を分岐し俗に所謂ヒヨロ松の名あるものなり。但だ松は公園内に栽植せる樹木の主たるものに非ず、他に尙ほ種々の樹木あり、菩提樹と呼ばるゝも少からず、此の樹は我が北海道に在りて菩提樹と呼ばるれども、夫の釋迦牟尼佛の悟を開けりと稱する印度の菩提樹とは全く類を同じくするものにあらずは其何故に菩提樹と呼ばるゝに至りしかは判然せず。雜多の樹木を植えて林を成し、意の欲するに任して其の間を逍遙散策するを得る、是れ英國公園の牧場的なると形を異にして實を均くするもの、獨逸人は其の性森林を好む、謂ゆる自由は獨逸の森林より出づといふもの。多少沒すべからざる理あるに似たり。佛國の公園は芝草を植ゆるあり、樹木欝蒼として一大森林を成すあり、フランテンブロの如き、實に大なる森林なり。而も一般には假山を築き小池を鑿ちて、以て人造の巧を添へたり、其の最も甚たしきはブット、ショーモンにして、全園盡く人工の山水より成り、大なる巖石、大なる洞穴、總べてコンクリートを以て造り、内部空洞なるが故に、之を叩けば瞠々として音響あり。凡そ人造の山水を造築したる此の如きは他に之れ有る無し、元と奈破崙三世の時、貧民窟として常に惡事の淵叢たりしを取り毀ち、百萬圓を投じて造營したる所なり。米國は新開地なるが故に國内に在る所の公園亦た種々の形を成す、紐育は其の地質岩石多きが爲めに、公園を作る勢ひ人造的ならざるを得ざるも、費府の公園は見渡す限り芝草を植え、全く天然の景致を具へたり。米國には又た公園の外、別に國園なるのあり、其隨一たるイエロー、ストーンは八百餘方里の廣きに亘り、高山峻嶺、天然の絕景を收拾す、ヨセマイトは、前者に較ぶれば小なれど、亦た同じく偉大俊崇なる天然の風景を收めしもの、譬へば我が富士山全躰を認めて公園と爲し、日光山

全體を收めて公園と爲すが如し。

我が日本は公園の大なるに於て歐米諸國に劣ること遠し是れ蓋し人家稠密の度、歐米の如く甚だしきに至らず、各自邸内多少の庭園あり、特に公園に赴きて新鮮の空氣を吸收し青草緑樹を觀て眼を娯ましむるの必要を感ぜざに因る。然るも將來商工業の益々繁盛に赴くに從ひ、必ずや市中に住居する者をして充分の庭園を有する能はざらしむるの時あるべし、是に於て各自漸く新鮮の空氣を吸ひ青草綠葉を看るの必要を感じ、隨て公園の必要を感ずるに至るならん。此時に當り上野及び芝の二公園の如き固より不可なるに非ざれど、更に各人の隨意に運動するに處を給するも亦た切要ならずとせず、英國流の牧場の如きもの、若くば獨國の森林に似たるもの、亦た面白ろしとせられん。即ち此の新たなる必要を滿たさんとする、我が東京の何處を可とすべきか、今遽かに之を定めんは難たけれど、想ふに他日萬國大博覽會の開かるゝある、會場の遺跡は當に大なる公園として保存せらるべし、田端の附近は以て牧場的公園たらしむるに適すべく。目黑附近は以て森林的公園と爲すに適すべく、其の他公園設置の目的を以て探査する、則ち好適の地は尙ほ處々に之れ有らん。而して是れ實に漸々問題と爲り來るべきもの、徒らに小事として等閑に附し去るべきにあらず。

割烹の普及を喜ぶ

「東京教育公報」 赤堀峯吉氏

日本人は、兎角食物の話をすることを避くるやうにしてをる、昔しの武士は、金錢の計算の詳しいの厭をたといふことがありますが、日本人は、此食物のことに就ては、餘り話に出さない、食物上の事に就きて、誠に興味が少いやうてあります、是は細君たる、一家の臺所を主とるものが、其方の知識、素養といふものがないから、他の一般のものに、それを許するやうの程度迄深く注意して居らぬのてあります、さういふことては進歩は出來ぬことてあるから、時々料理品評會といふものを起して、其献立に就て、互に批評して善い方針に進むやうに致したい、決して從來の通りにて甘んずべきことてはありませぬ。

日本人は男子にしても、女子にしても、先づ遠國に旅行する、所々の名所古蹟を探避暑なり防寒なりに他國に參りましても、皈國致しましても、其名所の古蹟のことは、滔々と述ふるけれとも、其見物して來た所の、言語とか、風俗とか、人情、教育の有樣の如きは、一寸六かしいとしても、毎日〳〵食して居つた所の食物の調理に就ては、とんと不注意に過してをるのが多いようてあります、之を仔細に心に留めて興味をもつやうになりましたらは割烹に從事するものも、大きに刺激を與へられて、改良上に裨益することが、大きいことゝ思ひます、私は非常に割烹の近頃盛になりましたことを喜ふと同時に、又世人一般の深く御注意下さつて、改良進歩に刺激を與ふるように致したいと思ひます、

躰育と家庭

「躰育」 佛國 リキヨル博士
日本 前田越嶺氏譯

試みに田家を視よ、所謂村童なる者は强健なり勇壯なり、好顏色あり、堪忍あり、裸脚無衣にしく、屢々弟妹を脊負ひ、雨風寒暑を物ともせず、時に炎熱やくが如き日光の下にも嬉々として戲れ、何人も之を顧慮せざるが如くなれども彼等は林中の樹木の如く自ら生育す、粗野なりと

言はゞ云へ、其の健康其の好顔其の滿足眞に羨む可きなり、彼等は平生何を食しつゝあるや、麥飯のみ芋のみ、大根のみ米の飯の如きは祝祭日と誕生日にあらざれば之にあづかる能はず、而るに之を朱閣高樓に在りて金衣玉食しつゝある貴兒に比するに、何等の相違ぞ、後者は入るにも出るにも夥多の婢僕あり、暑さ寒さにも當てじと心配し、風吹く日、雨の降る夜などには、何等の憂慮ぞ、其貴重なる掌上の玉の存在を保持するが爲に斯く力を竭し、斯く金を費す所の教養撫育も其の結果果して如何ぞや、人は知る、徃々心共に虚弱なる人間の出ることを。

昔者日本人は高崇の心を有し、武勇と徳行とを萬事に越えて尊重したるが故に、此時には高貴なる家庭に於ても父母は其の子に嚴格なる教育を授けて、勞苦に堪ふることを學ばしめたり、所謂武士教育なるものは、實に此の如きものなりき、當時に在りては義を貴び名を重んじたるが故に多くは皆家門の榮と國家の譽の爲に幼より老に至るまで專ら此方面に力を盡したるものなり、今日に至りては利己主義と快樂主義が入り來り來れるが故に、人々皆成る可く勞苦少うして利樂の多き方面にのみ就かんことをのみ志せり、隨て兒童の教育に就ても勞力に堪へしむる道に重きを置く者尠く、我子孫をして勞苦なく生を送らしめんことのみ顧慮せり是を以て今日の富貴なる家庭に嚴格なる教育所謂武士の道の如きものを授けむとするには、須く先づ今日の人々の精神を改變し、現時主義を利樂より轉じて徳行に移し、勞苦と堪忍を重んずべきを知らしめざるべからず、時代の精神が利己主義と快樂主義とに在る間は、嚴正なる男兒的家庭教育は斷じて行ふ能はず。

夫れ天下凡ての家庭皆富裕なりと云ふべからず、貧困にして日々の生計にだも苦むものは多數なり、此父母貧苦に迫まれるときは、其の子供は虚弱にして勞力に堪ふる能はざるが故に、先づ第一着に其の貧苦の犠牲とならざるべからず、是れ等に當りて教育を語るも何ぞ能く爲さん、空氣なく、光明なく、衣服なく、食物なき所に、教育談を揭ぐるも殆ど益なし是故に教育をして家庭に、社會に眞箇効益あらしめんと欲するには、飽迄も徳育と提携して、勞苦を忍ばしむる方面に最も力を盡さざるべからず、勞苦を忍ぶ者貧困と雖、なほ福なり、勞苦を忍ぶ能はざる者は富裕と雖、禍なり。

教育に就き家庭の母は特に注意を乞ふ可き事あり、兒童は可動性ある者なれば、設令喧騷なる擧動ありて、母の働きを防ぐるが如きことありても、其の健康、其の發達の爲に之を許して可なり、兒童を沈默と不動に處するは、其の精神と其の健康とを共に殺すものなり、又本邦の家庭に於て特別外人の奇怪に感ずる事は、母が子供に朝から晩まで樣々のものを食はしむる事是なり、甘酸生熟等の如何に係らず、手に入るものを悉く其子に與ふるは、よく其子を愛する者と云ふ可からず、勿論子供は食物を得て嬉々として滿足の狀を呈すべし、然れども是が爲に間斷なく食するの習癖を馴致し、尙其上に腸胃を害ふて、病氣を釀し、遂には壽命縮ること徃々にして之あり、是よりは寧ろ泣くも、騷ぐも叫ぶも其儘に遺棄して、幼より節制の美習を馴致せしむるは、却て子供を愛し子供の爲を計る道なり、と謂ふ可きなり、賢明なる母は之を解するに苦まざるべし、又之を其の家庭に實行するに齊ならざるべしと信ず。

詞藻

萬歳

繞石選

萬歳やうたひながらの軒隣　牛歩
萬歳や又一人行く暮の門　同
萬歳の皺も早し霜の京　同
萬歳の笑はぬ貌ぞ可笑しけれ　同
烏目を扇にうけて御萬歳　同
温泉の宿や萬歳をよぶ旅の興　鳳梧桐
萬歳に馴染もあらん宿場女郎　替湖舟
乗合に萬歳も居て夕渡　同
入り代り萬歳來るや上手下手　丁堂
萬歳や醉ふて烏帽子のうしろさま　同
萬歳や門過ぎがてに入り來る　虚牛
山越えて萬歳來たり梅の里　同
賀客去り万歳次て來りけり　同
萬歳や奥の一間の女客　芒生
萬歳や下駄の歪みも松の內　同
水涕も物の愛嬌や御萬歳　同
萬歳のちよと戯ふや女の子　萩生
萬歳やさとひろげたる日の扇　同
萬歳や親子傳へて十五代　同
萬歳や唯風寒き大玄關　同

（天地人を置かず）

選者吟

萬歳に酒振舞ふも春なれや
格子戸をぐわらりと明けて御萬歳
萬歳を太郎次郎の眞似も春

三月分課題　海苔（二月十三日限）

舊きうたよみの宗匠達に

田中美風

世をさけて歌にかくるゝ才ならず
おもひみだれてたゞかくのごと

ぬえうたのはいから歌のゑせうたと
罵り〳〵つくる君かしこうた

詠み出る百うた千うた同じ歌
さてこそ君がうたたまつきね

巖上松

おほいはにふと根はびこり神の如
潮のはつ日に松そびえたつ

ゆるぎなき眞黑いはほに根をはりて
松は老たるいろなかりけり

途上所見

破れ傘にせなの見いとふ北風や
時雨長橋ひといたましき

雨すぎて北風さむき三條の
はしのたもとをぼろんじの行く

題しらす

御園生直幹

あだ露にぬれつゝなやむ唐草の
花にかゝやけ朝彦のかけ

もろこしの野末の草におく露を
とく吹きはらへ大和神風

餓鷲はおのが羽虫に攻られて
御養る事を如何になすべき

冬籠もる鷲もぬくめの鳥なくば
翼をはりて翔りやはする

寒林

百舌鳥のこゑもさびしき夕まぐれ
栗の樹林木枯の吹く

寒燈

妻戸打つあらしはさえて淋しきは
わかせまつまの燈の影

評論



世紀末

成川子

或る種の文字言語が、或る場合に於いて、非常に歡迎されることのあるのは、實に面白い現象ではあるまいか。何故なれば、其の文字を見た計りで、之れを歡迎する社會が、いかなる情態にあるか、又其の文字を慕ふものは、如何なる目的を有して居るか、否かが、大凡推定することが出來るからてある。

今一例を擧げて看たならば、十九世紀末代の歐洲には、フアン、ヅー、シークル(世紀末)なる語が流行した。否、今日尙流行して居る語て、世紀末の娘とか、世紀末の男とか、やれ何とか、かとか、とて無闇に此の語を使用した。而も一定の義を以てし用ひたのでは無くて、人々勝手次第の解釋を附したらしい。然し、其れ等多くの間から、一致した點を見出すことは決して困難ではない。吾が輩の見る所では、從來の習慣道德に反抗するものが即ち世紀末なる形容詞を戴くものであるらしい。これは尤も通常の場合に用ひらるゝ時で、特に文藝上では、老大家の時代去つて、新時代の勃興すべき時であるとの意に用ひてあるらしい。それは兎も角も斯樣な言語が使用せられつゝあるのを見たならば、歐洲の今日が、文藝上又は道德上、いかに混亂の情態にあるかを推察することが出來る。而して此の文字の如きは、現在の吾が國に用ひても適切なるものであらうと思ふ。

西洋で用ふる『世紀末』の意味は、ともかくも、字義通りに解して、一時代の末葉と見做したならば、吾が國の現狀は、實に世紀末の最も善い例であらうと思はれる。先づ政治社會を見ても、新人物を俟ち、文藝、道德、宗教、教育の各方面、さては實業、工業の社會に於いても、新思想の暗流あるは、蔽ふべからざる事實である。殊に文藝の方面では、此の文字が、立派に當て嵌められるのは、奇であると謂ふべしだ。尾崎紅葉山人、落合直文氏、此の二大家の長逝が、小說界又

は國文界の一線を劃したのを見ても、又團十郎、菊五郎の死と共に劇の歴史に一段落がついたのを見ても、又道德、宗教教育等の方面に於いて、反道德主義の波風が起らむとしつゝあるのを見ても、美術の世界に於いて、新奇の産物を出さむとするのを見ても、慥かに一時代が終つて、新時代當來し、新人物の起るべき世であると謂ふことが出來るであらう。

次に西洋に於いて、通俗に用ひらるゝ意義で、吾が社會を眺めたならば、果して此文字を用ふることが適當であらうか。余輩は、これ亦決して不穩當ではないと言ひたい。傳承の習慣を破つて、新奇なることを尚ぶとか、或は舊來の道德を踏み破つても、自己の利益を增大しやうと試むるなどは、皆な世紀末的である。廣津柳浪子が『太陽』誌上に掲げた『新思想』の女主人公が、苦境に沈淪する亭主を棄てゝ行つたのは、正しく世紀末的婦女であつて、これ今日に於ける其の種の女丈夫を代表するものである。七去も三從も正當の理由あるものでない、女にも自由はあるとの大議論を抱く婦人は、日々に增加する。又男子の方でも、中々世紀末的のものが多い。友情も、信義も、仁愛も、時と場合とに因つて、出たり、沒したり、消えたり、燃えたりする例は、數ふるに遑ない程である。

余輩は、かゝる情態が、不正であるとは言はぬ。然れども其の亂雜紛々たることは明白である。なほ此の通俗の意味と、高尚の意味とを考へ合はしたならば、今こそ有識の士が奮起すべき時機であることが、自ら明白となるであらう。

成功と奮鬪

成功といふ語が、いかに成功したかは、玆に喋々する必要もあるまい。所か、近頃では、稍其の効力を失つて奮鬪とか、健鬪とか言ふ語が、代つて流行する樣になつたのは、喜ぶべき現象である。

全躰成功など言ふ語が、流行するのは、一面に於いては、失敗者の多いことを證明し、他面に於いては、青年の胸底に、物質上の成功を欲する一念を萠さしむるものである。眞の成功を求むるものは始から成功しやうとの野心あるものでない。

若しも成功の秘訣かあるとするならば、それは健鬪である。奮鬪の結果が即ち成功で、目的は別に存在して居るのである。成功其の物を的目とする人があるならば、其人は決して成功を捕へ得ない、何故なれば物の

影を追ふて行くからである。

奮鬪、これ實に目下の我か國人の勉むべき所で、國民の生命、國民の精神、國家の膨脹、皆な此に因つて成立するものである。言を換へて言へば、活動的生活これが人々の進歩發達の原因である。全躰斯樣の事は今更縷々する必要もないが、此の語が、悪むべき成功といふ語に代つて勢力を占めた喜びに一言述べたはかりである。とは言ひ、文字だけ流行して、實行が伴はないであらうと言ふ憂がある。願くはこれをして杞憂たらしめむことを。

靑き花

『靑き花』が、何處かに在るさうだ。吾が輩ならば草鞋脚絆で、日本の山々は愚か、アルプスであらうが、ヒマラヤであらうが、ロッキーであらうが、見出す迄は跋渉する積であるが、何分運動費が不足であるために、それも出來ぬ。所で、或る大先生に、是れを見出す方法を相談した所が、先生曰はく、其れは見出すものでない。たゞ何處かに咲いて居ると信じて居りさへすれば宜しいと。

實際ある物ならば、尋ねても宜しからうに、これは又不思議、斯樣の花の名を知つて居る通人は、自分には此の花を持たぬ、そして欲しいと思ふと共に、別段に採取の決心を定めず、方法も講せず、ふらり〳〵と暮すべきであるさうだ。棚の上には餅がある。其の下で、口あんぐりと開いて、落ちて來るのを待つと共に食ひたい〳〵と思つて居ると同じ調子で、只空想に耽つて不活動の生活を送るのが、詩人といふものであるさうだ。苟も『靑花』を追ふものは、一定の目的を造るべからず、活動すべからず、成るべくは一室に籠つて空想に耽るべし。戀と平和の王國が、どつかに在つて何時か出て來る筈で、そこには例の靑花か咲いて居て、其の香が愛てある、此の世ては只考へて計り居れば澤山だ、仕事するのは後の世だ、詩が人生の起源だ病氣が眞の人生だ、と箇樣に悟れば、『靑花』が何時か見えるさうだ。

所で吾が輩は一言したい。『靑花』を欲するものは之れを望んで追ふべからず、と言ふ位ならば、寢て暮らせと敎へて呉れる方が解り易い。

日露の戰端開かるといふ今日、『靑花』信者が、續々出來たならば什麽であらうが。

併し一方から考へて見ると、『靑花』が面白い人生て

あらう。吁、青花なるかな青花なるかな。

讀者の罪

文壇は不振である。新年の景氣の如きは、畢竟一時の附景氣である。新躰詩も、小説も、批評も、皆な共に萎微して振はない。これ吾が號が久しい間聞かされた非難である。又不振は事實である。

然れども何故にかくも不振であるか、と言ふ點に關しては、種々の説があるやうである。其の一二を擧げて見たならば、或人は論ずる、作家が不勉强で、たゞ僅少の才に依つて、筆を弄するが故に、何時しか思想涸れて、只無意味の物が作られるのであると。又或人は言ふ、作家の經驗が尠いからであると。又或人は言ふ、評論家と稱する者が、作家を導くだけの能力を有たぬからであると。

此の他、調べて見たならば、多少の相異ある説が、いくらも有るであらうか、要するに、歸着する所は前記の説と大同小異である。さて此れ等の説は、文壇不振の罪を、廣義に云ふ文士に塗り付けたものである。換言すれば、文士が無能であるから、文壇が寂寞寥々となつたのである、と言ふ意味である。

勿論文士が、奮起せずに、空しく光陰を送つて居るとは宜しくない。また今日吾が文壇の文士は、惰眠を貪りつゝあるのも事實のやうである。即ち文壇不振の罪は文士の方面にもある。併し、それ許りが原因であらうか。かく推考し來れば、吾人は更に他の方面にも罪人が有ると思ふ、それは誰れか、讀者其の人である。

文士をして惰眠を貪らしめ、間に合せ物を作らしめ、其の美術的良心を銷耗せしめ、そして文學の衰頽を生ぜしめたものは、讀者社會其の物である。

今の讀者社會か、文壇不振の原因であると言ふとは何に依つて證明か出來るか。區別されば(一)觀美の心を失へて居ると(二)物質主義に偏して居ると(三)忍耐力を失つて居ると、是れ等である。

若しも讀者に觀美心があつたならば、作家が其の爲に美の發揮を工夫するは、多言を要せずして明白であるが、今の讀者には此の心が乏しい。即ち讀者が批評家たるの資格の幾分をも有たぬのである。そして其の樂む所とは何であるか。物質的快樂の追求は、今の讀者のなす所である。成る程、今の社會生活は、隨分激烈であるから、生活の爲に、能力を使ふとが多い、從つて疲勞も多い。さて其の疲勞を治するには、亦物質

的快樂をもつてする。

酒色に耽るとか、賭博に耽るとかは、極端の例てあるが、左程てないにもせよ、たゞ笑つて餘暇を送らむとする者は、甚だ多い。即ち腦力の入用ぬ事柄て、一日の疲勞を癒さむとする。これらが文學を、娛樂用とする人々て、またその目的に恊つた小說などを尋ね廻る、小說家が娛樂用の文學を作るのでなくて、讀者がこれを求めるのである。

第三に如何にも忍耐力に乏しいのは今の讀者社會てある。たゞ忍耐力と言つた許りては漠然として居るから、更に詳しく言へば、美を捕へむとする精神が弱い。平たく言へば、或る書を精讀する忍耐を缺いて居る。その證據には、一般に通じて、最小の勞力て、最大の結果を收めむとする傾向があるてはないか。くだ〳〵しき心理の解剖とか、敍景とか、對話とかは喜ばれず、何んても手ッ取り早く要領を傳ふるものが流行する。全じ議論ても、引例澤山て、記述が綿密て、又嚴肅てあるものは讀む人がなくて、其の論から一二の要點を拔粹したものが成功する。

誰れか斯樣の讀者を指して、文學の保護者であると言ふてあらうか。げに文學を殺す者は、今の讀者てある。文士とても人間てある。自分が精神をこめて著したものが、一向に批判にも載らず、書物も賣れぬと言ふやうては、生活することが出來ぬ。まして今の如く、我利を貪る人間許り多くて、躰裁上なりとも文學者を保護せむとする者なき世の中に立つて、妻子ある文學者が、生活の爲に、不知不識の間に、讀者の嗜好に投ぜむと企つるに至るは、已むを得ない次第て、寧ろ同情すべきてある。文學者の不勉强も、無能も、投俗主義も、畢竟するに讀者の罪てある。

かゝる讀者を作つたのは、社會が惡いのてあるが、此の先、此の種の讀者がます〳〵多くなつたならば文學は愈よ衰微するてあらう。因つて今の中に、新時代の讀者を作らねばならぬ。眞に文學を愛する讀者を造らねばならぬ。其の責任は、那邊に歸するか。言はずとも明かに敎育家。そは兎も角も、今の敎育家が、高尙なる讀者を養成するだけの能力を備へて居るてあらうか。此の點が。甚だ疑はしいと共に、吾が文壇の將來も心配てある。

紛々錄

●谷本梨庵子は、吊文專賣なり。それも德川時代の形式的吊文と、明治新時代の新式吊文との間を行くものにして、情の溫度も亦なまぬるし。而して是れから先き、當分の間、定めしお多忙のことならむ。何となれば、イブセン、トルストイ、ビヨルンソン、さてはスキンバルン等、皆な明日をも知れぬ先生なればなり。

●全體今日の吊文吊詞が、甚しく形式的にして、溫き情愛を有するものなきは、吾れ等の葬儀場に臨んで常に感ずる所なり。これと均しく祝詞祝文も亦、金箔文字に外ならず。

●現今の吊文は、たゞ死者は剛き人なり、これを失ひたるは悲むべしと言ふだけの意味を、色々に書き分けたるに外ならず。死者を傑物となすは、決して惡しきことにあらずと雖も、傑物ならぬ人をも、一世に卓絶せりなどゝ稱讚するは、却つて滑稽に終る。

●吊詞は、吾が知れる人を失ひたる感情だに現せば充分なり。死者を傑人として後に泣言を羅列するが如きは、清國人の葬式に看る泣男に類す。

●愛情を籠めたる吊辭が、葬儀場にて聞かれむには、今の社會が、心底より個人主義を憎まざるべからず。然らずんば幾數十年を經るも、冷かなる屍は、更に亦寒冷無味の言辭を以つて葬られむ。

●無闇に吊辭とか祝辭とかを、式場に上すは、却つて禮儀を亂すものなり。眞實に感情ある人々のみが、是れを言語文字に表せば足れりとす。

* * *

●獨逸のズーダーマン氏、吾が國に來遊すべしと傳へらる。文壇の諸氏よ、氏をして、あきれ返らざらしめむことを注意せよ。大阪博覽會を期として、文士大會を起さむとして失敗したる文界が、世界的精神を以つて獨の文豪を、迎へ得るや否や、覺束なし。

* * *

●日本人が、二言目には西洋々々と言ひながら、而も海外の吾が恩人に對して、報恩の心薄きは、奇怪なりと謂ふべし。吾人は必ずしも西洋人を愛するものに非ずと雖も、吾が文明を導き進めたる諸氏に對しては尤も多くの尊敬を拂はざるべからず。

●「ボーイス、ビー、アムビシオス」なる訣別の辭を遺したるクラーク氏の名を記憶するもの幾人かある。

◉ボアソナード氏は、今や殆ど忘れられたり。ヘボン氏亦然り、チヤムバレー氏亦然り。

◉吾が國の文學的思想を歐米に傳へたるラフカヂオハルン氏は、今や帝國大學を去れり。外科術の大家スクリバー氏亦然り。

◉數へ來らば我國の恩人にして、今や其の名を我が社會に失ひたる者多からむ。

◉くだらぬ西洋人が來遊したりとて、盛大なる歡迎會を催す程余裕あらば、彼れ等幾多の師に對して報恩の道を講じてはいかに。

* * * * *

◉死者は必ず溢美の言を以つて褒めらる。生前には惡口雜言を吐きし者も、敵手が長き眠に入れば、忽ち口調を變じて、縷々數千言彼れを尊む。「なくてぞ人は戀しかりける」の積ならめど、豹變の甚しき、噴飯に堪へざるなり。

◉吾人は死者に向つて、惡口を吐けよと言ふものに非ずと雖も、その人を無闇に譽め奉るは、男子たるものゝ爲すべき所に非ずとす。

◉人を評するは、生死に關する所なし。生死の別を離れて人を觀察せずんば、必ずや偏頗となる。蓋し人の生前に、多くの惡口を加へたる者は、其の謝辭として善言を陳列するものならむか。要するに今日の所は此の位なるべし。

* * * * *

◉交通機關のますます擴張せらるゝや、立派な紳士が、不平を鳴らすこそおかしけれ。曰はく、電車は恒に滿員にして乘り難し。曰はく、車臺不足なりと。

◉諸氏知らずや、市內の交通機關は紳士金持の爲に設けられたるものに非ず。むしろ中以下の社會に、幾多の便宜を與へむこと、是れ其の大目的なり。紳士でございと言ふ顏付して、電車に乘れぬと、ふくれ返るは、自己の愚を表白するものなり。

◉紳士たらむと欲するもの、叉紳士なりと自覺する者は、馬車を傭へよ、人力車を抱へよ。市內交通機關は卿等をお客樣とは思はざるなり。

◉虛榮心を亡ぼし、自己相當の生活を送らむことを勉めなば、電車に乘れぬ不平もなし、叉人力車夫の苦境に沈む憂もなし。

◉電車に乘らむとする心と、紳士たらむとする虛榮心とは兩立せず。其の結果即ち不平なり。

◉自己の位地境遇さては自己の心を知らば、既に電

車を　ふの必要もなく、餘財あらば人力車なりとも、馬車なりとも、相當の機關を撰ふべし。

◉紳士顔して電車にぶら下るは、羽織袴にて、立ち喰するに異らず。呵々。

＊　＊　＊　＊

◉相撲道の全盛、實に驚くべきものあり。常陸山が荒岩に破られたる、荒岩が兩國に破られたる、梅ヶ谷の常陸山に負けたる、皆なこれ滿都の人々を狂奔せしめたる勝負なり。たとひ大臣が暗殺せられたの報あるも、人心斯くも動搖せざるべし。

◉官祿世襲の徳川時代に於いて、相撲道のみは、實力の競爭を奬勵せり。今の世、情實多く、金箔の使ひ分け盛なるに、ひとり相撲には、實力の角逐以外に、何等の競爭なし。相撲を好むもの、何ぞ夫れ勝負のみに樂を覓めむや。

◉裸體にて戰ふは、これ即ち實力の競爭を代表するものなり。種々異樣の武器を備へて、只これ利得を增大せしめむとする社會に飽きたるものが、回向院の本場所に馳せ行くも亦理なきにあらざるなり。

◉『われ裸にして母の胎を出でたり、また裸にして歸らむ』と云へるヨブをして、吾か角力を一見せしめなば、必ずや歡喜の聲を放てるはらむ。

◉人間は衣服着るべき動物なりとは、小才子の考へたる言にして、實は非眞理なり。人間は元來裸の動物なり、裸にて角逐すべき動物なり。而して今や僅に相撲道に於いて其の眞理の一端を觀るのみ。

＊　＊　＊　＊

◉米の心理學者ゼームス氏は、逝ける碩學スペンサー氏を評して、『彼れはアリストートルよりも、デーカルトに似たり。されど其の人格は、權力に屈服し且つ自我的生活を送れる後者に比して數段の上に在り』との意を述べり。

◉げにスペンサー氏の如く、其の一生を、眞理研究の爲に送り、且つ幾多の犧牲を捧げ、人道の爲に盡す所ありしは稀なり。有ゆる名譽と人爵とを退けて、孤獨の生活を送りしスペンサー氏は、學者の模範として後世に傳ふべし。吾人は氏の學說よりも、寧ろ其の人格の崇高なるに畏服す。

◉さるにても吾が學界、何ぞ夫れ人物に乏しき。學問か世渡りの方便に用ひらるゝ社會にては、到底大なる學者を出し、大なる思想を呼び起すと能はじ。

＊　＊　＊　＊

◉和田英作氏の作『木精』はコランの模倣なるが故に聖路易大博覽會の出品繪畫に加へられざりしと傳ふるものあり。摸倣なればとて、原畫と顚頏するだけの價値を有たば、之れを排斥すべきに非ず。又審査官が此の書は洋人を描きたるが故に目錄に加へざりしと辨解せるも亦意味なき囈語ならずや、

露西亞の小說と日本の小說

秋江生

現下極東の戰雲愈〻密にして、兵火の禍明日にも計られざるに當り、吾人は文學が國民活動の一大養素をなす所以を思ふて、我が國小說作家に向つても亦多少の注意を請はざるべからざるもののあるを感ず。今更吾人は大捉みに日本の小說は露西亞の小說に比べて劣れりなど〻は言はざるべし、さりながら作家の用意と抱負とに到りては暫らく彼我の優劣を檢するの要あり。」

露が無遠慮なる猿臂を伸ばして極東の天地を攪亂し、幼弱蒙昧なる支那朝鮮を恫愒し、恣まに他國の領土を占領して利益を壟斷し、延いて我が國の存在をも危からしめんとするが如き行動は、固より如何なる理由を以つて見るも、また如何なる局外者の地位より考ふるも、遂に傍若無人の蠻行たるに相違なかるべきなり。然れども今日の如く腕力的自我的領土併有的帝國主義が國運開展の國是とせられ、國際的生存競爭劇烈にして、優等國の言動只是條約の基礎をなすといふが如き時代に於ては、露の行動は基督教の假面を被れる歐洲の列强が認めて最上方針となす所にして、鋭意之れが遂行に勉むる、時勢に應じてはまた無理からぬことといふべし。我が日本も何時までか馬鹿正直に融通の聞かざるべき正當防禦の爲めに飽くまでも自由自在に膨脹的努力を逞しうすべきなり。

然れども此膨脹的努力たるや、國家的なるのみならず個人的たらざるべからず、政府的なるのみならず人民的たらざるべからず、軍事的なるのみならず平和的ならざるべからず、淺薄なるべからず根深か〻らざるべからず、紙上の空文たるべからず事實的ならざるべからず、外部的なるべからず心理的ならざるべからず。十年以前露は日本を脅し、極東の平和を破壞するものなりとの理由を以つて遼東半島を還付せしめ、其の後間もなく我に迫りたる理由を無視して自から遼東の地

を占領し、鐵道を敷設し軍裝を施し、未だ曾て一日も膨脹的努力を退轉せざりき、吾人は其の不作法極まる蠻行を憎まざるにあらずといへども、亦た其の勇猛不退轉の努力に就て轉た歎美の念を禁ずる能はざるなり。吾人は日清戰爭以後、露西亞が斯の如くして極東の局面を回轉せる間、日本の國力膨脹を以つて必ずしも拙く後れたるものとはなさず、然れども前後十年の日子を費して今日の大轉機を醸すに至るまでの間、朝鮮に於ける幾度の事變や北清事件の際に處して、我が國の行動云爲する所は常に餘り條文的にして、定まり過ぎたりき、空の空なる條約や定まり文句に信賴するの他捗々しく手も足も出さぬ間に、露西亞は條約の許す範圍内外に於て極力實行に勉め、既に滿州の占領を實にするや、更に北韓の境土を脅して飽くなき併呑の意を表はすに至れり。此に於てか我が國の上下は俄かに驚動し、恰も足下から鳥の翔つ如き大騷をなし、急に彼れに迫つて蠶食の前途を遮らんとす、然れども機既に遲し、假に一時彼れをして猜情を控へしめたりとて、彼れは元來空文に於て安じたり、一時の失敗に氣を落したりするが如き薄志弱行の徒にあらず。我が國の遣り口は餘り事をきまり過ぎるが如き弊あり、條約文さへ交換すれば事が形付くものと思做すが如き癖あり、されは眼前事實の顯はれざる限りは先づ一時を安しとして前途を憂へず、其の代りに事急なるに逢へば、眉に火の付きたる如く遽に猛り狂ふが如き狀態あり。之れ型に嵌つた政治といふもの定規に一任すればなり。

彼れは日本人の多くが有する如く、書くからといつて原稿料を前借し、金を手に握れば直ぐ書いた氣になり、之れからは勉強する積りだといつて時間割を書き付けて勉強した氣になり、さて書く〳〵といひながら書かず、勉強する〳〵といひながら勉強せぬといふが如き意力遲鈍なる者にあらず。彼れは時間割なくとも、試驗は迫らずとも常住不斷勉強し、書いた氣になつて前金を借りて使ふにあらず、書いて而して後頭を下げないで金を受取るが如き國性を有す。

平時に於ては條約の空文に任したるまゝ、事實に關して見向きも遣らず、尻の下に水がツクやうになつて俄に褄を端折つたとて間に合ふべきとか。我が國人は朝鮮人を以て事大主義なりとて嘲けれども、吾人は日本人を以つて思ふたばかりで出來たものと空想する前祝ひ主義の國癖を有するものとして自から誡めざるべからず、西人此の度の事に就き、日本の爲す所を評判

し、最初に於て勝てども、最後に至りて恐らくは十分なる全勝を收むる能はざらんと。我が國に取りては恐らく之れ程痛切なる批評はなかるべし。實に意思氣根の強弱は萬事に於て勝敗の最上要素たるが如く、日露の關係に於てもまた全く然るなり。讀者の知れる如く、斯の如きは本號の中央公論欄に於て、高田浮田の二氏が國民に向つて警告せる所なり。それ日露の問題は意思氣根の競爭問題なり、個人に於ても強意剛健なるものが成功する如く、國際競爭に於てもまた、個人の集合たる國民性の強健なると薄弱なるとに依りて成敗を利鈍をトすることを得べきなり。吾人が膨脹は國家的なると共に個人的なるべし、政府的なると共に人民的なるべし、淺薄なるべからず根深からざるべからずといふは、正に此の點に存す。

國力の膨脹は單に外部的の外交と軍事とに依つてなさるゝものと思ふが如きは、我が政府者の考ふる所たるのみならず、また大方識者政論家といはるゝものゝ凡てが有する考へなるべし。去りながら國家の力を以つてなす所は、もとたゞ淺薄なる形式を作つて人民に與ふるに過ぎず、之れを利用し發展するは國民の甚深なる意思に待つの他あらず。然れども國家の力や政治家の力ば遂に國民性を建造するの能力を有する者にあらずして、之を陶冶し開發する者は固より種〻ありといへども、吾人は之を小說作家にも願はざるべからず。

今日世界の恐怖たる露西亞の國民は個人として、アングロサックソン人などに比べて元來意思強健なるものにあらず、反對に甚だ意力薄弱なる人民なり。然して此の國性民情の弱點を察して此れを改鑄誘導せんとしたるは、實に露西亞の小說作家なりき。即ちツルゲネーフの如きは最も此處に注意して民性の弱點を描き出さんと力めたるなり。

吾人嘗て彼れが作を讀んで單に多大の興趣を感じたるのみならず、北歐半開國の大家、紙底一個の理想を藏し、居然として國性民情の弱點を改鑄誘導せんとするの主義を抱けるを見、我國の現狀に顧み轉た此大家がカーライルの所謂敎者風あるを敬慕せざる能はだりき。其の後三四の作を見るに及び、吾が此の作家に於て見たりと思へりしもの、倍々其の然るを證するを得たり。吾人固より彼の社會人情を知悉せりと斷言すべからず、然れども是等の著作に依つて、少くともそが國性民情の普遍的弱點と、作家が如何に之れに向つて敎訓を與へ、慈愛の嘲語を放ち、之れと共に深く自家の弱

點を病として强意之れと戰はんと力めたるかを知れりき。

弱點とは何ぞや、反省病なり、薄思弱行なり、頭腦空しく明敏にして力行の之れに叶はざるなり。是の如きは十九世紀の初葉以來の通弊にして、感覺銳敏、腦髓緻密なる資質あるものが常に經驗し易き心狀なり、十九世紀の初葉、歐洲の青年がハムレットを讀んで自家の性情と相似たりと思へるもの即ち是れなり、其後幾多の變遷を經過し、現代の歐洲必ずしも痛切なる病を見ずして、漸く北歐露西亞の國性民情に流行するに至り、且つ病狀も稍一變したるを見る。ハムレットに酷肖したりといへるは多血的神經質とも言はるべく、露西亞に在るものは全然神經質と稱し得べきが如し、前者は沈思反省に耽ると共に、一度何等かの刺激に遭ふや遽然として感奮興起騎虎の勢を以て直前するなり、後者は唯沈思反省するのみ、感奮興起は精神に於てするのみ、實行となつて外部に現はるゝこと少く、怯弱退嬰を守るのみ、ツルゲネーフは即ち之れを自家の性情の弱點とし感知したると同時に、國民性の通弊なることを洞觀し、政治家が政治評論を以つてするが如く、宗教家が說敎を以つてするが如く、學者が理論を以つてするが如く、そが天職たる藝術的權威と高貴との力を借りて高邁なる見識と、爭ふべからざる愛國心とを披瀝したるものゝ如し。其の露西亞國民の弱點を道破して、

露西亞人は凡べて事物を容易く見て、實際に當るや徹頭徹尾仕遂ぐるの力行足らず。

口を開くこと一番、直に他人が潜かに己れの言へる處を笑へるにはあらずやと反省して注意の塊となる

と言へるものに眞に近きが如し。

ツルゲネーフは千八百五六十年代露土戰爭の發生せる際に於て反覆之れを國民に敎へたりき。

而して著者は國性民情の弱點を藝術上に具象化せんとするに當り、兩性間の戀愛を借り來れり、蓋し著者の作多くは戀愛を中心とせざる者なし、戀愛を描くや心理的狀態を寫して正さに寫實の巧緻を極む、唯夫れ巧妙なる寫實なるが故に藝術の成功を損せずして、自家が敎訓警世の意を寓する妨げなきなり。而して男女の性格、女性は强意力行、一度戀愛しては情人の爲めには水火と雖も辭する所にあらず、行く處まで行き、爲す處まで爲して吾が戀を滿足せしめずんば止まざらんとす。之れに反し、男性に薄思弱行多く、女性に涙の口說を

聞かされて稍々熱情と決意とを呼ぶものゝ如し。此の如きは蓋し凡べての男女に通有せる性情とはいへ、此の作家の作中神經鋭敏感奮し易き女性は戀愛の熱火に投ぜられて恐るべき決意力行の性格となり、戀の到底滿足すべからざる運命に遭遇するや、男性を激勵して逃亡するか然らざれば死を以つて迫る、然るに男心の秋の空、熱情の深からざる故か、決意力行の足らざる故か、女性の一向感情的盲進なるに比べて冷静なる理性の判斷明にして、利害の打算を思慮すると至れるが故か、男性は左まで熱せざるなり、否な一時に熱して何等かの障害に遭ふや忽然前の熱情冷め果てゝ躊躇逡巡有耶無耶裡に可憐失戀の女性を放棄するを常とす。戀愛が亢進して無謀の擧となるの可否は別問題なり。

吾人は唯ツルゲネーフの作中に斯の如く强意力行の女性を見たり、斯の如く依々不決斷なる男性を見たり、總てハムレットに酷肖したる多血的神經質は之れをツルゲネーフの女性に發見することを得べくして、男性は即ち露西亞國民性の弱點を表現せるものなり。

吾人は露土戰爭の當時に於て彼れが極言教訓したりしものが、直に國民性に効果を與へて國家の膨脹的努力に熱料を供給したりなどゝ速斷せず、さりながら彼れは亞歷山第二世の時代に遭遇して亞細亞方面の經略や土耳其戰爭を遂行したる時代の個人に少からざる反省を與へたることは疑ふべからず。

露西亞の帝王が新都を築き鐵道を敷設するに當りて、無謀極まる獨斷專制を遂げ、他の迷惑を意に介せざるが如きは、もとより政躰や社會の狀態の自から之れを容すに相違なけれども、また個性に强意力行の精神を鼓舞するものあるが爲めなり。

吾人は德富蘆花氏を以つて最も現時小說壇の欠を償ふべき人なりと信ずといへども、世上餘り小說を好まぬ人「や多情多恨」の興味を感ぜぬ人が、妄りに「黑潮」「不如歸」を措いて他に小說の天地なき者ゝ如くいふ說に同ずる能はず、何となればツルゲネーフの如く平凡なる個人、平凡なる出來事を描くも尙ほ巧みに時代の影を宿して、人心に反省自造のヒントを與ふるとあればなり。兎に角何れにしても可なり、吾人は今少しく鋭利なる小說を得んことを望む。新年の文壇に於て見る所の如き者は讀者に痛切なる反省の快味を供せざるなり。

樂人優待論

東儀鐵笛

我が現時の音樂界は實に大天才に渇せり、雅樂は如何俗樂は如何、和洋樂果して調和し得べきか、調和せらるべきとせは、其據るべき標準は如何、或は全く和樂をすてゝ洋樂を採るべきか、抑も國樂制定の方針如何これらの問題は今なほ紛然として決せざるなり、雅樂の保存俗曲の改良はた國樂の制定いづれも現時の音樂界に於て忽かせにすべからざる一大問題なり、しかれども國樂制定の如きは實に至難の事業にして、一朝一夕に決せらるべきものにあらず、大天才、大手腕家を待つて始めて決せらるべき事柄なり、いふまでもなく音樂の技藝は深遠にして、天才といへどなほ且つ多年の修養を遂ぐるにあらざれば、其業成り難し、現時社會はよくこの大天才大手腕を作るへき氣運に適せるか否少なくとも雅樂の保存俗樂、の改良に洋樂の研究に樂人をして講究せしむるの餘裕を與へうべきか、世の音樂家がこれらの問題に對する意見は如何、彼等の多數は概してこれらの問題に關心せざるにはあらぬか、吾人は世の音樂家の猛省を望む、而して世人一般の音樂を視ること頗る冷淡彼等の多くは、其好尙なほ卑くたま〳〵聲を大にして國樂の制定など唱ふるものあるも、これらは深く樂界に對する欲望を述べたるに過ぎざるなり、音樂家またこれらの問題に對して、いかなる方針を採るべきかを心に掛くるものなきが如し、これ誠に其職分を盡さゞるものにして、其罪決して輕からず、されど世人が音樂家を待つこと、今日の狀態にして、長く之を顧みざれば、いかにして天才は生ずべき、いづれの日にか國樂は制定せらるべき、蓋し國樂の制定、そのいふは易くして、行は誠に難したとへ偶然にも天才の出づるありて、たま〳〵美妙なる樂趣を紹介するものありとせんか、樂的智識の幼稚なる世人はいかに之を迎ふべきか。

國樂制定は實に音樂家の大責任なり、自から進んでこれらの問題を決するの勇氣を起すべきは勿論、社會の態度の如きは敢て自家の研鑽になにかあらん、奮勵一番この大責任を負ふて處決すべしとの慨なかるべからず、されど樂人をして、この勇氣を起さしめ、この大責任を竭さしむるの動機は那邊に存するか、蓋し社會一般の同情にあるなり、世人が今日の如く音樂を視るに冷淡なるに於ては、はた音樂家を遇するの餘りに薄

情なるに於ては、到底將來國樂を興すべき天才は現はれず樂人遂に無責任なるに至るは免かれ難きところなり、要するに、吾邦樂を發達せしめ、國樂を制定するの氣運を作らんと欲せば、先づ以て樂人が其天職を盡すに足るべき途を開かざるべからず、社會はよろしくこの大事業を補翼し奨勵するの方法を講ぜざるべからず、されば少なくとも樂人がその職に安じ、其技藝を修養するに充分なる位置を與へ、大に之を優待し、以て他日國樂を興さしむべき準備をなさしむるにあり、蓋し樂人優待は樂界刻下の緊急問題なり、先決問題なりはた實際問題なり。

さて吾が現時の樂界は雅、俗、洋いづれの方面も、名人凋落時代なり、しかもすべて窮境に　せるなり、誠に雅樂家今日の狀態を察するに、彼等が千年の古樂を誇り世襲として傳はれる音樂は、既に業に時尚に適ふべくもあらず、僅かにその名殘を祭禮的音樂として止め、昔し御遊などに侍し奉りし老輩はその盛時を偲びなほ斯樂の再興せらるべき時期あるとを夢想し、さすがに古樂保存の意志堅固に、世々の傳來を尊重して、之を子弟に授け、其系統の全たからんことを、冀へり誠に殊勝の事といふべし、少壯青年の輩に至りてはその歴史的觀念と其修養に刻苦する赤誠の缺乏とにより、斯道の研究を悦ばず、且つ時勢の風潮は彼等を驅つて、今日の生活問題に及べり、故に時代遅れの古樂は一概に前途望みなきものとのみ思はしめたり、これ果して誰の罪ぞ、雅樂の如きは將來吾邦樂を興すべき資料として缺くべからざる一大要素にはあらぬか、未だ全く古樂の傳統亡佚せしにあらず、蓋し其神髓を研究すべき餘地なほ存せり、しかれども老輩の如きはこれより後幾何の餘命ありや、今にしてこの時機を逸せば、將來制定すべき國樂の一要素は遂に亡佚すべし、雅樂の亡滅蓋し遠きにあらざるべし、また之を能樂に見る、幸にしてこゝ兩年以前より、やゝ復古的傾向を生ずるに際し、需要未だ全く衰へず、今なほ老紳？の間に盛行するも斯道の名家と稱するものみなこれ維新以前の遺物なり向後斯樂を繼承するもの果して幾何かある能樂の亡滅また甚だ遠からざるべし、

俗樂界の狀態はいかに、雅樂能樂に比すれば無論全盛なりといふべし、しかれども各流派互に城壁を造り、いづれも自己の樂風をのみ無上のものと思惟し、藝術の系統を保守するといふよりは寧ろ徒らに藝術以外の惡慣習を墨守し、紛爭これ事とし、たゞいかにせば時俗

に投ずるを得べきかを慮り眼前の利慾に惑ひ、將來の進步發達の如きは念頭に置かざるなり。淨瑠璃或は長唄の如きは舊劇の運命と丶もに、この後なほ幾多の望みなきにあらざるも、已に團、菊を失へる舊劇は現在いかなる狀態を呈しつ丶あるか、これはた長久に今日の命脈は維持せざるべし、而して俗樂が將來の國樂制定に貢するの大なるは、蓋し雅樂、能樂以上にあるべきは、論を待たざるなり、彼等は已に現狀を維持するに於て、深く留意することなく、たゞ時勢の風潮にのみ、依賴するものとせば、俗樂また滅亡を免がれざるなり。

更に眼を洋樂界に轉せば、洋樂家の生命たり、職分たるべきものは、社會のいかなる方面にありや、維新以後西歐の敎育制度を模するに當り、音樂を敎科に備ふるの一事は、端なく斯樂の蔚興を媒せしなり、されば彼等の多くは學校に音樂を播發することを專とし、學校以外の社會に對つては、未だ充分なる普及を謀からざるが如し、いかにとなれば西歐の樂趣を直輸入的に普及せしめんと欲するも、今日社會は決してこれを歡迎せざるなり、蓋し邦人の斯樂を研究せる、日尙ほ淺きことと世人がこれに對する智識の幼稚なるとによるにはあらず、苟しくも西歐の樂風を採りて以て、吾が國樂を發達せしめんとせば、彼の樂風を吾が樂籠中のものとなし、更に研鑽を經るにあらざれば、到底邦人の耳に適するに至らざるべし、故に彼等はその修養の困難と耐忍とに勝へず、遂には生活問題より打算し、兒童唱歌の作曲者たり、敎師たり、身を斯道の研究に委ぬるの勇氣を沮喪せしむに至る、洋樂の普及また望むべからざるなり。

斯の如き狀態にして他日吾が國樂は制定せられ得べきか、斯道の研鑽に浮身を窶し琵琶を抱いて泣くの樂人は現今の社會にありては到底得らるべきにあらず、雅樂俗樂の名號は凋落し、洋樂また不振の境遇にありとせば、實に吾が樂界は事實に於て已に亡滅に瀕せるなり、今に於て大に將來の畫策を爲すにあらざれば、吾樂の發達は到底期するべからざるなり。

昔、かの英明なる聖德太子の天下に令して肆に歌舞せしめ給ふ樂工をして世業となさしめ、以て課役を免ぜられし以來、奈良朝の音樂蔚然として起れり、應仁の亂後、京師の樂人流離塗炭に厄し、朝典の廢闕すること久し、德川家康之を憂ひ、招撫年あり、終に先職に復さしむ、朝廷の樂再たび興る、時人以て太平の象と

なす、また「ルイ」第十四世は「ラツリー」を庖量より擢出て、伶官に進め、竟に音樂院長に任じ、音樂の普及を謀らしむ、佛國の樂これより起る、苟しくも國樂の發達を期せんとせば、獨り樂人の手にのみこれを委だね、社會一般が其のなすがまゝに放任するが如きは、眞に吾が音樂の前途を慮るものとはいふべからず。吾人は切に世の識者たり、有力家たる人々の考慮を煩はす。されば吾が音樂界が、擧げて不振の域に陷り、他日國樂を制定すべき方法だに紛然として決せざるは、たゞに樂人が自家の責任を忘れたるものなりと遽かに斷ずべからず、一面には確かに社會が音樂に對する冷淡なるの責めに歸すべきなり。所詮　人の薄志弱行明かに斯道の發達を謀るの能力なきを證せるものなりとはいへ、社會は樂人をして、其職に安んじ、修養を積ましむるに充分なる資力を與へ、大天才を生ずるの氣運を作り、樂人が社會にたちて滿足に自家が大責任を竭くすべき伎倆を發揮せしむるの途を講ぜざるべからず。これ吾人が樂人優待を唱ふる所以なり。

雜評



浮世の相

小梅閑人

▲罵れ、大に罵れ。世には哲學者にして宗教學者を兼ねたるものがある、何に就けても不平で〳〵溜らない、政治も文學も宗教も美術も哲學も倫理も何も斯も御意に叶はぬ、猫がニャーといふのも犬がワンといふのも鳥がカアといふのも、自信と勇氣とに欠乏して居るから氣に喰はぬ。嗚呼罵れ大に罵れ。吾等は暫らく罵るもの丶なす所を見ん。年少にして怜悧ぶるまた愛嬌あり。

▲新歸朝者の一人曰はく、洋行は實に詰らぬもの也。

▲樗牛會は鎌倉に高山公園を造らんとす。エヘン、ワイマルの劇場の前にはゲーテとシルレルとの銅像あり。仕合な事には銅像だけは止めになつたるなり。

▲神秘主義は戀愛文學最好の哲學也。

▲三宅雄次郎嘗て眞面目汚つて曰はく、春畫は誰れも少しづゝは研究して居ると。至言と謂ふべし、人は生れながらにして春畫を研究するの義務あり、吾人今更雪嶺の大なるを思ふ。

▲萬朝報の銀月明治座の後藤又兵衛を賞めチギツて曰はく『春日社頭の場、洋畫の背景と電燈の應用とを以て眞に逼ると云はんよりは寧ろ現實以上の詩境を開きたる夜色は、魂飛び神往くの情あらしむ。松葉子好く作りたり、芳翠子好く畫きたり、左團次翁好く演じたり』と又萬朝報の掬汀は更に馬鹿賞めした後て曰はく「一加工の意義を示して素絹を與へた松葉君、それを染めて縫へる芳翠君、それを着て活動せる左團次君、功は等分に分つべきものである、同人松葉君を揚ぐべき最も不利の地に立てる僕は、畫家と老優とに加へて敢て同君を賞め、併せて春日社頭の場を喝采せる諸君の鑑賞眼を賞めるものである」と、何ぞ夫れスバラシキや嗚呼作者松葉君、畫家芳翠君、俳優左團次君、鑑賞眼を有する見物諸君、劇評家銀月君、掬汀君、君や翁のあるあり、吾が劇界の前途また憂ふるに足らず。

▲伊藤銀月に告ぐ、山縣悌三郎と小杉天外とは同じからず。

▲敘高等官四等　東京高等師範學校教授從六位登張信一郎

▲山路愛山曰はく「彼れは才女の切なる戀にすら其の心を動かすものに非りき。」「待合の女將曰はく『黒岩さんの野暮も餘んまりですねえ。女から艶書を貰つて、それを公にするなんて罪ですよ。』予曰はく『天人論は未だ斯道に於て盡さゞる也。』眞に彼れは戀愛の罪人なり。

▲人、文學博士井上哲次郎の雜誌論文を稱してチヨロゲ、ゴマメの類なりといふものあり。吾人其の何の故たるを知らず。お目出度哉。

▲三十七年間江戸ッ兒の芝居を仕て死んだるは尾崎紅葉也。

▲根が苦勞人にして其の實新富座の俳優を勸むるに過ぎざるは岩谷小波なりといふものあり。蓋し然らん。

▲徳富蘇峯は兎に角新聞記者の大なるもの也。伊藤銀月は兎に角新聞記者の面白きもの也。阿部雨屋は兎に角新聞記者の氣の毒なるもの也。

▲太陽は其の型版の如く兎に角廣き雜誌也。哲學雜誌丁酉倫理諸演集などは其の色に依つて最もよく其の質を標現せり。

貧民の存在

嵐峯

社會問題の絶叫せらてより既に幾年、而かも今日富者は益々富み、貧者益々貧なるは何が故ぞ想ふに世人の所謂社會問題なる者は其の實富人問題のみ、富者攻擊のみ、富者の横暴や實に惡むべく吾人は一日も早く今日の社會より富者の横暴を除かざるべからず、去れど富者の横暴を惡むの極、一方に憐れなる貧民の存在を忘るゝに至りては、吾人は寧ろ社會のため嘆せずんばあらず。

何をか貧民の存在を忘るといふ、見よ貧民の狀態は社會問題の沸騰せるに係はらず、此の進歩だに示さゞるにあらずや、萬年町の陋街には貧兒群をなして惡事研究に餘念なく鮫が橋の破屋には老爺其の病癈の軀を以て猶ほ罪惡の製造に餘念なきにあらずや、是等憐れむべき貧民のために社會は幾何の救濟を施せしぞ、曰く慈善會曰く慈惠院、曰く養育院、曰く孤兒院、曰く何曰く何、其の影全くなきにあらず、去れど影は如何に其の形大なるも只た是れ影たるに過ぎず、救貧の聲如何に大なるも熱誠なき同情なき只た一時の虚名に渴する救貧事業、貧民に取りて何の効かあらん、今の世、社會改良を口にする士、只た富者攻擊のみは務めずして、卿等の他方を顧みよ、援けなき憐れなる貧民は、卿等の來り救はん事を願へり、吁、永久に貧民の存在を知れ。

煙草行商

杖を東臺に曳く者、幾多歷史に富める遺跡を見る前に先づ一群の奇異なる兒童を見るならん、奇異なる兒童とは何ぞ、煙草を行商する山伏小學校の生徒是れなり山伏小學校は隱れもなき貧民學校なり、即ち生徒等は此の行商に依つて一面父兄に資を供し、一面生徒自身他日の資に備ふと、憫然の極にあらずや、貧兒にして一日幾時間を割き、彼等が見て以て殆んど無用視する學校に通ふさへあるに、猶ほ其の間に斯る業に從事せざるべからざる彼等の境遇を憐むと同時に、斯る可憐の兒童に完全に初等教育すら施す能はざる現今の社會を悲む。

去れど吾人は此の憐むべき貧兒の煙草商に對して贊成の意を表する能はず、否な煙草行商は斷して否なり、殊に物もあらうに生徒をして煙草を賣らしむるに至りては益々否なり、況んや行商なる者が一種忌むべき觀

念を小さき腦中に刻み込み、彼等をして貧なる境界を脱する能はざる如き惡影響を與ふる惧れあるに至りては、吾人は天下同情の士に訴へて速かに行商を廢してれに代ゆるに適當なる業を以てし、以て此の憐むべき一群の貧兒をして永久に貧の罪惡を犯さざらしめんことを望む。貧兒此の行商を始めしより既に一年、而かもこれに就て注意を拂ふ人なきは何が故ぞ世は終に貧民の同情たる能はざるか。

平民圖書館

苦學は決して褒むべきの事にあらず、況んや今日の所謂苦學生なる者に對しては吾人多くの同情を濺く能はず吾人は今ま必ずしも是等苦學生のためとはいはざれど金なくして讀書に渴せる者のために平民的圖書館の設立せられん事を望む、

一國の帝都にして僅かに一二の圖書館の外有せざる今日、更に平民的圖書館の設立を希望するは、少しく無理らしき話なれども必ずしも宏壯なる堂屋を建築するに及はず、又た必ずしも金字燦爛たる美本を蒐むるに及はず、破屋可なり、國語讀本可なり、要は只だ金なく書なく、而かも書に渴せる一群の苦學青年のために其渴を醫すれば可なり。想ふに斯くの如きは、只だ富豪一夕の宴費にて事足りなん。

今日の新聞記者

十津川の郷

◎今日の新聞記者たるは、曰く品位、曰く學殖、曰く識見、曰く德望。

◎新柳二橋狹斜街頭、なまめかしき軒提灯の格子を潜りて、衰訴嘆願、漸くにして晝飯又は晩食にありつくか、然らざれば五拾錢の銀貨を押し戴き、叩頭拜謝して出づ、是れ今日の新聞記者の品位なり。

◉源氏の白旗といへば、己が山の神の白ゆもじと心得石炭と酸素と化合すれば、石炭酸と斷定し、英國の首府は巴里にして、獨逸の都はカルカッタ、大伴のやきもちは、夫婦喧嘩の仲裁人、絕代の狂歌師は四方の赤人となす。是れ今日の新聞記者の學殖なり。

近松門左に巢林子を採つて得り比較研究し、貞奴音二郎がハムレットの劇を見てはシエークスピアー亦以つて語るに足らずとなし、チャンバーレーンは尾崎行雄

を模倣せり、チリレンゲ、おたま杓子を以つて大海原の水を掬ふの態をなす、是れ今日の新聞記者の識見なり。

◎新聞屋さん〳〵貴公これ少ばかりて甚だお氣の毒ですが‥‥‥只今御話の事は何分宜敷御頼み申します。斯の如きは是れ今日の新聞記者の徳望なり。

以上は其最も極端なる例を示したるもの、然れ共此以上果して幾何の徳望、識見、品位、學殖を具へたりや今日の新聞社が、福引、懸賞、寶探し、やれ一大新案妙案などと、大聲疾呼して、自ら讀者に向つて御世辭を振捲かねば、新聞が賣れぬといふに至ては、新聞社及び新聞記者の墮落も亦甚だしき哉。

余の見たる新聞記者

吉野川の鮎

◎百聞一見に如かずとは能くいつた。聞くと見るとは大違ひ、大和の吉野の奥のズット奥の、柴の扉の其の中で花の吾妻の都より、親しき友が眞心こめて送り越す一枚の新聞紙を便りに、都の景色はかくやあらむ、議事堂は何處にて、日比谷公園は如何ならむ、王侯將相の邸宅、白馬銀鞍高帽鴉鷺の風采、さては乞丐窮兒の慘狀まで、目に見る如く認めてある筆の痕、之を讀み之を見ては、坐ろ身は花の都に遊べるが如く、具さに其狀況をつくすと共に、かく迄に自由自在に筆の文運ばせ給ふ君はそも、如何なる人にてあるかなぞ、日々に思ひは增す計り、東の空を眺めては、心も玆にあらぬ折りから、父上のさる用事にかこつけて、大鵬の千里一飛び、やつとの思ひでやつて來た。

◎來る早いか、父の用事はそつちのけ早速某の某新聞社を尋ねて、所謂主筆先生に刺を通じた。

◎室は西洋造りの八疊の間、其眞中に卓を置いて嚴然と筆をとつて居つた主筆先生、無雜作にヂロリ此方を向いて極く輕はづみな挨拶、一寸失敬今直ぐ書き終るから。

◎ヤア、君は大和の山猿といふじやないか、これが對話の一矢、隨分と無禮な一言、先生ハイカラーで八字髯を捻ては居るが其僻赤地の襟飾はゆるんで横を向ひて居る。

◎吉野は花の名所じやといふが所謂一目千本とは何處をいふかね。如意輪堂の邊り、大塔の宮が奔竄の跡、吉野はなか〳〵古蹟に富んで居るが所謂眉雪の老僧てはない青二才の君と共に時に筆を停めて、塵埃深き處

に南朝を說くも、亦妙じやないか。

◎既に吉野の話はしてみたが其實先生何も地理を御承知ない、いやさ歷史の一頁も暗誦して居ぬ樣じや。せめては吉野拾遺の一卷位ひと思つたが、是れも空賴み話の進むに從つて先生益々窮する、窮すると愈々浴せかける、ヤア、君は故山丈けに吉野は非常に悉しい、ドゥジヤ、僕の家へ一遍こぬか、豚汁位ひは食さう哩。

◎敎に從て先生の門を叩いた、尤も格子門で間口十間奥行三間、是れて大概の樣子が知れる、間口の廣いものに奥行の深いものはない、表を派手にする程內は段々縮少する。

主筆先生が服裝の立派なだけ妻君の着物が思ひやられる。

◎案內に應じて出て來たのは妻君らしい、みすぼらしい風をした一婦人、顏は蒼白く姿は蚊蜻蜓の樣瘠もしわがれて　　病の樣に思つたがまさか左樣でもあるまい。

◎只今さしかゝつた來客が御坐居ますが、少々御待ちくださいまし、云ひ殘して奥へはいつてたがやがて、こちらへの言葉に應じて定めの座敷へ通つた。

◎此處は六疊、先生の書齋でゞもあらうか、破れた一閑張りの机に、かけた墨硯、其周邊には澤山の新聞がとりちらけてある、政事雜誌もあれば憲法要義もおいてある、讀めるか讀めぬか知らぬが外國の新聞雜誌もちらほら見える。

◎茶が出る菓子が出る(但し最中)烟草盆も出たが一向に先生は出てこぬ、只聞えるのは階上に於ける、來客の怒鳴る聲、先生の溢る言葉。曰く、利子曰く高いの安いの、負けるの負けぬの、訴るの、訴ぬの待ての、の待たぬの話はとぎれ／＼て、能くは聞えぬが、これ丈けな言葉は折々耳を劈く。

◎細君は再び出て來たお待たせ申してお氣の毒ですが今暫く、どうぞ新聞でもお讀みなさつてと茶を入れかへた所へ表にがら／＼と又もや車二三臺の音、强よくかけ込んで、襖障子の開け閉ても手荒く、ガタ、ピシ、何事の始つたかと氣をいらつ間もなく、妻君又もや驅け來り、非常な取り込みですから又出てを願ひます、愁然として頭を垂れたので其儘座を立つ途端に入り來りたる、むくつけき男三人つか／＼と室に入りて押入開きて其處にある簞笥支那鞄等へ用捨もなく封印した。

◎アハレとんでもない豚汁、吉野の話はこれが爲めに

落花紛々。

消極的教育を慨す

津川樵夫

凡そ文明の度進み、開化の實あがるに從つて貧富懸隔益々增大するは、數の免れざるところ、これを古今東西の歷史に徵して明かなりとす。若しそれ試みに、歐米諸文明國に遊ばむか、必ずや先づ其の視線の悉くはこの焦點のために奪はれむ、而して又、これが現象は如何に慘憺たるかに寒心せざるを得んや。

吁!!身は大家高樓に坐し、桂を科へて炊ぎ、玉を科へて食ふの傍ら地中の洞穴より、

我に職を與へよ、然らずんばパンを與へよ、然らざれば死を與へよ。

と絕叫す奇も亦妙ならずや。

是れを我が國に徵するに、浦賀の砲聲俄然夢を破りてより、僅かに三十有七歲、其間長足の進步をなし、今や漸くにして文明の班に列するを得たりと雖、而もこれ素模倣の賜物にして、形式的文明、表面的開化のみ其內容の相伴はざるや實に雲泥も啻ならざるものあり故に、歐米の諸文明國の如く、爾く貧富の懸隔著しからず、さはれ顧みて十數年の昔を追想せば、蓋し思ひ半に過ぐるものあらむ。

夫れ然り、然らば今後の、我が國は遠からずして、斯の如き域に到達するや敢て多言を要せざるべし、豈志あるもの憂慮に堪ふべけむや。茲に於てか吾人は、專ら教育の責任を思ふと同時に、其消極的なるを慨せずんばあらず請ふ以下これを論ぜむ。（未完）



讀者之文壇

養子難

獨樂園主人

●養子難は、元より一篇の經歷談なり、然れども人情の險夷は格別なるものにして、宗教的家庭には、或點

に於ては必用ならむ、故に反省讀者の一顧を煩すも、無益の文に非ず。

◉糊三价のたとへは、決して肥馬輕裘の人の知る處に非ず。古人謗に迯ひ謫居するものありと雖も、怨もし怒もし詩に賦し文に綴り、果ては人の面を見ざれば足れり、然れども親子の間は怨む可らず、怒る可らず、互に相持する不快の感情は、倫理以外の事にて、實驗したるものにあらざれば知る可らず、予は實に此難を再度實驗したり。

◉予は貧力に乏し、而れども學問道樂にて、一日も廢するに忍びず、是れ予が學問の爲めに養子となる所以にして、又養子の爲めに學問の方向を誤りし所以なり啻に學問を誤りしのみならず、無形的に罪惡を造り、無明の煩惱として益宗教的道德に背かしめたり。

◉初度は十九歳の時なりし、空中の蜃氣樓は予が胸中に往來して已まず、今日は花見なり、明日は山遊なり下僕下女に取り圍れ、家内一團に誘はれ、長き春日も夕陽の傾くを知らず、鳥啼き花落ち、菜花十里、青氈萬重、和氣陽々として、日を送りし間は、實に養子程樂なるものはなしと感じたり、無頓着なる予には、氣儘隨意に朝寢もし、晝寢もし、拭ふことも知らず、掃くことも爲さず、萬事野呂間にて只仕事と云へば、書齋に籠り、讀書に餘念なきのみなりき。

◉日を經るに從ひ互に尾を出し合ひ、父は貴樣の如く朝寢しては困る、日の出の前には、必らず起き、掃除萬端に心を附けと云はれ、母は是の通りの暮にて、貨財も無ければ、田畝も無し、唯人の信用一つにて、世計を爲すものなれば、月には少し宛の蓄へも爲すべし、今迄のごとく書生にては困る、家持氣取りにて働く可しと遣り附られ、其れ言葉が應抐なと言はれては、隣りのお三を再拜して笑はれ其れ頭が高いと言はれては、出入の僕に頓首して叱られ、家風と云へる憲法を以て意志の自由を束縛し、先祖傳來の經濟論を以て、厘毛の算位を言はれ、天下の自稱豪傑をして三文の價なきに至らしめたり。

◉骨肉の親子は、恩愛を以て楔子と爲し、他人の親子は義理を以て、楔子と爲す、骨肉なるが故に如何に親は慳貪にても、如何に子は放蕩にても、親は其子を棄るに忍びず、子は其親を忘るゝに忍びず、そは恩愛と云へる情緒を以て結合したれば也、他人の間は唯義理一片あるのみ、故に少かなる働作にても、親は子を疑ひ子は親を疑ひ、親子の間は常に疑の一點あるのみ、

能く此間を維持せしむるものは乃ち義理也、義理既に亡ぶ、家内は勢ひ破裂せざる可らず。

◉予は元素寒貧の書生なりし故に、他人の力を借らんと欲して養子とは爲りたり、然るに學問の方向は常に收縮主義を取り、朝夕の小言は、寧ろ積極主義に增加し來り、五月蠅こと言はん方なし、此處のみに日は照さず、何處の里にか、身を托すること有らむと思ひて終に謀反心を起したり、然れども胸中に秘して色にも示さず、事に託して歸省の途に上る。

◉時に晩秋霜露既に深く、滿山の紅葉錦を織るが如し家人相共に門外に予を送る、丘に到り、皆家に歸らしむ、予は石頭に踞して、始めて鳥の樊籠を脱する如く天地の精氣を呼吸し、思はず養家を見る、嗚呼養家の見納りは此瞬間のみ、視線は端無く、予を送り來りし家人に及ぶ、中に一個の佳人あり、嘻々として路上の花を採て去る、嗚呼此無罪なる佳人よ、汝何の罪ある、汝の心を喜ばしむるも我ならん、汝の眼を泣しむるも我ならん、我は罪惡なるもの也、功名の煩惱は汝を人世無情の谷底に投じたり、許せ容せ人間又相逢の時あらんと、予は實に彼の影を見て涙を落したり、十九歲の少年が、戀の一字を解釋したりしは實に此瞬間なりし。

◉羮に懲りて膾を何とか云へども、予は羮に懲りて猶羮を食はんとするもの也、身貧に志幼に、尙ほ獨立の念に乏しく、常に人に依て事を爲さんとする卑屈心あり、思ふに天下に必らず仁人あらん、何處の果にも鬼は居らず、往時は予少年の時なれば、萬事疎漏なれども、今度は予自ら實地を視察して養子と爲らんと欲せり、偶一財產家あり父は親切なれども少しは恐也、母は陰險なれども少し活也、女は美にして優也、一家は皆予を愛せり。

◉予は茲に新婦論を述ぶるの必用なしと云へども、抑婦たるものゝ性質を察せざる可らず、男女の間は元より肉慾の快樂を求むべきにあらず、唯苦樂を共にし悲喜を分つべきものを以て上乘の快樂と爲す、世には財產を以て其女を迎ふるあり、容貌を以て婦と爲すものあり、學問に門閥に、各其選を爲して、更に性質の如何を顧慮するもの無し、以是少かに二三年の歲月を經れば、瞋恚喧爭の聲は斷へず、兩者往々不快の感を抱きて一生を終る、人間の快樂は果して何處に在る、財產何に爲さん學問何に爲さん、夫婦和睦の道絕へて、人事は茲に終んぬ。

◉予は飽く迄學問の方向を以て悉く注文し、悉く承諾を得たり。

◉予が妻は予が家に於ける唯一の愛女なりし故に、其親の爲めにも之を愛し之を撫せざる可らずと思へり然れども日月の經るに從ひ、兩親に不快の感を與へたり、初めは家内陽々相和し、相樂みたりし、後には相隱くして知らしめず、互に心裡に一物あるが如し、予は實に惑へり、隣人は予に告て曰く、麼は何處にもあることにて、兩親は新夫婦の和睦なるは父母を遠くる原因ならんと思考し、己れの愛女が己れに捧ぐる愛情の過半は、新郎より奪はれたりと邪推する也、唯此れ一个の嫉妬心なりと、予は啞然たり。

◉予が談話の時、家鄉の父母姉妹兄弟等の事を談ずれば、又不快の感あり、隣人予に告て曰く新郎をして家鄉を忘れしめんとする也、義理ある父母と骨肉の父母とを比較せんことを氣遣ふ也、云はゞ人間一日も缺く可らざる、恩愛の情も淡からしめんが爲なりと。

◉予は當時不幸にも激烈なる筋膜炎を煩ひたり、折角の遊學の念も、一時中絶して、唯一個の居候と化したり、予が終生の不幸は此に原因す。

◉久しく同居すれば、互に其缺點を見出し、嫌然の情は自然に掩ふ可らざるに至る、風波を起し、火水を激し、瞋恚疑惑の煩惱は、鬪爭して已む時無し、予は此難症に罹りしより、言はゞ一箇の厄介物として待遇せられたり、予は幾度か枕上の藥器を抛ちたりしかを知らざりし。

◉予は金錢上に於て非常に困難したり、書籍や衣類を密賣して、一時の難を凌ぎたることありし、時に露顯したることありたれど、萬雷の一時に墜落したる如く頭蓋を震駭するに非らずして、戰時敵國に石炭を密賣したる如く、喧々囂々苦言は斷へざる也。

◉予は自ら不運の見として日夜耐忍したるも、日々夜々、妻の切々不言の間に斷腸の情あるには殆んど忍び難し、彼が心中は不憫なる哉、予と舅姑との間に在て言ふ可らざる苦心を積む、予が内事は悉く之を舅姑に告ぐ可らず、舅姑の感觸は悉く之を予に語る可らず、時には茫然として自失することあり、時には慘然として枕頭涙を落すことあるを見たり。

◉予が性は、元來天眞玲瓏を以て、獨得と爲せり、然れども予が養子となるや實に一點の曇りを帶びたり、炎然たる天月は隱れんとしたり、事實は常に予をして不良心を養成する、僞善家と爲らしめたり。

●余は果して一點の不良心を養成したり、嗚呼此一點の不良心實に一生の大罪心也、今に至て思ひ起すも惻然たり、何ぞや其舅姑の速に死せんことを希ふの一心也、死せざれば予が一身に於ける事物は、皆不都合なれば也、今年死す歟來年死す歟、唯一日も速ならんことを望めり、嗚呼天下の子たるもの、其舅姑の死を希ふものは幾何ある乎、予は僭に之を希望したるの一人なりし、恐くは予のみにあらざる可し、凡そ養子たるもの、三重九重の心には、必らず此秘密の惡魔を藏匿するならん、然れども此の惡魔は良心のバチルレンなり、唯外物の誘惑より生ずる也、東洋的の養子は此大罪を造るのバチルレン也。

●親たるもの其子より死を願はるゝ迄、邪見貪慾の念を以て一世を造り何の甲斐ある、財産を積んで殘すと雖も、若し子に嫌然の情あれば半文の錢程も恩惠を感ぜざる可し。

●朝に一畝の麥を種え、夕に破飯の粥を啜る、山家漁村の家庭を見よ、新婦を迎ふる歟、新郎を迎ふる歟すれば、舅姑は直に別家若くは隱居して、一家に風波を立しめず、孫を愛し寺に詣し、澤々として殘年を送る然るに中以上の社會にしては、死に至る迄、總ての權力を維持して離さず、終には五十にして猶家事に干渉せしめざる若旦那を出すに至る。

●人は老ては、漸次に退守主義に陷り、常に進歩主義を抑ふる故に、一家は一國の如く保守黨と、改進黨の團體を並立せしむるに至る、予は往時、ラセラスに父子兄弟を述ぶるの條を讀んで、以爲らく西人は沒人情なりと、然れども今に至て、彼れも二足の動物なることを知れり。

●予が如く不幸なる養子は少かる可し、然れども人間氣魄あるものは決して漫りに養子に行くことなかれ、寧獨立の觀念を養成せよ。

●強て養子を爲さんと欲せば、第一父母無くして、正當の家財を有する一人女の處に行く可し、次は父無き處を好と爲す。次 父母あるとも六十五歳以上の處を好と爲す。此三者を撰はゞ或は可ならん。

●予か隣友、一日予に語て曰く、君が父死せば、僕は一抔を以て祝せん、僕の父死せば、君亦一抔を酌んで祝し玉へと、予は愕然として之を叱したり、然れども叱したる余は、虛飾の僞善家にして、之を語りたる彼は其本心を暴露したるものなり。

●予は常に良心に責められて、此等の魔窟に住するこ

とを好まず、飄然として再び養家を去りたり、而して余は此等の魔窟に赴かざることを誓ふたり。

◉清風月を吹き、迷夢喝然として醒め、一卷の南華に千歳の胸襟を求め、一灶の爐烟に萬古の眞光を認む、快の尤も快なるもの也。

◉彼の養子難の行路に陥り疑惑を抱き嫉妬を起し、喧争煩悶する輩は、此文を讀んて、須く一片の菩提心を發す可し。

三面記事の改良を促す

西澤雲浦

時代反射鏡を以て目され無冠の王候を以て、任せらるゝものは何てあらうか、云ふまでもなく新聞紙てはないか。而も此高き此貴き現今我邦の新聞紙は如何んの狀態であらうか、一の確固たる主義あるなく、一の遠大なる抱負あるなく、只管俗流に媚び、時流に阿り其賣高の少しも多からんことに汲々たるに非ずや。之れ蓋し其維持に困難なるより起因するならんも、而も社會の木擇無冠の王候を以て任ずる新聞紙にして、斯くまで卑屈無定見にならざれば保持し能はずと云ふに至つては誠に氣の毒の至りに非ずや。是れそも其始め其業を計企せんとする人に罪あり、乃ち一時的投機師的考案と不充分不完全なる資本に依て、まゝよ潰れたら潰れといふ盲蛇的算段を以て、恰も棚からぼたもちが落こつてくる樣な考案て着手するのである爲に、其繼續に汲々たる所より、あらぬとも書き、文を舞はし筆を枉げ、只管俗に媚び流に從ひ、以て程度低き讀者の歡心を買はんと務むるのである。少しても其頒布の領分の廣からんことを欲するのである。故にそれが爲め新聞紙として最も必要なる主義本領を滅却し埋沒してまでも、曲筆舞文、見識あるなく定見あるなく、或は御用黨の機關となり、或は營利的の機械となるが積の山てある。之てあるから今の新聞の其趣味の劣さ、品格の卑しきも、自ら明瞭てあるのてある。此の如き狀態に導きしは因より社會の罪もある。乃ち讀者の趣味の程度理解力の淺薄なる所から、新聞も自ら此方面に投じなければ俗受けが惡く、從て維持に困難を來たすのてある。之が新聞の改良を計るには先づ根本の社會から改革しなければならぬ、則ち其趣味品性理解の各方面を高めなければ新聞紙としての天職を忘れたものてある。去れど社會か社會だから如何に立派な高尚な新聞

を作つても、讀みてがなければ到底社會に影響を與ふることも感化を及ぼすことも駄目なのである。故に現今我邦社會の新聞を見る多くの徒は、高尚なる第一面記事や第二面記事の論說や時事問題や文學的方面を見るでなくして、先づ最初にくだらぬ小說を見、續いては三面記事に及び、丸で顛倒して居るのである。只管俗話の如き賤しき淫靡の記事を讀んで喜んで居るのである。政事や教育や宗教の貴重なる方面はとんと打放つて置くのである。何と嘆しい次第ではないか。之れ即ち未だ國民の知識の發達の低きに因由するので、寧ろ之を以て新聞紙を責むるの酷で、社會が下品に導くのである、從て社會の木擇指導者が却て國民に支配せられつゝあるのだ。吾人は此に於て三面記事に付いて聊か注文したい、此の如く社會の多くが三面記事を好んで讀むとすれば、三面記事に就いて記者は大に顧慮せられんことを欲するのである。到底彼等に高尚なる六ヶ敷き漢文句調の社說や論文を示しても、聾に說教何の感化も影響も與へないのである、故に吾人は讀者の過半以上の好讀する三面記事の改良を計りたいのである。現今の三面記事は一般非常に輕視せられたる傾がなからうか、知慮淺き品性下劣の三文記者が多く諮任しておつたのではなからうか。則ち未だ這入りたての經驗の少ない、世情を知らないホヤ〳〵記者が多く此の方に回はさるゝのではなからうか。從て其話題の材料はどんなものであるかといふに、極く下品な見るも嘔吐を催ふす記事を而かも得々と誰れ憚からず書きたてるのである。故に少しく明あるものは三面記事を讀まない。則ち人の私行を發くに非んば淫靡なる情話や淺薄なる話題を材料として全紙を塗沫するのである。從て知慮淺き淫靡なる國民即ち愚夫愚婦は斯るものを好んで讀み、得々として人にも語り自らも亦た喜んであるのである。之れ三面記事以上しか讀めないからである。思へ如何に三面記事なるものが多數讀者に愛讀せられ影響を與ふるぞ。

這般の狀態に陷いれしめしたのは誰の罪であらうか、吾人は言はん之れ新聞の罪であると、三文記者は人の秘密でも發いて、懐ても溫めなければ僅か許りの月給では己が口糊にも差支へるので、況や其他親妻子を有するに至つては、勢此に至らざるを得ないのである。それかあらぬか本誌前號に前田三遊氏の記者優遇の文字あり、誠に至當の言と云はなければならぬ。木葉記者をして此に至らしめたのは誰れの罪であらうか、吾

人は言はんとす、其社長の罪なりと。此の如き讀者の多き貴重なる三面記事を輕卒に看過し、徒に中以上の比較的德ある知ある士の讀む論説や社説に力を入れ、却て讀者多き感化多き三面記事を輕する風の存するは改めて貰いたのである。吾人は此に於て先づ三面記事の改良を計られんことを要求するのである。從來の惡德を勸むるが如き記事報導に改良を加へ、其擔當記者は從來の如き品性の下劣なるものにあらず、主義あり德望ある立派なる記者を此方面にとり、成るならば主筆位が此方に擔任し、記事報告を精選し、徒に從來の如き淫なる記事や、淺薄なる話題を以て貴重の紙面を埋むるなく隱微の間に勸善懲惡含蓄する高尚なる、各階級の程度に應じたる、興味ある新記事を滿載し、出來得べくんば昔譚や諷刺ある滑稽的記事などを毎日一篇位づゝ載せてもらいたいのである。くだらぬ情話や淫語などを可成芟除し、もつと興味ある話題を探偵し、以て好讀者の多き三面を埋められんことを、之れ社會教育のため國家の發達上、將た國民の進歩上、ひいては新聞紙が社會の耳目たる指導たる天職を盡さるゝてあらうと信ずるのである。宜しく一社の社長主筆たる賢名なる諸氏、此に御注意あつて三面記事改良に着手せられんこと、是れ吾人の囑望に堪えざる所以なり。

短文

室内遊戲に就て

▲最も適當なる室内遊戲として吾人は藤八拳を推選する。歌留多トランプは衛生に宜しくない、圍碁將棋は頭腦を勞し、時間を空費する憂がある。然るに藤八拳は第一娛樂的なると同時に體育的である、第二日本家屋に適し且つ何等の器械を要せない、即ち手二本さへあれば善いのである。第三勝敗を決する長時間を要せざること。第四男女共通の遊戲であることに於て恐らくは之れ以上の室内遊戲はなかろう。吾人は多年この藤八拳を我國青年男女間に流行せしめんと希望し居れど、悲哉從來藤八拳は重もに酒席に弄ばれし故に、三味線と同じく兎角士君子間に蔑視せられて居るから誤解を招かんことを恐れて、今に之を公言するに躊躇して居るのである。實に遺憾の次第である。勿論吾人は之が學生間に行はしむるときには從來の樣な柔弱なる婦女子的なる遣り方を止め、活潑に規律正しく一種の室内體操として之を行はしめたいのである。

（函館一教員）

課題

▲讀者が愛讀の書に就いて（二月十五日）

▲和洋料理に就いて（三月十五日）

本號は短文僅かに一。盛んに讀者の投書を仰ぐ

新刊批評

▲國文論纂

國學院編纂
大日本圖書株式會社發兌

國學院に於て斯道の諸學者が講演したるを集めたるもの、範圍は汎く法制國史國文の諸顯にわたり落合直文氏の「奈良朝の文學」關根正直氏の「平安文學につきて」、又同氏の「小說の歴史」等もあれば本居木村黒川諸大人の歌論に關する論文もあり。殆んど斯學に關連する諸題を網羅し盡せり。學者の好參考書といふべし。(定價貳圓四拾錢)

▲進化論講話

理學博士　丘淺治郎氏著
開成館發行

堅牢美麗、八百頁を越ゆる大冊子なり。著者の「はしがき」に曰はく「本書は成るべく廣く進化論を普及せしめたいとの精神で著したもの故、生物學上の素養がなくては到底解らぬ様な事項は、一切省いて置いたが、斯様な事項を略しても、進化論の骨髓だけを了解するには、少しも差支へはない。抑進化論は十九世紀中で人間の思想に最も偉大な變化を起した學問上の原理で、今日普通の教育ある人は誰れも心得て居るべき筈のものである云々」と。然り、進化論は實に十九世紀以來の思想文物に最も深き影響を與へたるものにして、如何なる種類の人と雖も之れを知るは面白く且つ有益なる事なり。今丘氏の「進化論講話」の如き平易流暢なる好著の出でたるを機とし、須らく繙き見て愉快なる科學知識を養ふべし。

吾人特に之れを學者ならぬ通常人に望む。(定價貳圓五拾錢)

▲新小說

春陽堂發行

島崎藤村の「水彩畫家」、菊池幽芳の「なさぬ中」、中村春雨の「前科者」小杉天外の「うつり氣」、後藤宙外の「魂のありか」五篇を收む。中に就きて水彩畫家最も優れたる由なれども吾れはしか思はず、藤村の他の作、一般の小說に比して寧ろ劣作なり。或は構想を道義的に賞めたり、詞章の苦心を說くものあれども、吾れはさうとも思はず更に面白くもなし、傳吉夫婦は稍々可し、聞けばお袋は寫實の由なれども、感心せず。吾れ小諸を知られば斯樣な人が世にあるないとの斷言も出來ず。凡人小說不可なけれとも出來ばへの凡なるば取らず。

春雨の「前科者」はサラ〳〵として「水彩畫家」のダレたるに比して優れり。此の人の性格は毎時もながら女性に成功す、お福は作中に於て最も同情を引く。作家は之れから一層女性を上手に描くべき義務がある。捨三が僅かのハシタ錢の爲めに三ケ月ばかり臭い飯を食つたからとて近所合壁さては鼻垂れ小僧にまでも嘲けらるゝといふはチト受取り難し。同じ僅かの錢でも之が盜んだとでもいふなら必ずしも無理ならねど、多寡が村の小博奕の爲めに此處に立ち到るとは不合理なり。此の處春雨君の道德標準が高いなどゝいふ場合にもあらざるべし。尤も捨三が捨鉢になつてお福に酒を買つて來いといひつける處などは曾て讀んだるゴルキイのオルローフに酷似したる點あり。又トルストイの作にも之れに髣髴たる想のものありとか。兎に角に此の作者は珍らしし、他の三篇はまだに讀まず。

三宅、井上、尾崎、岡倉、島田、姉崎、登張諸氏の「譚叢はザツと讀む

も損なし。但し「紅葉の追悼演説」は皆面白し。島田三郎君の夫人は聞く程の美人でもなさゝうなり。好男子姉崎正治君の寫眞小さきは惜むべし。岡倉覺三君の服裝と室の裝置とは頗る貴族的なれども態度は甚だ粗野なり。井上博士の態度「ヤア」と快活にいひさうなり。本能宗の開祖登張從六位の君は寫眞で見ただけでも欲しい樣な食べたいやうな可愛きお顏樣を持ち玉へり。右は甚だ附贅の文字なれども新に入社したる山岸荷葉の君が撮影を償ふ爲めなり。

▲小扇

大阪　與謝野晶子著　金尾文淵堂發行

例に依つて厭に氣取りたる本なり。吾人は元〳〵此一派の和歌を好かねども、歌界の廣きより見れば大に歌ふべし、大に本を賣るべし。(定價三十五錢)とはまた大に高し。

▲獨立評論

山路愛山の獨立評論社

「萬朝報及び黑岩淚香」は痛快を極む。愛山卷頭に書して曰はく「余は今年に於て更に多く意を人物研究に用ゐんことを欲す。」と、至囑〳〵。

▲女學雜誌

同社發行

古い話だが妙な女學雜誌もありたるものなり。されどまた面白い雜誌なり。」

其他

●帝國文學●教育時論●六合雜誌●太陽●實業の日本●日本人●新人●東京教育時報●教育報知●警世●東洋學藝雜誌●精神界●新聲●國學院雜誌●歷史地理●丁酉倫理講演集●哲學雜誌●▲育●東洋哲學●慶應義塾學報●中央農事報●平民新聞●教育學術界●妙宗●明義●大日本私立衛生會雜誌●商業界●ホトヽギス●史學雜誌●教育公報等の寄附を辱うし、紛々として實際見るに遑なし。



教界偉人叢書

發行所　東京市本郷四丁目五番地（電話下谷二〇二九）　文明堂

従來教界に於ける偉人の傳記、少なきにあらざるも、其の多きは荒唐神怪に亘り、且つ組織秩序なく、叙事の繁簡其の當を得ず、偉人の眞面目果して何の邊に在るかを知るに苦み、二十世紀の今日に於て人心に感化を與ゆるに足らざるのみならず、却つて厭棄の念を起さしむるものなきにあらず是れ實に教界の一大缺點と謂はざるを得ず、吾人敢て其力を圖らず、茲に教界偉人叢書の發刊を企て、現代の諸大家に乞ふて確實なる傳記を編述し、大に偉人の眞面目を發揮して以て、教界の不備を補ふと同時に、又修養感化の資料に供せんことを期す、本叢書は約二十五編を以て完結し、毎月平均一編宛を發行する豫定にて、其中既に確定せる分、左の如し

弘法大師傳（既成）　小野藤太氏著
親鸞聖人傳　文學博士　村上專精氏著
馬鳴龍樹傳　文學士　常磐大定氏著
聖徳太子傳（印刷中）　境野哲氏著
道元禪師傳　加藤咄堂氏著
菩提達磨傳　文學博士　井上哲次郎氏著
釋迦牟尼傳　文學博士　松本文三郎氏著
西行法師傳　濱口惠璋氏著
天台大師傳　文學士　村上龍英氏著
法然上人傳　望月信亨氏著

此他、南條博士、前田博士、高楠博士、姉崎博士、近角學士、釋宗演師、大内居士、高島、富田、小林、峰等の諸大家も大に本擧を賛せられ、追て執筆、若くは校訂せらるべき、快諾を得たり。

洋裝菊版二百頁以上三百頁以内。　各上冊製價六拾錢並製價四拾五錢

教界偉人叢書第一編既成

◉弘法大師傳

▲小野藤太氏著
▲一月一日ヨリ發賣
▲洋裝菊版二百二十頁
▲並製四拾五錢郵稅八錢
▲紙質精選印刷鮮明
▲上製六拾錢郵稅十錢

投稿規定

毎月十八日を以て編輯總締切日と致し候に就き何卒それまでに着する樣願上候猶投稿諸君は**住所記入**を御忘れ無き樣被成下度候宛名は東京市本郷區駒込西片町拾番地反省社

書籍の取次

愛讀者諸君の便宜を計りて今後本社にて書籍の取次を致し候東京市内にて發行の書籍は總て正確迅速に取次可仕候に就き申込の諸君は書名著者發行所等を認め代金及び遞送料を前金にて御送り被下度候

中央公論定價表

		郵税共
一冊	金拾貳錢	金拾參錢
六冊	金六拾五錢	金七拾壹錢
十二冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓卅貳錢

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を拂渡局所を**東京駒込**局と指定せられたし弊社印鑑は駒込支局へ差出有之候に付決して途中にて盜取せらるゝ憂なし
一郵券代用の場合は必ず壹割增のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし
一御拂込み金額の端金の場合には左表に準し御勘定可致に付御注意相成たし
一金七拾壹錢以下　一部金拾參錢の割
一金壹圓參拾貳錢以下　一部金拾貳錢の割

都下大賣捌所

神田表神保町　東京堂
神田裏神保町　上田屋
本郷四丁目　文明堂

明治三十七年一月二十九日印刷
明治三十七年二月一日發行

發行兼編輯人　武田穎松
印刷人　清水金右衛門

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
發賣所　東京市本郷西丁目五番地　中央公論發賣所
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

中央公論　毎月一回　明治卅七年二月一日發行

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

發行所（電話下谷九一九）東京本郷區本郷四丁目五番地　本社事務所